
小野上明夜
Meiya Onogami
光を欲する暗黒星
イノセント・スター
ビーズログ文庫

B's-LOG BUNKO

イノセント・スター

光を欲する暗黒星

小野上明夜
Meiya Onogami

ビーズログ文庫



イノセント・スター

光を欲する暗黒星

小野上明夜
Meiya Onogami

ビーズログ文庫

Contents

序章　太陽との出会い——007
第一章　六等星と暗黒星——016
第二章　おかしな道行き——057
第三章　天才たちの憂鬱——126
第四章　僕の大切な、大切な——166
第五章　輝かぬ星の王——205
終章　春はまた来る——243
あとがき——253


グランカル・アミテージア
エリッセの担当教師であり恩人。
一等星・カノープスの称号を持つ。
エリッセ・リトラーユ
超不幸体質で、万年六等星の少女。
突如現れたディガンに
拉致されてしまうが……？
ディガン・マキナウス
エリッセにより封印を解かれた『暗黒星』。
一等星・ベテルギウスの称号を持つという。
光を欲する暗黒星
登場人物紹介



ティリス・エーデ

ハーシエルを担当する
＜導きの灯＞星団の教師。



ハーシエル・ディファリア・トールズ

百年に一人の天才と呼ばれる少年。
最強の一等星・シリウスの称号を持つ。



ルトエ・メーセル・ラ・レドレリカ

レドレリカ王国の現国王。
聡明ながら、生まれつき病弱。



ラン七・リトリス

＜導きの灯＞星団の教師。
おっとりと毒を吐く。

＜星＞

巡る三つの太陽と三つの月の光を弾き返す力＝＜煌＞に応じて、様々な奇跡を起こすことができる能力者。
最高位の一等星から、六等星までの階級がある。

レドレリカ王国

世界有数の＜星＞の産出国家。小国ながら豊かで、南北戦争の勝利に貢献したことにより、一等星の称号を五つ所持している。

イラスト／さらちよみ

序章　太陽との出会い

日頃から人気のない村外れの共同墓地は、早朝ともなればさらに人気がない。

墓守もまだまどろんでいるようなその時間に、ひとり佇む少女の頬を冷たい風が撫でていく。肩先まで伸びた淡い金色の髪と、薄紫のワンピースの裾が頼りなく揺れた。

十にも満たない少女の瞳と同じ色をしたそのワンピースは、よく見ればあちこち汚れたり破けたりしている。なまじ生地の色が薄いだけにあらが目立ち、今後世話になる人と初めて会う日に相応しい一張羅ではなかった。

けれど、今日だけはこの服を着ていたい理由があった。

「お父さん、やっと私を引き取ってくれる人が見つかったよ」

まだ盛り土も新しい墓に向かって、少女は切なく微笑んでみせる。

「カーヌを出るのは初めてだからちょっと怖いけど、な、なんとかなるよね！　お母さんがいなくても大丈夫だったんだし、お父さん、いなくなっても、私、ひとりで……」

明らかに無理をして、亡き父に強がってみせる少女の背後で唐突に若い男の悲鳴がした。

「うわっ!?」

「え……、あっ、きゃきゃきゃあああ!?」

びっくりして振り返った少女の声が跳ね上がる。生まれ育った小さな村の人間ではない、おそらくもっと都会から来たと思われる青年への驚きのためではない。

足を滑らせた彼の靴先が散らした泥が、ワンピースに盛大な染みを作ったためだ。

「ご、ごめん！　大変だ、ひどく汚してしまったね……」

自分も白い上着を泥まみれにした青年は、ひとつに縛った長い黒髪を払いながら、申し訳なさそうに話しかけてくる。

「あ、い、いえ、大丈夫、です。どうせ、元から、汚いし……」

初対面の年上の男にいかにもすまなそうに謝られて、少女は口に出してそう謙遜した。

しかし涙は理性を裏切って零れ、汚れたワンピースにさらに染みを作ってしまう。

「あの、ごめんなさい、私……あの、違うんです、平気だから……」

自分の涙に動揺する少女をしばし無言で見つめた後、黒髪の青年がゆっくりと膝を折った。そのため彼の服はもっと泥まみれになってしまったが気にした風もなく、少女と眼の高さを揃えると、言葉を選ぶ調子で話しかけてくる。

「――本当にごめん。気を悪くさせたら申し訳ないけど、君には他に着る服がないのかな。もしそうなら、僕がお詫びに別の服をプレゼントしよう。同じ色がいい？」

優しい光をたたえた切れ長の黒い瞳に、どきりとした。屈んだことで見えるようになった首元のチョーカーに、記憶のどこかが刺激されるのを感じた。

だがそれ以上に、彼が自分の反応は貧しさゆえだと思い込んでいること。そして単に服が汚れたなら買い換えればいい、と考えていることを悟り、少し悲しくなる。

「いいんです。この服じゃ、なきゃ。お父さんが、くれたものだから……」

うつむいてしゃべる少女の頭に長い影が落ちる。青年が立ち上がったことに気づき、怒らせたのかと思って怖くなった。

しかし降ってきた言葉も声も、ひどく優しいものだった。

「何度も失礼なことをしてごめん。とても大事な服なんだね」

優しい、見ていてつらくなるほど優しい笑みを浮かべた青年の全身が、清冽な白い光を帯びた。

「天空の覇者、太陽が一、始原の黎よ。時よ逆巻け、あるべき形に還れ」

ただ今中天の位置にある太陽の名を織り込んだ詠唱により、清らかな光が少女の全身を取り巻く。あっという間にその光が消えた時、さっきワンピースに跳ね飛んだ泥はきれいに消えていた。

「これでいいかな。他のところも直したほうがよければ、そうするよ」

思い出が残っているのかもしれないからと、他の部分には手をつけないでくれたのだ。

だが幼さゆえに、気遣いに満ちた行動への感謝よりも、初めて見た奇跡に眼を奪われてしまった。

「お兄さんを、一番の太陽が、輝かせてくれた……」

青年の向こう、青空の彼方に浮かぶ三つの太陽のうちのひとつが、彼に光を与えてくれた。それがなぜか、当たり前のことのようにはっきりと分かったのだ。

「お兄さんは、〈星〉なんですか？」

単刀直入な指摘よりも、青年は彼女が奇跡の仕組みを瞬時に理解したことに驚いた様子だった。

「……すごいな。その歳でもう、空の羅盤の様子が分かるんだ。制御されていない〈煌〉の流れを感じて来てみたけれど、君だったのか……」

どこか納得した様子の青年の声に交じり、遠くから今度は知っている村人の声が聞こえてきた。ややいら立ったようなその声は、少女の名前を呼んでいる。

「いけない！　あの、ごめんなさい、もう行かないと」

ぺこりと頭を下げ、その場を去ろうとした少女の手を強い指が摑む。びっくりして立ち止まると、黒髪の青年が黙って見下ろしていた。

「驚かせてごめん。もう少しだけ、話せないかな」

「ご、ごめんなさい、もう本当に行かないと。私、今日この村を離れるんです。お父さん

が死んじゃったから、遠くの街に行くことになっていて……」
最期の別れだからと墓参りを許されていたのだ。青年の様子が変わったことにも怯え、逃げようとする少女に質問が重ねられる。
「お母さんは？」
「……私を産んですぐに、死んじゃいました……」
お母さんはもう納骨堂なんです、と墓地の隅にある石造りの小屋を示してみせる。貧しい村では墓場の面積に限りがあるので、死んで時間が経った者は納骨堂に入れられるのが常なのだ。
青年は一瞬傷ましそうな表情になった後、さらに尋ねてきた。
「遠くの街って、そこに親戚でもいるのかい？」
「いえ、親戚はもう誰もいないんです。でも、とにかく若い女の子なら引き取ってくれるっていうお店があるらしくて……」
親切ですよね、と嬉しそうに笑う少女を見つめる青年の顔が強張った。彼の怒りを感じ取り、びくびくしながら言い添える。
「わ、私はまだ七歳ですけど、お料理とかも少しだけならできますから、がんばって働くつもりです……」
「……なるほど。その歳でそんなところへ、行かせるぐらいなら……」

何か決意した様子の青年が、首にかけていたチョーカーを軽く引っ張った。
そこに下がった栄えあるひとつの輝石が、少女の瞳をまばゆく射る。
「名乗るのが遅れたね。僕は一等星・カノープスのグラシカル・アミテージア」
顔つきまで改め、彼はまずそう名乗った。
「〈導きの灯〉星団で教師をやっているんだ。よければ、君の名前を」
「――きゃっ、きゃああっ！　一等星!?」
明かされた身分に仰天し、少女は大声でグラシカルの言葉を遮ってしまった。ついでに興奮して振り上げた足が跳ね飛ばした泥が、グラシカルの服にすべて命中したがそれにも気づけない。
眼前で繰り広げられた奇跡のことも、首にかけたチョーカーのことも、村の大人たちから聞き知ってはいた。だがまさかこんな大物が、こんな田舎の貧しい村に来るとは思わなかったのだ。
「きゃー！　きゃーっ!!　ご、ごめんなさい、私、失礼なことをいっぱい……!!　ここには〈星〉なんかいないから、もしかしてって思ったけど、すぐには分からなくて……!!」
「いいんだよ。分からなくて当然だし……、それに〈星〉に恵まれたこのレドレリカで、周りに他の〈星〉がいないというのはとても貴重だ」
慌てる少女を安心させるように、グラシカルはまた優しく笑った。派手ではないが品良

く整ったその容貌に今ごろ気づき、赤くなる少女の手を優しく握り直して、
「改めてこんにちは、カーヌの『一番星』。よかったら、僕と一緒に〈導きの灯〉に来ないか。――ずっと、君のような人を探していたんだ」
「グラシカル、さん、が、私なんかを……？」
発音し慣れない名前をおずおずと呼ぶ少女に、グラシカルは厳かな声で誓いを立てる。
「そうだよ。これからは、僕が君のことを守ってあげる。……まあ君ほどの能力の持ち主なら、すぐに昇星試験に合格して、あっという間に僕の手なんか必要なくなるかもしれないけどね」
染み入るような微笑み、穏やかに語りかける声。ひとりぼっちになったばかりの少女の胸に、それらは太陽のごとき強さと暖かさで刻まれた。

そして、運命の出会いから丸二年。
「ご、ごめんなさいグラシカル先生！　あの、きき、緊張して、教室、間違えちゃって……!!　試験官も来ないから、おかしいとは思ったんですけど……!!」
「うん、君にだけ、なぜか試験教室変更の知らせが来てなかったんだね。だけど去年の怪我のこともあるし、今年は見送ったほうがかえってよかったかもしれない。あんまり気に

しちゃだめだよ」

丸三年。

「ごめんなさい、ごめんなさいグラシカル先生！　実技はまあまあだったんです、筆記試験は全力を出せたつもりだったのに……!!」

「うん、そうだね、答えが全部一個ずれていたね。合っていれば間違いなく合格できたはずだったんだけど、やっぱり認めてもらえなかった。……あとごめん、実は実技も不合格だったんだ」

四年。

「ひどい！『運を引き寄せる力も〈星〉の素養のうち』なんて試験ひどい!!　食中(しょくあた)りで受けられなかったから不合格なんてひどいッ!!」

「パンしか食べていなかったのに、何に中ったんだろうね……とにかく、試験傾向が来年から変わることを祈ろう」

五年。

「何も食べずに……、がんばっ、た、のに……」

「……だから落ちたんだよ。とにかく、水粥でも作ってあげるから、少し休みなさい」

六年。

「だって、教科書に書いてあったことをそのままやっただけなんですよ!?　それが間違いだなんて……!!」

「確かにあの乱丁はひどかった。僕もそう思って、抗議したんだけどね……今年はほら、例のハーシエルくんの試験結果が、あまりにもすごすぎて……合格基準がものすごく高くなってしまったんだよね……それと、星団長に向かって攻撃系の〈煌〉を放つのは、いくら教科書に書いてあってもおかしいと思おうね？」

七年。

「ハーシエルくん、実技も勉強もめちゃくちゃできるのに……」

「……教える才能は、あまりなかったみたいだね。あ、彼は今年もトップで合格して、二百年間空位だったシリウスに収まったよ」

そうして、気づけば八年の月日があっという間に流れた。

第一章　六等星と暗黒星

石造りの窮屈な地下室の闇を照らしていたランプのひとつが、突然弾けるように割れた。

「きゃあああああったぁっ!?」

「うふふふふ、あらあら～」

同時に情けない少女の悲鳴と、のんきな女性の笑い声があたりに響き渡る。

「ううん、これも不良品だったの……？　これで三個目……どうせ壊れるなら、光を閉じ込めた時点で壊れてよう……」

砕けたランプを眺め、悲しげに眉根を寄せているのは、肩先で切り揃えた淡い金の髪とすみれ色の瞳を持つ少女である。

十五歳という年齢を考え、将来もっと美人になることを期待しよう。優しい男ならそう逃げるだろうし、口の悪い男ならはっきり「十人並み」と言いきる程度の容姿だ。

だが彼女が普通の少女ではないのは、服装を見れば一目瞭然。

かっちりとした黒いジャケットの袖口と、スカートの裾には一本の白いライン。首元には等星石と呼ばれる、六つのきらめく輝石が連なるシンプルなチョーカー。

ここレドレリカ王国の国民ならば、この少女が〈星〉と呼ばれる異能者であること。そして〈星〉たちの学舎である星団〈導きの灯〉の生徒だとすぐに分かる。……普通の人間ではないが、大したこともない〈星〉だということも、すぐに。

「……で、でも、大丈夫ッ！　えーと、あっ、あったあった!!　ふっふっふ、終焉の夕の光を集めたランプはまだあと二個……!!」

「まあ、さすがエリッセちゃん、貫禄の引きね～。フィスタス商店謹製の集光ランプから、それだけの確率で外れを当てるなんて～」

準備に怠りはない、と部屋の隅に並べてあった予備のランプを持ち上げたエリッセの背に、ほわほわとした口調で嫌味が投げつけられる。

「……ランゼ先生、ちょっと黙っててもらえますか……？」

心底嫌そうなエリッセを笑顔で見つめるのは、二十代後半と思しき穏やかな印象の女性だ。緩く波打つ明るい栗色の髪を背に流した、一見地味な佇まいながら、豊かな胸元はさり気なく強調されている。

同性としてそこはちょっぴり羨ましいが、エリッセが本気で羨ましいのはもっと上。

『普段はちょっときれいなお姉さんって感じなのに、たまにどきっとするほど色っぽい』

と評判の顔でもなく、ランゼの首にかかったチョーカーだ。

エリッセの視線に気づいてか、ランゼは二つの等星石が光るチョーカーをこれみよがしにつまみ上げてみせた。

「なんで？　褒めてるのに～。私ね、エリッセちゃんの諦めの悪さだけは本当にすごいと思ってるの～。八年も〈導きの灯〉で勉強して、いまだ六等星なのはあなただけだもの～」

巡る三つの太陽と三つの月に支配されたこの世界には、時折それらの光を受け、己の望む奇跡として跳ね返す能力を持つ者が生まれてくる。彼らは〈星〉と呼ばれ、その跳ね返す力、すなわち〈煌〉の大きさにより六つの階級に分けられていた。

〈星〉たちが常時身に着けることを義務づけられているチョーカーが、彼らの階級を示している。最高位が等星石ひとつの一等星、最低位が六つの六等星。

特に一等星は全世界で二十一人と定められており、特別な称号を与えられている。

〈星〉として目覚める年齢には個人差があるが、多くが十歳前後。エリッセも覚醒だけは平均より早く、七歳で師であるグラシカルに見初められて星団入りした。

だが八年勉強すれば、中には教師の資格を得られる三等星になる者も出てくるというのに、エリッセはいまだ昇星試験に合格したことがない。すなわち、万年最低位の六等星。

「あ、訂正するわね～。限界を悟って、自主的に出て行かなかったのはあなただけ～」

余計な訂正までされて、ランプを抱えた指先に力が入る。お馴染みの不幸の襲来を察

したエリッセは、足を踏ん張って余計な力を逃がすという機転を利かせた。
結果、正しい位置に設置していた別のランプを蹴飛ばして壊した。
「うえええええええんこれ替えあったっけえええええ」
半泣きで替わりのランプを探し始めたエリッセを、ランゼは微笑みながら優しく見守っている。あくまで見守っているだけで、いっさい手を貸す様子はないが。
「エリッセちゃん、先生待ち疲れちゃった～。夜更かしは美容の敵だし、今日はもう寝ていいかしら～？　まあこの部屋の借用期限は、明日至高の陽が中天にかかるまでだけど～。そしてこの部屋以外でこんな大きな術を使ったら、たちまちばれると思うけど～」
「だったらちょっとぐらい手伝ってくれてもいいんじゃないですかねえ!?　私の不運も、空の羅盤の状態も、先生にはよく分かっていることでしょう!?」
エリッセだって仮にも教育を受けた〈星〉であるから、空の羅盤と呼ばれる六つの恒星の位置を測る能力を備えている。いいかげん遅い時間になってしまっているのは、地下にいようとも太陽と月の位置で分かるのだ。
だが逆切れして怒鳴りつけてみても、それが堪えるようなランゼではない。「生徒の自主性に任せるのが、〈導きの灯〉の伝統なのよね～」と、こんな時だけまともな教師面だ。
「ううい、いいもん、六等星も今夜までなんだから……！　そうしたらもう、私のグラシカル先生には近づかせないもん……!!」

砕けたランプの欠片を小さな箒で片づけながら、エリッセはひそかに復讐を誓う。ランプの修復ぐらいなら己の貧弱な〈煌〉でもできそうな気はするが、今は少しでも力を温存しなければならない。

――長い間待ち続けていた、今夜がついに満願成就の日なのだから。

「何もしないならしないで、自主退学をすることになるかもしれないものね～」

「〈煌〉も使わず私の心を読むのやめてもらえますか!?」

術の詠唱をした様子もないランゼの突っ込みに怒鳴り返した瞬間、手をすっぽ抜けた箒が無事なランプを直撃した。

地下室の闇を照らすのは、高い位置に掲げられた三つのまばゆく力強い灯り、同じく三つの穏やかで柔らかな灯り、そして散りばめられた無数の小さな灯り。

それぞれが夜空の闇、三つの太陽、三つの月、きらめく星々を表現しており、すなわちこの世界そのものの縮図を示す。

「や、やっと準備できた……」

人目を盗み、ちまちまと準備を進めて早数ヶ月。ようやく整った「舞台」を眺め、エリッセは長い長い息を吐く。

「まあ、結構立派な星海図～。万年六等星のエリッセちゃんにしては上出来よ～。正直私なら十日でできる準備だけど、できたことだけは褒めてあげる～」

相変わらずとはいえあまりの態度に、エリッセは思わず尋ねてしまう。

「せ、先生は、いくら私の担当ではないとはいえ、教師ですよね……？　伝統あるレドレリカ王国、一等星シリウスを擁する名門星団〈導きの灯〉の、教師ですよね……？」

エリッセの精一杯の皮肉に、ランゼは無駄な色気を振りまきながら答えた。

「エリッセちゃん、あのね～。先生はもちろんとっても優秀な〈星〉で、教師だけど～。だからこそ、同じく才能ある〈星〉の足を、劣等生が引っ張るのは我慢できないの～」

生徒と同じく、〈星〉である教師――元々その星団の生徒だった者が多い――自身も、毎年昇星試験を受けなければならない。そしてその評定には、担当している生徒の出来不出来も含まれる。

生徒同様、国に生活費を丸抱えしてもらっている以上、教師もそれなりの成果を出さないと追い出される可能性があるのだ。昇星試験の合否が出た後、責任のなすりつけ合いによる師弟対決が起こることは珍しくない。

「わ、私だってそれが嫌だから、こうやってがんばってるんですッ!!」

教師と生徒は互いの合意の上で担当を決める。入団当初は「あの」グラシカルが自ら連れてきた生徒は初めてだ、よほど素養があるのだろう、あいつが嫌になったらぜひ自分と、

という声も多くかかっていたのだが、半年も過ぎないうちに罵声に変わった。

当時のことを思い出して落ち込むエリッセに、ランゼはほわほわと続ける。

「それに何より、教師である前にひとりの人間であり、恋する乙女なのよね～。グラシカル先生が、あなたのせいで〈導きの灯〉を追われるなんてことになったら～。私はきっと、自分の素直な感情に従って行動してしまうわ～」

日頃堂々、「だめ生徒を抱えてマイナス査定を受けるより、担当生徒を持たないことによるマイナス査定のほうがましよね～」と公言してはばからないランゼであるが、ここまで言われるとは思わなかった。

職務放棄宣言にあ然とするエリッセに、ランゼはそれは幸福そうに微笑んで、

「本当に、私ったら素直でごめんなさいね～。あのグラシカル先生を独り占めしても、いまだ六等星なんていうだめ生徒がようやく〈導きの灯〉を去る……そう思うと本当に、嬉しくて嬉しくて～」

「言いましたね!?　だめ生徒ってはっきり言いましたね、今!?　ていうか私は去りません、グラシカル先生に恩返しするまで、絶対去りませんからッ!!」

憤然と言い返したエリッセは、いくつもの栞を挟んだ分厚い古書を懸命にめくり始めた。

八年の間、散々だめ生徒呼ばわりされてきたエリッセは、自分が少々卑屈になっていることを自覚していた。自分自身への攻撃なら何も言い返せず、ひとり落ち込んで終わるこ

とがほとんどだが、担当教師であるグラシカルの名が出るなら話は別だ。
〈導きの灯〉の教師の中でただひとりの一等星、カノープスの称号を持つグラシカル・アミテージア。
その能力もさることながら、ひとつに縛った長い黒髪をなびかせて優しく笑う彼の整った容姿は、〈導きの灯〉で暮らす女性たちの憧れの的である。
といっても、グラシカル自身の女性に対する態度はいたって淡泊だ。物腰穏やか、誰にでも分け隔てなく接するが、特定の恋人などを作る気配はない。
そもそも彼の過去には謎が多く、実は〈導きの灯〉入りしたのもエリッセに出会うほんの数ヶ月前だったとか。
それ以前にどこで何をしていたかは不明で、王宮にいたのではないかなどの噂が絶えないが、相手は国の至宝たる一等星。口に出せないことも多いのだ、彼がいてくれるだけで〈導きの灯〉の価値が上がるのだからと、星団長からも非公式の達しが出ているため、みな表立っては詮索しない。
たまに無遠慮な質問をされた時には、「申し訳ないが、あなたにお話しする必要はないように思います」などとすげなく断るのだが、
『人気に驕らない、禁欲的なところがまたいいのよね!!』
この調子で、かえって信奉者は増える一方。同性の嫉妬を買うのは必至だ。

しかし、グラシカル本人にはさしたる欠点はない。彼を直接攻撃すれば女性陣の猛反発を喰らうし、星団長からも睨まれてしまう。

だからグラシカルを妬む男たちは、別の的を狙うのだ。

『あいつ個人は確かにすごいかもしれないが、教師としては三流だ。だってほら、たったひとり選んだ生徒があのざまじゃないか』

『ああいう気取った男には、ちょっと欠点があるほうが人間味があっていいさ。本人もそれが分かっているから、エリッセの担当を続けているんじゃないか？』

――八年前。男手ひとつで育ててくれた父親が亡くなり、ひとりぼっちになったエリッセの素養を見出して、〈導きの灯〉へ連れて来てくれたグラシカル。

『エリッセ、君は僕の大事な生徒だ。焦る必要はない、そのままでいいんだよ』

昇星試験に失敗するたび、地の底まで落ち込むだめ生徒を、グラシカルは変わらぬ笑顔で包んでくれる。そんな彼だからこそ思うのだ。

これ以上迷惑はかけられない。

せめて四等星、いやいや五等星でもいい。

万年六等星の汚名を雪ぎ、グラシカルに恩返しをしなければ。

決意を新たにするエリッセに、ランゼが間延びした口調で問いかけてきた。

「でもエリッセちゃん、大丈夫～？『暗黒星』なんて禁呪に手を出すなんて～」

この期に及んでの問いかけに、エリッセはその場でずっこけそうになった。弾みで手から滑り落ちた古書が革のブーツの上に落ち、痛みに飛び上がったりランプを倒しそうになったりとひとしきりばたばたしてから、ようやく非難の声を上げる。

「ちょっ、今さら何を言うんですか、ランゼ先生が私を焚きつけたんでしょう!?」

禁呪『暗黒星』。己の〈煌〉を増強する禁断の術。

そんなものが〈導きの灯〉にひそかに伝えられていたとエリッセに教えてくれたのは、他ならぬこのランゼなのである。

教師の身でありながら日頃グラシカルにべたべたし、エリッセを邪魔者扱いしていた彼女が、ある日こう言ったのだ。

『エリッセちゃんは本当に諦めが悪いわね～。ならいっそ、一か八か、賭けてみない～？』

胡散臭い、とは思った。グラシカルに相談すべきだ、とも思った。

しかし結局エリッセは、ランゼ以外誰にも内緒で禁呪使用の準備をし、今ここにいる。

「うん、だって仕方がないじゃない～。エリッセちゃんってば、いくら私がいびっても出て行かないし～。ならとりあえず、あなたを昇星試験に合格させてあげて～、もうちょっとましな生徒にしてあげれば、グラシカル先生に恩を売れるでしょう～？」

「……だったら、先生が術を使ってくれてもいいんじゃないでしょうか……？」

準備も手伝ってくれたって、とエリッセが零すと、ランゼはにこやかに断った。

「だめよ～、もしもこんな禁呪に手を出したことがばれたら、教師の地位を剝奪されちゃう～。こんなものを使うのは、最早失うものがない、人生ぎりぎりの人だけよ～。そもそも自分の〈煌〉を増強するためのものだしね～」

……一から十まで腹が立つが、エリッセにあまり時間がないのは事実だ。十八になれば、その時の等星がどうであれ〈導きの灯〉を卒業しなければならない。

あのグラシカルの生徒が、六等星のまま卒業。

彼への嫉妬を隠しもしない男たちの、幻の嘲笑が脳裏に響く。冗談じゃない、どうにかしないと、と拳を握るエリッセだが、やはり不安はぬぐえない。

「大体、自分で言うのもなんですけど、私は万年六等星のだめ生徒なんですけど……？死ぬほどこの本は読み込みましたけど、本当に禁呪なんか使えるんでしょうか……？　すごい副作用とか、ないんですか……？」

「それは私にも分からないわ～。だって二百年前に作成された直後、すぐに禁呪に認定された術だもの～。使用の記録がほとんどないのよね～」

エリッセの怯えを、ランゼはのんびりした口調で一蹴した。

「でも、エリッセちゃんには他に手はないでしょう～？　それに〈煌〉を増幅する必要があるのは、〈煌〉が弱い人よね～？　だからきっと、ちゃんと勉強しなくても強い〈星〉になりたい、そんな欲望だけは立派なあなたにも使える術よ～」

「私はちゃんと勉強してますッ!!　ただなぜか、ひとりだけ教科書が乱丁とか、昇星試験中に大怪我するとか、運が悪いだけですッ!!」

自分の台詞に泣きそうになりながら、エリッセはやけくそになってもう一度手順の確認を始めた。

世界の縮図である星海図は、完璧に作った……はずだ。いつも運が悪いだけで、人一倍努力はしているのだから間違いない。……ランゼも珍しく褒めてくれたのだから、間違いない。たぶん。

加えて、今はちょうど真夜中。三つの太陽は完全に地に沈み、今空を支配するのは三つの月。

〈星〉にはそれぞれ、太陽や月との相性がある。三つの太陽すべてと相性が悪いエリッセの〈煌〉は、この時刻でないとまともに発揮できない。

条件は揃った。やるしか、ない。

意を決したエリッセは、自ら作り上げた星海図に向かい背筋を伸ばして立った。片手に抱えた古書と自作の覚え書きをもう一度読み直してから、すうっと息を吸う。

「星喰い星。暗黒の星。すべての光を食む闇星よ」

夜空を照らす三つの月を、頭の中に思い浮かべる。暗闇を退け、放たれる清らかな月光を、地下にいながらにして心で、素肌に受け止める。

だが、『暗黒星』を使うには月の光だけでは足りない。普段は好んで利用しない、今は空を支配する位置にもない太陽の輝きをも受け止めて、跳ね返す必要がある。

「光あふるる世にあって、光を喰らう定めの汝」

詠唱は間違いないはずなんだけど、どうも内容が術の効果と合っていないような……、などといった雑念を振り払い、ひたすらに集中していく。六つの巨大な光を集めて己の理想を構築し、それをまた光として放つイメージを積み重ねていく。

「――けどね、気づくべきだったんじゃないかしら～？　いつも不幸なエリッセちゃんが、禁呪の封印を解く準備を整えられたっていう幸運が、何を示しているのか～……」

不穏なランゼのつぶやきも、無意味な音として耳を通過していく。全身を清浄な銀光で包んだエリッセは、他と比べてどんなに弱々しかろうと、地上に輝くひとつの〈星〉だ。

「始原の黎、至高の陽、終焉の夕、起源の陰、至純の闇、終末の影」

三つの太陽と三つの月を表す古めかしい名称を口にし、それぞれが放つ光を感じ取る。同時にまだまだ幼い顔立ちがきっと引き締まり、すみれ色の瞳が凛とした光を放つ。

「空の羅盤に刻まれし六つの光と六等星エリッセ・リトラーユの光に導かれ、いでよ、閉ざされた扉を開き我が元へ！」

世界の縮図の中央で縮こまっていた少女とは思えないほどの輝きが、その決意に相応しい強さと大きさで室内を照らし出した。

「す、すごい……!!」

思わず漏らしたつぶやきは、早くもかすれを帯びている。

今は空になく、エリッセとは相性の悪い三つの太陽を含めたすべての恒星の輝きを返しているのだ。至極当然のことだが、視界を埋め尽くす光の量も、脱力感もすさまじい。

必死に足を踏ん張り、『暗黒星』発動のイメージを保ち続ける。

あらゆる光が失われた真なる暗闇〈夜の底闇〉の中でさえ、己だけは輝かんと貪欲に欲する闇星の力を借りて、この貧弱な〈煌〉を増幅させてもらうのだ。

星海図の中央部へ、エリッセが返す光が次々と吸い込まれていく。そこにはぽかりと黒い闇が口を開けていて、無心にエリッセの〈煌〉を食べ続けていた。

古書の記述の通り。成功だ、と安心したのは束の間のことだった。

「あ、れ、な、なんか、変……」

通常とは明らかに違う大量の〈煌〉が消費されていくのが分かる。『暗黒星』が発動しているのは間違いない。

だが、おかしい。エリッセの〈煌〉は無尽蔵に暗闇の口へ吸い込まれていくだけで、増幅される気配が全くない。

それどころか、先ほどから〈煌〉だけでなく、エリッセの足先もじりじりと星海図の中央へ近づきつつあるような。

「……うふふ」

焦るエリッセの背後で、ランゼが忍び笑いを漏らした。音もなく詰め寄る彼女の手が、エリッセを突き飛ばそうと狙いを定める。

そうとは知らぬエリッセは、手元の古書に眼を落とした。

だが、術の発動以後の記載はない。予定ではこの段階で〈煌〉の増強が成されているはずだったのだが。

どうすればいいのか。

ランゼにだまされたのか。

それともまたいつもの不幸のために、術がおかしくなっているのか。

「ど、どうしよう、中止……!?」

これ以上〈煌〉を使ったら立っていられなくなる。いや、それどころか、このまま暗闇の口へ吸い込まれてしまうかもしれない。

……結局、自分はこうなのか。

落ちこぼれから抜け出せない運命なのか。

そうかも……、と、自己完結しかけたエリッセの耳の奥で響く、聞き慣れた優しい声。

『エリッセは、そのままでいいんだよ』

「や、やです、グラシカル先生……!!」

ふるりと大きく首を振り、エリッセは叫んだ。

「私……、私、先生の役に立ちたいんです……!!」

握り締めていた古書が手から落ち、せっかく苦労して用意したランプに当たる。ただでさえ巨大な術の発動に影響を受けていたランプが弾けるように割れ、暗くなるはずの室内を強い光が満たしていく。

「……エリッセちゃん……?」

今にもエリッセを暗闇の口へ突き飛ばそうとしていたランゼが、ふくれ上がる光におのいたように数歩下がった。

たとえ今、ランゼが正面から突き飛ばそうとしていたところで、エリッセがそれに気づくことはなかっただろう。

自分が生み出す光さえ意識の外にあり、願うのはただ、優しいグラシカルの笑顔だけ。

「お願い、『暗黒星』……!!　私を強くして、先生が自慢できる〈星〉にして……!!」

エリッセからあふれ出した光が、暗い室内を白一色に染める。

部屋全体がぎしりと軋み、耐えかねたようにすべてのランプが砕け散った。
そして、暗闇が世界を支配した。

「きゃあっ……!?　あっ、きゃーっ!!」
半ば忘我の境地にあったエリッセは、突然訪れた暗闇に縮み上がった。次の瞬間いつも通り、その場ですてんとひっくり返ってしまう。
「あいたっ！　えっ、やっ、まさか、ここは〈夜の底闇〉……じゃない、よね……？」
一瞬本当に『暗黒星』のいる世界へ引きずり込まれたのかと思ったが、場所に変化はない。……その証拠に、慌てて床をまさぐった指が、割れたランプの破片をかすめた。
「あいたたた!!　あぅ、うう、そうじゃ、ない、みたい……」
場所が変わっていないことも、自分の不幸も変わりないことが分かった。いずれ眼も慣れてくるだろう、と頭では理解しているが、どうしても不安がぬぐえない。
常に太陽と月に照らされたこの世界では、真の暗闇を体感することが少ないのだ。傷ついた指先を押さえながら次の行動に迷うエリッセの視界に、不意に明かりが灯った。
「あっ、ランゼ先生、大丈夫……」
自分ではないのだから、ランゼが〈煌〉を使って明かりを灯してくれたのだろう。ろく

でもない教師ではあるが、ひとりぼっちで暗闇の中にいるよりはましだ。

そう思ってほっと視線を上げたエリッセは、闇を圧して輝く光の中に意外なものを見た。

黒いズボンに包まれた、すらりと長い足が二本。

一瞬グラシカルかと思ったが、教師である彼は生徒たちとは逆に、白地に黒いラインが入った衣装を着ているはず。

大体いつも優しい彼ならば、エリッセがひっくり返っていれば即座に助け起こしてくれるだろう。しかし眼の前のこの足の持ち主は、微動だにせずエリッセの間抜けな姿を見下ろしているだけだ。

「だ、誰……？」

行動はランゼ先生みたいだけど、と思いながらエリッセはそろそろと目線を上げていったが、ズボンを留めつけるベルトも黒。上着も黒。ついでに襟足が少し長い髪も黒く、瞳だけが恐ろしいほどに強い金。

年齢は二十代半ばほどか。たぶんエリッセより一回りほど年上の、グラシカルと同年代らしい黒ずくめの青年がそこに立っていた。

「――まさかお前が、現在のシリウスなのか？」

艶やかな低音に乗って放たれたのは、一等星の中の一等星、誰もが欲しがる青白き〈星〉の王の称号。エリッセは慌てて首を振った。

「ち、そんな、ちが、違いますッ!!」

畏れ多い、とばかりにぶんぶん首を振るエリッセへ向けられた金の瞳が一気に熱を失う。

「だろうな。……ふん、ならばなおさら、馬鹿な小娘だ」

軽蔑も露に高い鼻を鳴らすその顔は、冷たく見えるほどに整っている。グラシカルと同格、あるいはそれ以上の美形青年を、エリッセはぽかんと口を開けて見つめてしまった。

「あの、ところで、だ、だ、だ、れ……？」

二度目の誰何に答える様子もなく、男は腕組みをしたまま冷ややかな言葉を続ける。

「何が目的か知らんが、このオレ様を眠りから呼び覚ますとは、全く大胆というか身のほど知らずというか」

人の話に全く耳を傾けず、偉そうにしゃべるその姿は美しく自信に満ちている。ある意味当代シリウスよりシリウスっぽいかも、とエリッセは一瞬失礼なことを考えた。

実際、男から漂う〈煌〉は強力で、少なくとも三等星以上だろう。

だが、首に等星石はない。ということは——彼は、〈流れ星〉。

犯罪者だ。

「……きゃあああああ！」

遅ればせながら上がった悲鳴に、黒髪の男は片眉を上げた。しかし不機嫌そうなその表情には目もくれず、エリッセは必死に彼から離れ、壁にしがみついた。

「なんっ……、きゃー！　私、私きゃー！　あ、『暗黒星』、使って、きゃー！　等星を上げようと思ってたのにっ、きゃーきゃーきゃー！　なんできゃー!!」

「……うろたえすぎだ、小娘」

呆れたように言った男は、せっかく取った距離をものの数歩で縮めてしまう。足の長さを見せつけるようなしぐさに、エリッセはますます混乱した。

「きゃーっ、きゃーっ！　いやっ、私、〈流れ星〉を呼んじゃうなんて!!　確かに術名は物騒だけど、犯罪者召喚術だったなんて聞いてないきゃー!!」

「独特にうるさいな貴様。大体なんだその〈流れ星〉、というのは？　オレの美しさを讃えているつもりなのか？」

苦虫を噛み潰したような声でひと言言うと、男はエリッセのすぐ横の壁に音を立てて手をついた。ぎくりと強張るエリッセを間近に眺め、笑う。

「まあ、でも、お前には感謝しようじゃないか。まさかお前のような小娘に、このオレ様を解放する力があるとはな。愚者の存在しない静寂は心地よくもあったが、さすがに少々退屈していたところだったんだ」

感謝しようと言う割に、その態度は限りなく偉そうだ。片手を壁に押しつけたまま、黒髪の青年はしげしげとエリッセを見つめ……そして、眉間に深い縦じわを寄せた。

「……本当に、どうやったんだ。この貧弱な〈煌〉……とてもオレ様を呼び出せるような

〈星〉ではなさそうだが……だが確かに、さっき何か大きな力を感じた……」

協力者の存在を疑い始めたらしく、男が金の瞳をすがめて周囲に視線を巡らせる。そのしぐさに、エリッセもはっとしてあたりを見回した。

「あっそうだ!?　ランゼ先生、無事ですか!?」

自分はランプの破片で切った指先が痛いぐらいだが、ランゼはどうなったのだろう。だが男が作った〈煌〉の灯りの中、割れたランプが飛び散った地下室にどれだけ眼を凝らしても、他に人影はない。

「ランゼ？　知らんぞ。お前の他に誰かいたようではなかったがな」

いち早く協力者の可能性を捨てたらしき男の声も、耳を素通りする。エリッセは肩を震わせてつぶやいた。

「せ、生徒と犯罪者を二人きりにして、逃げるだなんて……!!」

倒れている様子もなければ、人を呼んでくる様子もないのだから答えはひとつしかない。

「あんな人の言うことをほいほい信じるなんて、私の馬鹿……いたたた!!」

落ち込むエリッセの金髪を一房、男がぐいっと引っ張った。

「なっ、何するんですか!?」

「やかましい、誰が犯罪者だ小娘。……まあ過ぎた才能を持つ人間は、低脳どもから見ればその存在自体が犯罪的に許せんのかもしれんがな」

容姿はグラシカルに負けず劣らずのこの男、性格はランゼといい勝負の様子だ。美しさは罪だ、とかなんとか、ぶつぶつ言っている。

寝言のような言葉を聞き流すうち、最初の混乱が徐々に収まってきた。落ち着こう、冷静になろうと、今の状況を客観的に見直してみる。

禁呪を使うため、事前に人払いをした上での地下の密室に、犯罪者とこの距離で二人きり。ランゼはたぶんきっと、戻ってこない。

「――きゃーっっっ!!」

冷静になったら、冷静になっている場合ではない状況に気づいてしまった。思わず両手を突っ張り、眼の前の男を突き飛ばそうとする。

「いやー殺さないで！　助けて、グラシカル先生助けっ、むぐっ!?」

「うるさいぞ小娘、ぴいぴいわめくな！」

エリッセの抵抗などものともせず、男の手が彼女の口元を摑むようにしてふさいだ。

だがわめくな、と言われたところでそうします、とは言えない。そもそも犯罪者ではないのなら、騒いで人が来たところで問題ないのではないか。

「……不満そうだな？　じゃあ言い方を変えよう。ぎゃあぎゃあ騒ぐのをやめないと、そ

れはもうひどい目に遭わせるぞ」
「ッ!!」
ただの脅しとは思えない、冷気を含んだ声に全身が硬直する。
「……息はしていいぞ、小娘」
緊張のあまり呼吸まで止めてしまったエリッセの口を、男はゆっくりと解放した。
「安心するんだな。オレ様レベルの人間になると、弱者には憐れみしか感じないものだ。お前がおとなしくオレ様の質問に答えるのならば、そうひどい目に遭わせはしない」
「……ちょっとなら、ひどい目に遭わせるつもりはあるんですね……？」
弱々しい突っ込みを無視して、男はじろじろとエリッセを眺め回す。
「ふん、しかし、本当になんでお前がオレを呼び出せたんだ……？　〈導きの灯〉に入れるかどうかも怪しいような〈煌〉しかないじゃないか……」
あからさまな嫌味に、エリッセは思わず自分のチョーカーをつまみ上げて訴えた。
「あなたを呼べるような〈星〉じゃないって……み、見れば、分かるでしょう!?」
最低等星の証、六つの輝石が並んだチョーカーを突きつけられても、男は眉間のしわを深くするばかり。
「なんだそれは」
「なんだ、それはって……まさか、等星石を知らないんですか……？」

あ然とするエリッセの態度から、見知らぬ男もようやく得心が行ったような顔をした。
「なるほど、等星がそんな物で分かる仕組みになったのか。自分より強い相手を避けられる、弱者にはありがたい仕組みだな……」
馬鹿にした様子でつぶやいた男が、急に驚いたようにエリッセのチョーカーを引き寄せる。
「……おい、ちょっと待て。輝石が六つということは……まさか」
重大事に気づいたように声をひそめた男は、すぐに首を振った。
「いや……、そんなはずがないか。弱者のふりをして油断させる、という手は陳腐だが有効……それとも石の数は無関係で、使われている石の質で見分ける、ということも……」
「等星をごまかすことも犯罪ですし、素直に石の数を数えたら分かりますよね!?」
なんと手の込んだ馬鹿にされ方だろう。かえって傷ついたエリッセの抗議に、男もようやく現実を認めたようだ。
「ということは、まさか、本当に……？　おい、冗談だろう」
金色の瞳が不快そうに揺らめいた。
「――このオレ様を解放するような力の持ち主が六等星？　馬鹿な」
機嫌の下降に従い一段低くなった声が、エリッセの背筋をぞくりと震わせる。反射的に逃げようとしたが、すでに追いつめられた状態ではそれも叶わない。

「わ、私自身も、非常にその、残念ですけど、ろ、六等星、でございます……」
いろいろなことがありすぎて混乱したエリッセは、聞かれてもいないことまで口走った。
「だっ……だから、『暗黒星』、使って……い、一等星とまでは言わないけど、せめて五等星、いえ四等星とか三等星になって、グラシカル先生を喜ばせたいな、なんて……」
「グラシカル？　誰だそいつは」
「わ、私の担当教師です……ええと、担当教師ってご存じです……？　その、つまり、生徒である私の評価が上がると先生の評価も上がるので、『暗黒星』でどうにか……」
おどおどと禁呪に手を出した経緯を説明すると、男はさも馬鹿にしたように笑った。
「やっぱり気づいていないのか。『暗黒星』というのは術の名であり、同時に術の創作者であるオレ自身のことだ。つまりお前は、オレに『暗黒星』を教わりたくて呼び出した、ということだな？」
「え、えっ？　そ、そんなこと、この本にはひと言も……！」
手元の古書に眼をやれば、『暗黒星』を名乗った男もちらりとそれを一瞥して、
「馬鹿か貴様。『暗黒星』のような危険な術について、すべてを仔細に残したりするはずがないだろう？　誰かに悪用されたらどうするんだ」
もっともな話だが、悪用されるような術を作った本人がそれを言うのはどうなのか。
突っ込みをこらえているエリッセを、男は奇妙な眼つきで見つめた。まるで懐かしい誰

かを見るような、そんな眼だった。
「――しかし、等星を上げたくて『暗黒星』を呼び出すとは……見かけによらず、なかなかあくどいな、お前」
呆れているのか感心しているのか判然としない声に、エリッセはしゅんと肩を落とした。
「わ、分かってます、それは……でも、私には時間がないんです」
「まあ、オレは向上心のある〈星〉は嫌いじゃないが。で？　生贄はどいつだ。さっき言っていたランゼ、とかいうやつか？」
「……は？　生、贄？」
高度で複雑な術の中には、様々な条件を必要とするものがある。〈煌〉の大きさはもちろん、場所や時間の限定、利用する太陽と月の指定、時には供物さえ必要となることも知ってはいるが、生贄がランゼ？
「まあ、ランゼ先生なら……って、な、何言ってるんですかあなた!?」
一瞬心が傾いた分を補うよう、大声を出したエリッセに男は片眉を上げる。
「何を言っている、は貴様だ小娘。『暗黒星』を使いたいのだろう？〈煌〉を搾り取る対象者が必要だろうが」
「えっ、ええっ!?」
あ然としたエリッセは、慌てて手にしていた古書をぱらぱらとめくった。が、そんな記

述はどこにもない。

「あなたが私の〈煌〉を増強してくれるんじゃないんですか!?」

「なんでオレが貴様なんぞの〈煌〉を増強させてやるんだ!?　『暗黒星』は他人の〈煌〉を奪う闇星、そうと知っていて手を出したんだろうが!!」

怒鳴り返した男は、そこではっとしたような顔になった。

「……まさか……、この『暗黒星』の力を喰らう気だったのか!?　なんと強欲な小娘だ!!」

勘違いしてひとりで怒っている『暗黒星』など眼に入らない。心を占めるのは、にこにこと無害な笑みを振りまきながら、「うまくいったらグラシカル先生とデート三回ね～」などとほざいたランゼの幻影だけ。

「な、中身を改ざんしたんだ、あの失格教師っ……!!」

道理で詠唱の内容と術の効果が違うと思った。しかもランゼのことだから、実際に術が発動したらしたで、エリッセに他人の〈煌〉を奪い取るような真似はできないと分かっていたに違いない。

「『でも、術は発動したわよね～。はい、じゃあ、デート三回～』……、あああああ、絶対言いそうッ!!」

先回りして悔しがるエリッセを、金の瞳が妙に冷静に見つめている。

「なんだお前、はめられていただけなのか。全く……」

ほんの少し、残念そうにそうつぶやいた男の声が、不意に低くなった。
「では小娘、このオレ様、一等星・ベテルギウスのディガンのことは？」
傲慢に名乗った男の、凄みを増した美貌がエリッセに近づく。
「……ディガン、さん……？」
間近でそのまぶしい美貌を見て、エリッセは改めて思った。——ああ、私やっぱりグラシカル先生の、あんまり主張は強くないけど、全体的に整ったきれいな顔が好き。
「ち、違うの、私別に先生のことを、そういう意味で好きなんじゃ……!!」
ひとりで慌てているエリッセにも、ディガンは今回は突っ込んでこなかった。というより、エリッセの心中など気にしている余裕がないようだった。
「オレを犯罪者呼ばわりするということは、あれこれ聞いているんじゃないのか？　南北大戦の際に封じられた、不遇の天才ディガン・マキナウスについてな」
心なしか緊張を孕んだディガンの台詞に、はっと我に返ったエリッセは必死に記憶をたぐり寄せる。
ベテルギウスというのは確かに、一等星にだけある特別な称号のひとつだ。だがディガンという名前には聞き覚えがない。
「い、いい、いいえ……」
エリッセが知っているのは、ランゼに改ざんされたと思しき古書の記述だけ。記載内容

は『暗黒星』という術そのものについてだけで、創作者のことなど何もない。
　ふるふると首を振るエリッセの様子に嘘はないと思ったのか、ディガンの体から漂っていた緊張が消える。同時に彼は先ほどまでの傲慢さを取り戻した。
「どうやらあの戦争が終わってから、相当経っているようだからな。やれやれ、平和ぼけした連中は、あれだけの大戦争についてもすぐ忘れてしまうか。嘆かわしい」
　何やら偉そうに語るディガン自身のことは、やっぱりさっぱり記憶にない。第一、大きな戦争といえば……、と、質問をしてみようかと思った矢先、
「まあ、ある程度以上の等星の連中しか知らないことではあるだろうが……こうなると、やはりお前が六等星というのは事実か」
　自分勝手に納得し、ディガンは悔しそうな表情になった。
「チッ、ただ単に術を読み上げただけの、六等星の小娘に引っ張り出されるとは、オレも落ちたものだな……まあ封じられてから相当な年数が経っているようだし、封印が緩んでいたという可能性も……」
　ぶつぶつと愚痴る言葉は完全な独り言で、エリッセに向けられたものではない。だが総合すれば、要するに馬鹿にされているらしいということぐらいはエリッセにも分かった。
「わ、私だって一生懸命……、ひゃっ!?」
「少し見せてもらおう」

こちらの反論を完全に無視して、冷たい指先が額に触れた。と思った次の瞬間、目元を大きな手の平に覆われ、エリッセは悲鳴を上げた。

「きゃー、きゃきゃきゃー！　きゃー！　嫌、何すっ……、きゃあああああ!?」

特徴的な悲鳴を上げ、ばたばたと暴れるエリッセからディガンはまばたき二つほどの間を置いて呆気なく離れた。

呆気なすぎてかえって驚いてしまったエリッセだが、彼にそれ以上何かをする様子はない。エリッセの瞳を覆っていた手も外してくれた。

しかしディガンの金の眼は、エリッセの困惑した表情を今までにない真剣さで食い入るように見つめている。

「こいつは……」

またひとりで勝手に納得したディガンの唇に、不意に心底楽しそうな笑みが浮かんだ。

「そうか……なるほど。『暗黒星』が再び太陽と月の下に連れ戻された意味は、これか。そうだな。オレはすべての光を喰らい、誰よりも輝く闇星だものな」

唇だけは楽しそうに笑っているが、瞳には冷酷な光がある。けれど溶けた黄金のように妖しく揺れるその眼の奥に、ちらりと別の感情が垣間見えた気がした。

それは、いつも穏やかに微笑んでいるグラシカルが時折見せる、ある種の表情と似ているように思えて。我知らず背伸びをしたエリッセのあごに、冷たい指先が触れた。

「ひゃっ……!?」

声を上げる暇もなく、あご先をくいと持ち上げられた。頭ひとつ分背の高い男の笑みを含んだ瞳が、戸惑うエリッセの眼をじっと覗き込んでくる。

「――小娘。お前、名前はなんと言ったか」

「いえ、あの、まだ名乗ってないんですけど……」

とりあえずそう言ってみたところ、金の瞳がたちまち吊り上がった。

「じゃあ今すぐ名乗れ！」

「はいッ、エリッセ・リトラーユ！　十五歳です！」

ぴんと背筋を伸ばして答えると、ディガンは妙に優しい声でこう尋ねてきた。

「なあ、エリッセ。要するにお前は、もっと強い〈星〉になりたいんだな？」

「え、え……、その……まあ、そうです、けど……」

取って付けたような優しさに嫌な予感しかせず、エリッセは首を竦めながら答えた。ディガンはそれは爽やかに微笑んで、

「そうか、分かった。つまりお前は自分に取り憑いた『不幸の星』を祓い、本来の力を取り戻したい。それが願いだな？」

「ほ、本来っていうか、とりあえず次の試験で五等星になれたら嬉しいなって……、え？」

何か今、聞き慣れない、そしてこの上なく不吉な単語が聞こえた気がしたが。

思わず聞き返すが、ディガンは適当に話をまとめてしまう。
「そしてその、なんとかいう……ランゼだったか？　を喜ばせたい訳だ」
「グラシカル先生ですッ!!」
聞き慣れない単語より何よりグラシカルの話となれば、無条件で反応できるエリッセである。勢いよく訂正されたディガンはさすがに驚いた様子だったが、怒り出すこともなく、なぜかひどく機嫌良く笑った。
「了解した。――どうやら、オレたちの望みは一致しているようだな」
「え、や……きゃ、きゃきゃー！」
いきなりふわりと体が宙に浮き、エリッセはまたしても悲鳴を上げた。その腰に片腕を回し、軽々と彼女を抱き上げたディガンはもう片方の腕を高々と差し上げて叫ぶ。
「ではこのディガン様がお前の望みを叶えてやろう。夜空の支配者、月が二、至純の闇よ！　我に天駆ける翼を与えよ！」
巡る三つの太陽と月より〈星〉が得られる光の強さは、その位置に大きく左右される。よほど相性が悪くない限り、中天に近い位置にある恒星の名を織り込むのがセオリーだ。
体が急激に上に引っ張り上げられる、異様な感覚がエリッセを包んだ。発動した飛翔術の最中、彼女は無我夢中でディガンにしがみつくしかなかった。

どんっ、という大きな爆発音に驚き、慌てて外に走り出た〈導きの灯〉星団の人々を三つの月が照らし出す。三つ子月が弧を描くように夜空に揃って輝く様は、すなわち時刻がちょうど真夜中であることを示していた。

当然ながら大半の人々は眠っていたのだが、昼間生徒の世話に追われていた教師たちの中には、自分の勉強をするために起きていた者も多い。

「これは……!?」

一等星・カノープスの称号を持つグラシカル・アミテージアもそのひとりだ。教師用の宿舎から走り出てきた彼は、とにかく事態を把握しようとあたりに視線を巡らせた。

数百人からが暮らす〈導きの灯〉星団は、広々とした草原の一角にある固い岩盤の上に作られた巨大な施設である。多くの〈星〉は家族と離れてここで暮らしているため、教育棟や宿舎などが数十あまり立ち並ぶその規模は、ひとつの街に近い。

爆発音の発生源は、どうやら〈導きの灯〉内。ざっと見たところ、最も数の多い教育棟や〈星〉たちの宿舎に変化はない。

だが様々な古い資料が集められた資料館付近から、薄い白煙が上がっていることにグラシカルは気づいた。しかもそれが地下、より重要度と危険度の高い資料類が眠っているあ

たりからだと見当をつけた彼は、切れ長の黒い瞳を細めてうなるように独りごちる。
「この〈煌〉は……今まで感じたことがない、まさか侵入者か……!?」
星団内の〈星〉たちの〈煌〉なら、グラシカルはすべて把握している。だが今感じている強力な〈煌〉は、記憶にない。
緊張する彼の耳に、遠い悲鳴が聞こえてきたのはその時だった。同時に突如として強い風が吹き、グラシカルの長身がわずかによろめいた。
「きゃー、きゃきゃきゃのきゃーッ！　落ちるー！　ディガンさん落ちる、落ちるぅー！」
遙かな上空から降ってきた声は、先の風にも霞んでしまい一層聞き取りにくい。グラシカルにもすべての内容は聞き取れなかったが、独特の悲鳴には明らかに聞き覚えがあった。
「エリッセ……!?　なッ、君なのか……!?」
立ちすくむグラシカルが見上げた空の向こうで、もう一度例の見知らぬ〈煌〉が力を増すのが分かった。
次の瞬間、それは一筋の尾を引いて、北西の方角に向かって消えていった。
「……一体……」
「グラシカル先生！」
さすがに呆然となったグラシカルを呼ぶ声がする。慌てて振り向いた彼が見たのは、幼い少女のような顔立ちに不釣り合いな、分厚い眼鏡の縁を押さえて駆けてくる女性だった。

その服装はグラシカルと同じ、ほぼ全身が白ずくめ。長いスカートの裾にだけ黒いラインが入った、〈導きの灯〉星団の教師用の制服姿である。

ただしカノープスの称号を持つグラシカルと違い、首元で光る等星石は三つ。つまりは教師になるための最低位、三等星であることを示していた。

「ティリス先生……」

「何が、お、起こったんでしょう。私うたたねをしていて、びっくりして今起きてきたんですけど……」

確かグラシカルより年上のはずだが、知らずに見たらエリッセと大して変わらない歳にしか見えない教師ティリス・エーデは、混乱した様子でそう言った。

うたたねをしていたのは事実らしく、長い黒髪のあちこちがぴんぴん跳ねている。おまけに外套を着ておらず、かろうじて毛糸の肩掛けを引っかけているのみだ。

「……僕にも分かりません。ですが、何か大事が起こっていることだけは間違いないです」

慎重に言葉を選ぶグラシカルに、ティリスは怯えたような顔でつぶやいた。

「まさか他国からのその、何かとか……そういうことは、ないですよね……？」

高名な〈星〉を数多く輩出し、かつての南北大戦の功績から五つもの一等星の称号を擁することを認められたレドレリカ。小国ながら豊かなこの国は、戦争の傷痕がほぼ完全にふさがった現在、他国の嫉妬の的なのだ。

以前より国家間での緊張状態は噂されていたが、ティリスが不安がるのは数年前にレドレリカ王が代替わりしたばかりだからである。熾烈を極めた王位継承権争いにはどうにか打ち勝ったものの、当代の王は優秀だが病弱で、そこにつけ込まれないかと心配なのだ。

「まだ分かりません。ですが先生、生徒もすでに何人か起き出してきていますから」

下手な話をすると、生徒たちが動揺してしまう。

含みを持たせた言い方でグラシカルがたしなめると、ティリスは鼻先を赤くした。

「そ、そうですね私ったら。こんなだからいつも舐められちゃうんですね、私……」

しょんぼりと肩を落とした彼女のすぐ側に、すっと近づいてきた小さな影がある。三つ子月が発する月光を紡いだような、癖のない銀髪がきらきらと輝いていた。

「ティリス先生」

「きゃっ!?　ハ、ハーシエルくん！」

静かな声で彼女に呼びかけたのはティリスが担当する生徒、ハーシエル・ディファリア・トールズだった。

「だめじゃない、こんな時間ですよ。夜間の外出は禁じられているでしょう？」

精一杯教師ぶって言うティリスよりもハーシエルはさらに小柄で、彼女の肩ほどまでしか身長がない。

それもそのはず、彼はまだ十一歳。銀の髪と少し吊り上がった青い瞳はよくできた人形

のようで、細い手も足もちょっと力を入れれば折れてしまいそうなぐらいに頼りない。
しかしその能力と精神の成長ぶりには大人顔負けのものがある。端的にそれを示す証、首元のチョーカーに大きな一つ星をきらめかせ、ハーシエルは冷静にこう言った。
「先生、きっとさっきのにびっくりしてるだろうと思って。様子を見にきてあげたのに、いないから探した」
「まあ」
驚きの声を上げたティリスは、思い出したように自分の肩から毛糸の肩掛けを外した。
「もう、先生は子供じゃないのよ？　ほら、こんなに体を冷やして……大丈夫だから、部屋に戻って寝なさい」
ハーシエルの細い肩に緋色の肩掛けを回しながら、彼女はお説教をする。ハーシエルはいらないよ、と拒んだが、ティリスは半ば強引に少年に肩掛けを押しつけた。
「とにかく……くしゅっ、ほら、後は先生たちに任せて。ハーシエルくんはお部屋に戻るの。ね、先生も一緒に戻ってあげるから」
「……分かった」
明らかに自分のほうが寒そうなティリスの肩掛けに包み込まれたせいか、ハーシエルの表情は微妙に決まりが悪そうだ。
「ごめんなさい、グラシカル先生。私はいったんハーシエルくんを部屋に連れて行きます」

ティリスの言葉に、険しい眼をして夜空を見上げていたグラシカルは、はっとしたように視線を戻す。

「え、あ……ええ。たぶん教職員には後で呼び出しがかかるでしょう。その時にまた」

そう言いながらグラシカルは、自分が羽織っていた外套をティリスに渡した。途端にティリスが慌てて両手を振る。

「先生、そんな」

「構いません、僕も部屋に戻ります。ハーシエルくんの部屋まで少し歩かないといけないでしょう？　あなたまで風邪を引いては大変だ」

いつも通りの優しい笑顔と言葉で言って、彼は手ずからティリスの肩に自分の温もりが残った外套を被せてやった。

長い指先が軽く肩に触れる感触に、ティリスは恥ずかしそうに顔を赤くした。そんな彼女の表情を、ハーシエルは無言で見上げている。

「……先生、もう行こうよ」

促すような生徒の声に、ティリスも慌てて表情を引き締めた。冷たく冷えたハーシエルの手を握り、グラシカルに一礼して歩き出す。

「それではグラシカル先生、また。何かあったらすぐに知らせて下さいね。さ、ハーシエルくん、行こう」

にこっと笑いかけたティリスに対し、ハーシエルはいつも通り無表情にうなずいた。
グラシカルたちとは逆の意味で教師と生徒の釣り合いが取れていないと噂の二人が、徐々に大きくなり始めた騒ぎの中に消えていく。
二人を見送ったグラシカルは、無言で巨大な〈煌〉が消えた方角を見上げた。月明かりを受けて鋭く光る黒い瞳には、女性受けする甘さや優しさは微塵もない。
だがそこへ、ティリスに「少し待っていて」と言い置いたハーシエルが戻ってきた。
「グラシカル先生」
「……ああ、何？　どうした、忘れ物かい」
素早くいつもの笑顔を取り繕ったグラシカルに、ハーシエルは淡々と尋ねる。
「今の大きな〈煌〉の爆発は、なんだと思いますか？」
答えるまでに一瞬間があった。だがグラシカルは、その不自然な間を補うように殊更に優しく笑ってこう言った。
「ごめん、僕にもすぐには分からない。でも安心してほしい、僕もティリス先生も他の先生も協力して」
「グラシカル先生、怖い顔をしていました」
みなまで言うのを待たず、ハーシエルは鋭い声を発した。思わず黙ったグラシカルに、少年は不幸なほどに聡い眼を向けてつぶやく。

「僕は一等星・シリウスのハーシエルです」
この称号に相応しい者なしと、長く空位の状態だった最高位の称号の名前を挙げて、ハーシエルはさらに続けた。
「グラシカル先生と同じ等星です。手伝えること、あると思いますけど」
グラシカルの首元、白い上着の上で控えめにきらめく一つ星のチョーカーを見つめての台詞に、一拍置いてグラシカルは苦笑いした。
「ハーシエル、君は何も心配しなくていい。ティリス先生と部屋に戻って休みなさい。後のことは僕たち教師に任せるんだ。いいね」
その表情も口調も、どこからどう見ても気遣いに満ちた優しい先生のもの。つけ込む隙などありはしない。
ハーシエルはしばし挑むように彼を見つめていたが、やがて小さなため息をついてこう言った。
「……分かりました」
ぺこりとお辞儀をし、ハーシエルはグラシカルに背を向けティリスのところに駆け戻る。どうしたの、との問いに少年は答えず、ただティリスの手をぎゅっと摑んでそのまま彼女を引っ張って歩き始めた。

第二章　おかしな道行き

ゆっくりゆっくり、定められた道を進んでいく三つ子の月たちが驚くような悲鳴を上げながら、エリッセは必死にディガンにしがみついていた。

飛翔術の膜に守られているため、冬の夜風の寒さは感じない。だが今は、たとえ凍えるような風を浴びていたとしても恐怖以外感じなかったに違いない。

「きゃー！　きゃー！　きゃーきゃーのきゃーっ！」

飛翔の詠唱も高らかに、地下室を突き抜けるように転移し一気に上空に上がってからどれぐらい経つだろう。

当初自信満々で、たぶんひと息に目的地に着く予定だったと思われるディガンは、失速するたび何度も同じ詠唱を繰り返しては、かろうじて高度を保っている状態だった。

「きゃー！　落ちるー落ちますー！　いやー！　先生！　グラシカル先生助けてーっ!!」

「うるさい、少し黙れ……！」

いらついた声を出すディガンにも、エリッセの叫びを止める余裕がないらしい。それも

そのはずで、夜空を斜めに横切って落下していく二人の視界いっぱいに小高い丘が広がっている。

この速度で墜落したら、たとえどれだけ柔らかな草地に落ちたところで大怪我は免れないだろう。まして落ちていく先は、茶色く冬枯れてところどころ地面がむき出しになっている斜面だ。

腰の古傷がじわりと痛み始めた気がする。七年前、初めての昇星試験の際の悪夢が思考を侵食していく。

未熟な他生徒の〈煌〉の爆発、飛び散る焦げた血肉の臭い。生徒たちの悲鳴。グラシカルが繰り返す涙のような「ごめん」。

血の気が引きかけていたエリッセの体を、大きな手が強く引き寄せた。

「くそっ……！　このディガン様が、こんなところで下手を打てるか!!」

エリッセをしっかりと胸に抱いて叫んだディガンの全身が、一瞬赤く輝いたように思えた。一等星の〈煌〉は、時にその称号を反映した色に光るという。

「夜空の支配者、月が二、至純の闇よ！　ええい月が一、起源の陰！　月が三、終末の影もだ！　なんでもいいから我に天駆ける翼を与えよ！」

ただ今中天の位置にあり、現時点で最も力を持つ至純の闇だけでなく、他の月の力までかき集めるつもりのようだ。早口な詠唱により、落下速度ががくんと下がる。

「さ、さすが……！」
ディガンの胸にぴったり密着していることも忘れ、エリッセは素直な賞賛を口にした。
「ふん、当然だ。オレ様は常に最強の〈星〉でなければならんのだからな!!」
言われるまでもないと言わんばかりに、ディガンが偉そうに胸を張る。
だが落下を完全に防ぐには至らず、結局二人は仲良く丘の上に落っこちた。

「きゃーっっ……！」
ひときわ高い声を上げ、墜落の衝撃をエリッセは必死でこらえた。体全体が何か柔らかいものに押し付けられた、と思ったら、勢いでごろごろと枯れた草地の上を転がった。
「あっ、たた、た……」
とっさに声も出ないような痛みに半泣きになりながら、暖かいものの上に手をつき、よろよろと起き上がろうとする。
しかし次の瞬間、不機嫌そうにしかめられた金の瞳とまともに眼が合い、エリッセはまた大声を上げた。
「きゃーっ、きゃーっ！　きゃーっ!!」
「うるさい、打撲に響くだろうが、黙れ……！」

うなるようなひと言に、エリッセははっとした。
腰にはまだ、ディガンの腕が回されている。おまけに自分は彼の上に覆い被さったような状態だった。
落ち着いて考えてみると、体中確かに痛い。そして寒い。
だがあの高さから落下して、ごろごろそのあたりを転がった割には痛くないような気がする。一方のディガンは、まだ起き上がれないほどの痛みをこらえているようだ。
丘にぶつかる直前、きつく胸元に抱き込まれたのを思い出す。
庇ってくれたんだ。
そのことに思い当たった瞬間、エリッセの下敷きになったままのディガンが叫んだ。
「いつまで人の上に乗っているんだ、さっさとどけッ！」
「きゃっ、きゃー！　ごごごめんなさいっ！」
慌てて飛び退いたエリッセは、落下の衝撃で絡まった草に足を取られて転がった。
「いたたた……！」
庇ってもらえたのも束の間、早速痛い目を見ているエリッセを冷たく一瞥し、ディガンは汚れた服を払いながら立ち上がる。
「……忌々しい。まだ封印が残っているのか、全く力が出ん……くそッ」
舌打ちしてぶつくさ言っているディガンを、エリッセは起き上がりながらちらりと見て、

すぐに眼を逸らした。

さり気ないしぐさのつもりだったが、込められた感情は伝わってしまったらしい。

「――おいなんだ、今の『散々偉そうに言っておいてこの程度か』という眼は!!」

「そっそこまでは思ってないですよ、庇っていただきましたし……はっ、きゃああ、ごめんなさいッ!!」

まんまと誘導尋問に引っかかったエリッセが、慌てた拍子にまたひっくり返った。

ディガンは間抜けな姿を見下ろしながら、まずは寒さから身を守る術と治療術を唱えた。たちまち寒さも痛みも遠ざかったが、ディガンの嫌味だけは変わらぬ強さで降り注ぐ。

「ふん、オレの力が今はまだ十全ではないことは否定しないが、お前に憑いている『不幸の星』の影響もでかいに違いないぞ。それでも力を振り絞って助けてやろうという優しいオレ様に対し、恩知らずにもほどが」

「あ、あのー」

よろよろと立ち上がったエリッセは、耳に引っかかった単語についてそっと聞き返した。

「さっきから、何度か『不幸の星』っておっしゃってますけど……なんですか、それ。嫌な予感しかしませんけど」

ひたすら不平とも言い訳ともつかないことを言っていたディガンは、事もなげに答えてくれる。

「なんだ、気づいていなかったのか？　禁呪『暗黒星』を使おうとしたお前自身にも、禁呪『不幸の星』がかかっているじゃないか」

「なっ……、え、えええええええ!?」

口をあんぐり開いて絶叫するエリッセを、ディガンは憐れむように見た。

「まあお前の〈煌〉がかなり低いことは事実だが、それに加えて『不幸の星』に邪魔されて、まともに力を発揮できていないようだな。おかげでオレまで、しなくていい苦労を」

滑らかな説明をすぐには飲み込めず、エリッセは眼を白黒させる。

「なっ、わ、私……禁呪を使うつもりで、すでに禁呪をかけられていたの……!?」

確かに運が悪いとは思っていたが、それは『不幸の星』なるもののせいだったのか。

そしてそのことにグラシカルもランゼも気づいた様子がなかったのに、ディガンはなぜ、あっという間に察知できたのだろう？

「やっぱり、ディガンさんがそれだけ優れた〈星〉だってこと……？　それとも、自分も禁呪を使うから……？」

激しく混乱するエリッセを尻目に、ディガンはさっさと話題を変える。

「おい小娘。ここから王宮まで、普通に歩いて行ったらどれぐらいかかる？」

「え……え、え？　いえあの、ちょ、ちょっと、それより、もう少し、説明……」

エリッセとしては当然の台詞だったが、ディガンはぎろりと眼を剝いた。

「いいか、オレたちは今からレドレリカ王宮に行く！　無論お前にかかった『不幸の星』を排除するためだ!!　本来のオレ様の力ならこの夜が明ける前に着けるはずだが、生憎今はまだ本調子じゃない!!　その上封印されていた時間が長すぎて地理が分からん！　だから王宮まで歩くとどれぐらいかかるか、それを聞いてるんだ、分かったな!!」

「は、はい、すごくよく分かりました!!」

手まで挙げて彼女は言った。そして同時に、先ほど深く追及し損ねた問題を思い出した。

「あのーディガンさん、と、とりあえずひとつ、よろしいでしょうか……？」

ディガンはあからさまに不機嫌な顔をしたが、エリッセは必死に自分を鼓舞して続けた。

「さ、さっき南北大戦の時に封印された、とか言ってましたけど……南北大戦って、二百年ぐらい前に起こった、世界が北と南に分かれての大戦争のことですか……？」

いくら万年落ちこぼれとはいえ、暗記は不得手ではない。確認するのさえ恥ずかしいような質問に、月明かりにもはっきり分かるほどディガンの顔色が変わった。

「二百年だと!?　それは本当か小娘!?」

「いた、いたたたた！　ううう嘘なんかつきませんって!!　大体ディガンさんだって、さっき相当経ってるって言ったじゃないですか!?」

興奮したディガンに髪を引っ張られ、痛みにわめきながらエリッセが言い返すと、やに

わにディガンが何事か詠唱を始めた。
「きゃー殺さないで!!」
早とちりして怯えるエリッセには眼もくれず、ディガンは空中に〈煌〉による鏡を生み出した。そこに映る己の姿をしげしげと眺め、うなずく。
「やはりな。十代のみずみずしさを残しつつ、精神的にも肉体的にもひと回りたくましく成長した美青年……いつもながら完璧すぎて、嫌味なほどだ」
何を食べて育つとこうも自意識過剰になれるんだろう。半ば尊敬の念を込めて見つめるエリッセを、ディガンはじろりと睨み返す。
「確かにお前に、そんな下らん嘘をつく理由もない。すぐに分かることだしな」
これまで通りの傲慢な口調が、不意に感傷的なものを帯びた。
「……しかし……、オレの容姿の変化具合からして、せいぜい十年かそこらだと思っていたのに、二百年、か。そうか。大きな変化は眼の色ぐらいだと思っていたんだが……〈夜の底闇〉は、やはり時間の流れが違うんだな」
月明かりを集めたような金の瞳が哀愁を帯びている。
初めて見る表情に釣り込まれ、エリッセは思わず慰めを試みた。
「げ、元気を出して下さい。ディガンさんはその、確かに二百歳過ぎとは思えないほどお若くていったぁ!!」

今度は額を指先で弾かれ、エリッセは悶絶する。ディガンもディガンで心に傷を負った様子で、口角泡を飛ばす勢いでまくし立ててきた。

「ふざけるな小娘、オレはどう見てもせいぜい二十代、肌の艶から見れば十代でも通用するだろうが!!　お前はこんなに若くて美しいじじいに知り合いがいるのか!?」

『今できたところです』

とは言えなかったので、エリッセは卑屈に「い、いないです、あはは」とごまかした。

「あ、でも、そうか、だから等星石についてご存じなかったんですね……」

〈星〉として認められたその日から、肌身離さず身に着けている等星石。エリッセにとっては生まれた時から当たり前にあったものだが、二百年前にはなかったのだろう。

「ふん、まあな。しかし、二百年経てば地形に見覚えがないのも当然だ。小娘、特別にお前を信じてやろう。王宮まで道案内をしろ」

エリッセの言葉を認めたディガンが話を元に戻した。

そのためエリッセも、もうひとつの質問を思い出した。

「えっ、あの、すいません、どうして王宮に？　そしてなんで、『不幸の星』が私に」

「さっきひとつ質問がある、と言ったよな？　数も数えられないのか？」

「……はーい……」

赤くなった額を押さえつつ弱々しい返事をしたエリッセは、今さらの事実に気づいて悲

鳴を上げた。
「きゃあッ!!　私、外出許可も得ないで出てきちゃったんだ!!」
〈星〉は国の財産であり、そのために特別な保護を受けている身だ。その代わり、勝手な外出など許されない。
禁呪への不安も頭から吹っ飛んだ。反射的に駆け出そうとしたエリッセの手首を、ディガンがぐいっと掴む。
「どこへ行く気だ小娘」
「お、王宮に行く前に、外出……いいえ、外泊の許可を」
模範回答に、ディガンは一層冷ややかな眼をする。
「馬鹿か貴様。オレ様を呼び出したお前がこのまま戻ったところで、よくて鞭打ち、悪ければ死刑だぞ」
「それは二百年前の話ですよね!?　今はせいぜいマイナス評定をされるぐらいですよ!?」
戦時中と同じ基準で考えてもらっては困る。無論、ただでさえ評価が低い身としてはマイナス評定を喰らうのも十分痛いのだが。
「まあ戻りたければ戻れ。オレは別に構わん」
妙にあっさりと、ディガンは手首を解放してくれた。
「今まで通り、『不幸の星』を背負った万年六等星として、大切な先生に迷惑をかけなが

ら生きていくがいいさ。あとマイナス評定を死ぬほどされろ。じゃあな」

「……あっ!!」

短く言い捨て、踵を返すディガンの上着の裾を、エリッセは反射的に摑んで引き留めた。そうと分かっていたような間合いのよさで振り返った金の瞳が、にやりと笑う。

「何を言うべきかは分かっているな？　優等生」

悔しいが、ディガンの言う通りだ。一度『暗黒星』にまで手を出した以上、六等星のまま〈導きの灯〉に戻ることなどできない。『不幸の星』についてだって、王宮が関係あること以外まだ何も聞いていない。

逆に言えば、実力主義の〈導きの灯〉においては、等星さえ高ければ多少のことは見逃してもらえる。当代シリウス・ハーシエルという、典型例もあるではないか。

「こ……これからも何とぞよろしくお願いします、ディガンさん、いえディガン様、世界一強くてかっこいいディガン様々……」

ぺこぺこと頭を下げながら口にしたプライドのない言葉に、ディガンは薄笑いを浮かべてうなずいた。

「妙に祭り上げられるのも窮屈だから、これまで通りディガンさんと呼ぶことを許して

やろう」

すっかり気分を良くしたらしく、尊大に与えられた許可に「アリガトウゴザイマース」と死んだ魚の眼をして応えながら、エリッセは改めてあたりを見回した。

二人の墜落により浅く穿たれた穴以外に特徴のない、短い雑草が生い茂った小さな丘だ。そんなに長い間夜空を駆けた記憶はないのだが、〈導きの灯〉からはかなり離れてしまったらしく、エリッセの能力では知り合いの〈煌〉は感知できない。

「でも……あの、ここ、どのあたりでしょう……？　あの、暗いし、落ちながら飛んだから、実は私にもよく場所が分からな」

そもそもあまり〈導きの灯〉を出たこともないのだと、おずおずと言いかけた言葉をエリッセは飲み込んだ。ディガンの機嫌が下降したのを気配で察したからだ。

「あっの……、あ、ほら、ディガンさんあっち！　あっち、明かりが見えます！　街があるみたいです、あそこで聞いてみましょうよ！」

いいことを思いついたと言いたげに、エリッセは明るい声で提案する。

けれどディガンは、安堵の笑みを浮かべた彼女を冷たく睨んだ。

「……お前、調子のいいことを言って、実は誰かに助けを求める気だな？　大方オレにそそのかされた、とでもごまかすつもりだろう」

そこで初めて、エリッセはその手があったことに気づいた。だがディガンはぽかんとし

てしまった彼女の手をぐいと摑み、乱暴に引き寄せながら低く吐く。
「油断も隙もない小娘だ。さすが……まあ、いい。その案は却下。オレに人里に近づくつもりはない」
何がさすがなのかよく分からず、困惑しているエリッセをじろじろと見て、ディガンは別のことを思いついたようだ。
「しかし、そうだな。たとえこっちが人里に近づかないにしても、お前のその格好はあからさまに〈星〉だ。少々悪目立ちしすぎる」
ディガンの言う通り、エリッセの服装はどこからどう見ても星団に属する〈星〉のもの。現在のところこの丘は無人だが、街の明かりはそれほど遠くない。
星団に属する少女が妙な男と二人連れでは、誰かに出会ってしまった際に怪しまれる可能性は高い。
「……あの、でも、ディガンさんは私を強くしようとしてくれている訳ですよね？　別にやましいことをしていなければ、普通の人にはあなたが『暗黒星』だなんて分からないだろうし、見つかっても平気」
「おまけにずいぶん汚れてしまったしな。よし、まずはお前の服を替えよう」
エリッセの意見を聞くつもりはないらしい。さっさとひとりで決めるなり、ディガンは泥と草の切れ端があちこちについたエリッセをじろじろと眺め回す。

「……どうするんですか？」

服を替えると言ったきり、特に何をするでもなくただ見られているだけというのが不安で、エリッセは思わず聞いてみた。だがディガンはそのことが気に障ったようだ。

「ちょっと黙っていろ。今どんな服にしようか考えているんだ」

エリッセが驚いた顔をすると、ディガンはふふん、と不敵に笑う。

「なんだ、たとえどれだけ力を失おうが、布の形状を変化させる程度の術がこのオレ様に使えない訳ないだろう」

「い、いえ……それはいいですけど、あの、別に私、わざわざデザインなんか考えてもらわなくても……」

エリッセだって一応年頃の少女だ。すてきな衣装に興味がなくはないが、だからといってこのディガンの手を一々わずらわせるのも後が怖い。

しかし彼女の控えめな申し出を、ディガンは一刀両断した。

「何を言う。お前は一応このオレ様が連れている女だぞ。不細工な格好をさせられるか」

どうやら口を挟む余地はなさそうだ。エリッセは仕方なく、「元があまり良くなくてすいません」とつぶやいてみたりした。

「気にするな。そう悪いこともない。十人並みだ」

むしろとどめとなるひと言を最後に、ディガンは完全に黙り込んでしまった。

「……あの、でも、本当に、いいですよ。私の服なんか適当で」
ディガンなりのこだわりがあるのか、エリッセ相手ではイメージが出にくいのか知らないが、かなりの長時間にわたる気まずい沈黙の後、彼女は小さな声でそう言った。
「ええと……そうだ、ほら、服、買えばいいじゃないですか。ほら、さっきの街……」
提案しかけて、エリッセは黙り込む。無言のディガンの視線の言わんとするところを汲み取って、首を竦めながら謝罪を始めた。
「えーと、あの、そうですよね。人里には……むぐっ!?」
ディガンの顔を見るのが怖くて、うつむいた瞬間またぐいっと引き寄せられる。
向かい合わせに抱き合うような格好にされ、また大声を上げかけたエリッセの口を彼は素早く手でふさいだ。
「学習能力のない小娘には、口で言うよりこっちのほうが良さそうだな」
もう片方の手が、驚きにもがこうとするエリッセの額に触れる。
同時にディガンの〈煌〉が大きく輝いたのを悟り、エリッセはびくっと肩を跳ねさせた。
「夜空の支配者、月が二、至純の闇よ。不可避の縁を彼方と此方に結べ」
ディガンの冷たい指先から、熱い痛みが額の中央に入ってくるのを感じる。めまいを覚えてふらつく彼女を抱き留め、ディガンは満足そうに薄笑った。
「不可離の紋をお前に刻んだ。これでお前は、オレの視線が届く範囲から出られない」

「えっ……、な、あっ、きゃー!?　きゃきゃきゃーっ！」

額の皮膚を浅く食み、刻み込まれた小指の先ほどの赤い文様に触れてみてエリッセは大騒ぎを始める。だが試しに指先で引っかいてみても、当たり前だが取れることはない。

痛みこそないものの、不気味な違和感を取り去ろうともがくエリッセを見て、ディガンはにやにやしている。

「そんなことをしても無駄だ。下手なことをすると死に至る場合もある術だぞ。いいかエリッセ、オレの許可なく離れるな。分かったな」

傲岸に命じたディガンの瞳が不意にしかめられる。

「……ディガンさん……？」

今度は何かと怯えるエリッセを見つめ、彼は苦々しい顔で言った。

「額に紋章を入れると、またイメージが変わった。くそ、最初から練り直しだ」

好きにして下さいと言う気力も湧かない。他にどうしようもなく、エリッセは深い深い絶望のため息をついた。

「先生……」

見上げた空では第二の月・至純の闇が、そろそろ中天の位置を離れようとしている。代わって昇って来た第三の月・終末の影が中天にかかる頃、第一の太陽・始原の黎が地平線の彼方に顔を出す。世界にいつも通りの朝が訪れる。



〈煌〉を使う時以外はさほど意識しない、そんな空の羅盤の動きが眼に染みた。いつもの朝ならまず着替え、転げ落ちないように気をつけながら階段を下りて、朝食を取りに食堂に行けばいい。

だが現在は朝食どころか、今夜どこでどうやって寝るのかも分からない状況にある。

「……『暗黒星』なんかじゃないよう、ディガンさんこそが『不幸の星』よう……」

聞こえないようにもごもごと口を動かし悲嘆に暮れたエリッセに、変な顔をするからまたイメージが崩れた、というディガンの注意が飛んできた。

「だからあなたなどに任せるべきではないと言ったんだ！」

神経質なものを含んだ大声が、広い室内いっぱいに響き渡る。落雷のような一喝を浴びて、ティリスはかつて生徒だった頃のように肩を竦めて縮み上がった。

「も、申し訳ありません、私の監督不行き届きで……!!」

〈導きの灯〉星団内の教職員室である。ずらりと並んだ机には、すでに第一の太陽・始原の黎も昇りきり、本来なら授業中であるにもかかわらず、頭を抱えた教師たちが大勢座っていた。

そのただ中でティリスは、枯れ木のように痩せた年配の男性教師に延々と説教を喰らっ

ている。

幼い少女のような姿をした彼女ががみがみと叱りつけられているというのに、誰も仲裁に入ろうとはしない。なぜならティリスは、こうしてさらし者のようにされて怒られるだけの罪を犯したのだから。

資料館の奥に封じられていた禁呪を、稀に見る不運さで有名な六等星エリッセが解き放ってしまったのは昨日の真夜中のこと。

それだけでも大問題であり、授業を中断して事に当たらねばならぬというのに、騒ぎの最中なんとあのハーシエルが忽然と姿を消してしまったのだ。

「シリウスだ、シリウス！　分かりますかティリス先生、シリウスの称号を与えられているのですよ彼は！　あの素晴らしい才能の持ち主を、ああっ、私は情けない……！」

白髪交じりの濃い茶の髪を振り乱し、大仰に天を仰いで叫ぶ男性教師に対し、ティリスはしおしおとうなだれる。以前から自覚していた言葉が唇から零れ出た。

「私も、自分が情けないです……やっぱり私なんかじゃ、ハーシエルくんの教師には……」

「先生」

震える華奢な肩に、ぽんと手が置かれる。

はっと振り向いた彼女に軽く微笑んでみせてから、グラシカルは「まあまあ、ティリス先生をこれ以上叱っても仕方がないでしょう」と仲裁を始めた。

……結果、「元はといえば、あなたのだめ生徒が騒ぎを起こすからハーシエルくんが心を乱されて」云々という説教が始まり、攻撃の標的はグラシカルに移ってしまった。日頃彼を快く思っていない他の男性教師たちまで加わってきて、事態は吊るし上げの様相を呈している。

「グラシカル先生、あなたこそこんなところでのんきに構えていていいのか！　禁書の無断拝借、禁呪の使用、そして無断外泊!!　あなたのだめ生徒がやらかしたことの責任、必ず取ってもらいますからな！」

「今度こそ星団長のひいきは通用しませんぞ！　いくらあなたが一等星とはいえ、シリウスとは格が違う!!」

「ふん、それに、ランゼ先生もお姿が見えないようですが……？　最近エリッセとランゼ先生がこそこそ何かやっていた、という報告が来ておりますよ。色男は罪作りですなあ」

種類豊富な嫌味を苦笑いしながら受け流すグラシカルの横で、ティリスは不甲斐なさでいっぱいになりながら深く息を吐く。何度か止めに入ろうかとも思ったが、そのたびグラシカルが視線で送ってくる合図に止められてしまった。

「……大丈夫でしたか？　ティリス先生」

とにかくエリッセとハーシエルを探しに行くべき、という論調にようやくなってきたのを見計らい、グラシカルがティリスに声をかけてきた。二人をそっちのけで、捜索隊の結

成について熱心に話し合う他の教師たちを、ティリスはこわごわと見つめながら、
「私は大丈夫です。グラシカル先生こそ……」
「僕なら平気ですよ、慣れていますし。――さて、みなさんも責任を取るようおっしゃっていることですし、僕もエリッセを探しに行きますか」
嫌味を茶化すような言い方をしているが、その表情は真剣である。やはりグラシカルも、自分の生徒を探しに出るつもりのようだ。
「まあ……、でも、大丈夫ですか？　また何か言われるのでは」
ティリスの懸念を、グラシカルは「今さらですよ」と笑った。
「ですから、どうぞご心配なさらずに。ハーシエルくんのことも、一緒に探してきますから。僭越ながら、〈導きの灯〉内で彼と渡り合えそうなのは僕だけでしょうからね」
やんわりとした拒絶を読み取り、ティリスはうなだれる。
「……私、やっぱり留守番をしていたほうがいいでしょうか……確かに私の力じゃ、なんの役にも立たないかもしれないですけど……」
三等星としてぎりぎりの能力しか持っていないティリスに対し、レドレリカでも有数の星団である〈導きの灯〉には二等星の教師も大勢揃っているのだ。
「残念ながら、この件にあなたが下手に関わらないほうがいいということだけは、僕も他の先生と同意見です」

冷静な口調で、グラシカルは今度はきっぱりとそう断じた。しかしティリスは一生懸命食い下がった。

「……それは……、そうです。ですが、ハーシエルくんはその、うぬぼれるつもりはないんですけど……こんな私のことを、担当教師としてとても慕ってくれているんです」

「シリウスの称号が失われては」「せっかくのシリウスを」と、室内を飛び交う単語にティリスは眉根を寄せる。

「言葉が足りなくて人から誤解されがちだけど、ハーシエルくんの価値はシリウスの称号だけじゃありません。根は優しい、とってもいい子なんですよ」

能力的には未熟。だが教師の熱意に満ちた瞳が、眼鏡の奥できらきらと輝いていた。

「あの子が何も言わずに急にどこかに行くなんて、初めてなんです。なのに、私が追いかけてこなかったら、またハーシエルくんは心を閉ざしてしまうかもしれない……」

〈導きの灯〉に来たばかりの、乾いた眼をした少年のことを思い出すと、いてもたってもいられなくなる。やっと縮められた距離を、大切にしたい。

「お願いですグラシカル先生、一緒にハーシエルくんとエリッセちゃんを探しに行ってもらえませんか？」

心のこもった懇願に、しかしグラシカルは黙って首を振る。

「申し訳ありません、ティリス先生。ハーシエルくんのほうは分かりませんが、エリッセ

が触れてしまった禁呪は相当厄介なもののようだ。冷たいようですが、もし何かあった場合、あなたまで庇いきれるかどうか自信がありません」

きっぱりと断ってから、ティリスのうなだれた小さな頭を見下ろして彼はつぶやいた。

「それとハーシエルくんは、あなたのことを慕っているというより……」

「え？」

「いえ、なんでもありません。――先生、つらいでしょうが待っていて下さい。ハーシエルくんを見つけたら、必ず知らせますから」

最後はまた優しく言って、グラシカルは他の教師たちの間をすり抜けるようにして教職員室を出て行った。

「……グラシカル先生、でも、私……！」

一瞬は諦めたティリスだが、やはり焦燥が抑えきれない。しばらくはこらえていたが、やがて議論を繰り返す教師たちの眼を盗み、そろそろと教職員室を抜け出した。

やっぱりどうしても、このままではいられない。それにグラシカルがエリッセの教師として彼女を探しに行くのなら、ハーシエルを探しに行くのは自分であるべきだろう。

「本当は、グラシカル先生のような方にあの子を任せるべきなんでしょうけど……」

ハーシエルは、最初から大きな期待を寄せられていた訳ではない。

何せ理由は不明ながらも、両親から厄介払いをされたという経緯の持ち主だ。本人も教

師、生徒に関わらず、誰をも寄せつけようとしない協調性の薄い性格だった。

ティリスも最初は他の者たちと同じように、彼から拒絶された。しかし辛抱強く接しているうちに次第にハーシエルは彼女に心を開き、それと同時に持って生まれた類い稀なる〈星〉の輝きも増大していったのだ。

その時点でティリスは、より優秀な教師に彼の才能を任せようと考えた。他の教師たちもそう考えた。

だが本人は、「僕の先生はティリス先生だけ」と譲らない。ついにはシリウスの称号を得るまでにハーシエルの才能は育ち、ティリスは早く彼を説得するように迫られている。

その能力に相応しい教師を、担当として選び直すように、と。

ティリスとしては内心、グラシカルこそが彼の教師に相応しいのではないかと日々思っていた。その話をハーシエルにするとものすごく嫌そうな顔をし、なぜか「先生はあいつみたいなのが好き？」などと聞かれたりもしたが、あのエリッセがぎりぎり六等星でいられるのもやはりグラシカルあってこそのことだろう。

「でも、今のハーシエルくんは私の生徒だもの……！　待っててハーシエルくん、先生が行くからね……！」

小さな拳を握り締め、ティリスは決意を新たにした。

一足歩を進めるたびに、薄紫の裾がひらひらと動く。
「気に入らないのか？」
すぐ横を歩いているディガンのひと言に、膝丈のワンピースの裾の動きをぼんやりと眼で追っていたエリッセは、はっとした。
「あっ、いえ、そのっ」
もこもことした白い外套の前をかき合わせるようなしぐさをしてしまった彼女だが、ディガンは今回は別に怒っている訳ではないらしい。立ち枯れた木々と雑草の隙間に伸びた、たぶん地元の人間以外あまり利用しないような道を進んでいきながら、
「正直オレも、妥協したことは認める。瞳の色に合わせるなんて無難以外何物でもない選択だしな。だがまあ、お前にはそういう飾り気のない服装のほうが合うだろう」
ディガンとしては潔い言葉なのであろうが、エリッセは別に気に入らないからぼーっとしていた訳ではない。いえ、と首を振り、正面に視線を向けた。
出会ってから一日目の夜が明け、本日から二人はレドレリカ王宮を目指している。
徹夜で歩かされるのではと危惧していたが、思っていたよりはディガンは優しかった。
無人の丘の隅に結界を張った彼は、始原の黎が二人に最初の光を投げかけるまでは眠るこ

とを許してくれた。

その後はどこからかディガンが取り出したパンとスープで簡単な食事を済ませ、以来歩き通しである。結局丘から見た街の名前だけをディガンに読み取ってもらってから、その名を頼りに記憶を辿り、レドレリカ王宮へ続く道に見当をつけた。

……当然の如く、現在もグラシカル及び〈導きの灯〉星団の人々に、エリッセの居場所を知らせてくれる様子はない。無駄を承知で一応訴えてみたが、案の定完全に無駄だった。『不幸の星』についても、はぐらかされたままだ。

例の不可離の紋のこともあり、今のところディガンの命令に逆らう術はなさそうだ。服を変化させる際も力がないないと彼はぶつぶつ零したが、だからといってエリッセに勝てる相手ではないことぐらい分かっている。

「ええと……このままで道は合ってると、思います。四日ぐらい歩けばこの草原を越えられるはずです」

ところどころに緩やかな丘や森を持つこの草原は、隅に〈導きの灯〉星団がある以外は特に大きな街はない。

だがレドレリカという国自体にさほど大きさがないため、ここを抜ければひと息に国の中央部へと入ることになる。

「中央街道に入れば、王宮の方向に行く人たちはいっぱいいますから、きゃっ!?」

しっかりとした口調で話していたのに、最後の最後で凍った水溜まりを踏んでしまい、エリッセは足を滑らせる。

だが素早く伸びたディガンの手が、派手に尻餅をつきかけた彼女の腕を掴み、引き戻してくれた。

「あ、ありが……、きゃーっ！」

しかし衝撃にぐらついたエリッセは、掴まれていないほうの手で手近にある木の枝を握ってしまう。次の瞬間、その上に積もっていた雪が、無情に降ってきた。

「……ううう」

悲しそうな声を出したエリッセは、頭に積もった小さな雪山を払い落とす。その様が哀れを誘ったのか、ディガンがほとんど感動したような顔をして手伝ってくれた。

「すごいな。本当にびっくりするぐらいの不運だ。しかも助けてやると必ず別のひどい目に遭う」

「だからほっといて下さいって言ったじゃないですか……どうせ似たような目に遭うまで、終わらないんですし……」

恨めしそうにつぶやいたエリッセの雪を大雑把に払うと、ディガンはまたさっさと歩き出した。はあ、と大きなため息をつき、エリッセは仕方なくその後を追いかけていく。

足の長さが違うので、ちょっと距離が空くと小走りにならざるを得ない。不可離の紋の

ことを考えるとできるだけ距離を詰めておいたほうが安全なので、また滑らないように気をつけながら足を速めた。

そうすると、薄紫の裾が踊る様も激しくなる。

ディガンの真後ろまで追いついたエリッセは、また視線を膝頭あたりに落とした。

「……変な感じ……」

ただの偶然とは分かっている。ディガンの言う通り、淡い金の髪とも合うこの色をエリッセにというのは、誰もが考えつく無難な選択肢ではあるだろう。

しかし父とは遠く遠く隔たった性格のディガンがこの色を、しかも同じような、ほとんど飾り気のないワンピースを選んだことには、ほろ苦い思いを覚えずにいられなかった。

『お母さんの眼と同じ色だね』

そう笑って頭を撫でてくれた父の記憶は、もう本当にぼんやりとした影のようなものしか残っていない。病弱な妻を亡くして以来、男手ひとつでエリッセを育ててくれた父は、少し頼りないところもあるがとても優しい人だった。

小さな村での親子二人の暮らしは決して楽ではなかったが、思い返せば楽しいことばかり。だから父を亡くした時はとても悲しかったけれど……、父と入れ替わるようにして現れたグラシカルとの出会いは、傷ついた心を優しく包み込んでくれた。

レドレリカの今後に貢献してくれるような、優秀な〈星〉を探し歩くうちに道に迷い、

たまたま村にやってきたというグラシカルに〈星〉の素養有りと認められた。あの時は、輝かしい未来が開けたような気がしていたのに。

「大体私の周りには、優秀な人が多すぎるんだよね……」

思い返すと、だんだん思考が暗くなっていく。

まず、師であるグラシカルは一等星。比較的仲がよく、昇星試験の相談にも何度か乗ってもらったハーシエルは一等星中の一等星、シリウス。

ハーシエルの担当教師のティリスは「私もあまり出来のいい生徒じゃなかったのよ」と慰めてくれるが、それでも彼女は教師になれたではないか。

「元の期待が大きかった私のほうが、かえってみじめってもんですよ、ははは……」

自分で口にした自虐に自分で落ち込んだ。自然と足取りが遅くなり、ディガンとの距離が大きくなる。額に刻まれた紋が、熱を持ったような気がした。

「いけない！」

慌てて足取りを速めても、ディガンにいっさい変化はない。エリッセがついてくることを、当たり前だと思っているのがよく分かる。

こちらのことなど気にした風なく、平気でずんずん前を行く、強く揺るぎないその姿。

怒りや呆れよりも、今は羨望を感じてしまう。

「ディガンさんみたいに、なれたら……」

美貌に、能力に、絶対の自信を持てたら。潔いまでに傲慢に、胸を張って生きていけるのだろうか。

……まあ、ディガンさんも〈煌〉の大きさは今のところ微妙なんだけどね、と、エリッセは自分のことを棚に上げてそう思った。

「おい。何かしゃべれ」

どれぐらい歩いた頃だったろうか。始原の黎は中天を過ぎ、第二の太陽・至高の陽の力が強くなり始めたあたりで、ディガンが不意に振り返った。

「さっきから何を辛気臭い顔で黙り込んでいるんだ。オレまで暗くなる、なんでもいいからしゃべれ」

きゃーきゃー言うなと言ったり何かしゃべれと言ったり、相も変わらず勝手な言いぐさである。エリッセのだんまりに気づいていたのは意外だったが、それならもう少しゆっくり歩くとか、労いの言葉をかけるとか、してくれてもよかったのではないか。

かといって立場上逆らうこともできないエリッセは、眉根を寄せて話題を探した。

「なんでもいいって……あの、それよりそろそろ聞きたいんですけど」

額の赤い紋をこわごわと指先で触りながら、慎重に言葉を選んでいく。

「本当になんで王宮に？　私、王宮なんか行ったことないです。出身はカーヌっていう田舎の村ですし、七歳の時からずっと〈導きの灯〉にいたんで……出かけるって言えば、団外学習で近くの街に行ったのがせいぜいですし」

「それは着いてからのお楽しみだ」

ずっともう一度聞こう、聞こうと胸中で温めていた質問を、彼は素っ気なく一蹴した。

「で、でも、王宮って、王位継承権争いのせいで今も少し荒れてるって聞きますけど……？　妾腹の王子様を推してた人たちは、いまだに文句言ってるって話ですし……」

「王位継承権争い？　どういうことだ。小娘、説明を許す」

どうやらこのこともディガンは知らない様子だ。早速偉そうな命令が飛んできた。

「……あ、はーい、お許しを得られてとっても嬉しいでーす……」

最早逆らう気力もなく、エリッセは唯々諾々と説明を始める。

「といっても、実のところ私もそれほど詳しいことは知らないんですけど……」

三等星以上なら星団の教師になる資格が得られる。二等星以上なら、王宮に召し抱えられる可能性が出てくる。

そのレベルの〈星〉なら王宮内の勢力動向にも熱心になるだろうが、残念ながらエリッセは万年六等星だ。

「えー、ご存じの通りレドレリカは厳然たる長子相続の国でしてぇ。通常はあまり継承権

争いが起こらない、というかそのために厳然たる長子相続制になっている訳なんですが、長子であるルトエ様は昔から非常に病弱でいらっしゃるそうなんです」

先のレドレリカ王はルトエの母を深く愛していたが、その母は娘を産んですぐに亡くなってしまった。

娘自身も五歳まで生きられない、などと医者に宣言されたこともあり、国の未来を見据えた王は、それまで形だけ置いていた第二妃のもとに足を運び始めたのだとか。

「対して弟君のアリエーズ様は大変乱暴、いえ元気でいらして、ご自身のほうが王に相応しいと今でもおっしゃっているそうでして……これにはどうやら、アリエーズ様のお母様のご意向も強いようなのですけど」

聞きかじりの噂話を繋ぎ合わせ、そこまで語ったところでディガンが口を挟んできた。

「長子相続、な。〈星〉としての力は、王位を巡る競争の計算には入らないのか？」

「入らないんじゃないですかね。だって王宮には〈綺羅星〉のみなさんがいらっしゃいますから、〈煌〉を使うならその方たちに命令すればいいでしょう？」

〈綺羅星〉とは、王宮付きの高位の〈星〉たちのことだ。王族とはそういうものだろう、との単純思考から出た言葉を聞いて、ディガンの瞳が鋭くなる。

「ひい!? ご、ごめんなさい、何かお気に障りましたか!?」

「……いや、別に。つくづく平和ぼけしたものだ、と思っただけだ。自分の身も自分で守

れないようなやつが、王になれるんだな」

南北大戦を経験した人間としては、レドレリカの政情に言いたいことがあるようだ。だが言っても詮ないことだと思ったのか、「しかし、王宮で争いか、だからか……」とつぶやいたきり黙ってしまった。

「え、王位を巡る争いと、私の『不幸の星』に何か関係があるんですか？」

どさくさに紛れて質問してみたが、ディガンの態度は素っ気なかった。

「だから、それは王宮に着いてからのお楽しみだ。他に話題は？」

「え、あー……あの、じゃ、じゃあ、ディガンさんのこととか……」

これまたいいかげん説明してほしかった事柄なのだが、ディガンの口から出た言葉はこうだった。

「オレのことは最初に話しただろう。一等星・ベテルギウスのディガン。南北大戦の際故あって封じられた不遇の天才。エリッセ、お前に呼び出され、親切にもその願いを聞き届けてやろうとしている世界一強くて美しい〈星〉だ。これ以上の情報が必要か？」

疑問形を取ってはいるが、実は単なる確認でしかない言葉に、エリッセは「いいえ不要でございます」以外の返事はできなかった。

もうお天気の話ぐらいしか話題がない、と思っている彼女を見下ろす、金の瞳がかすかに光る。

「他に話すことがないのなら、お前自身のことを話せ」
「私のこと？」
驚いて、エリッセは思わずディガンを見上げてしまった。
出会った瞬間から常に主導権を握りっぱなしで、エリッセをぶんぶん振り回し続けているこの男が、自分について話せというのは正直意外だった。
だが次の瞬間、ディガンは実に彼らしい注釈を付け加えてくれた。
「ああ。だがお前の下らん日常のことなんか興味がないぞ。何かこう……そうだな、オレの役に立ちそうなことをしゃべれ」
「……私のことで、ディガンさんの役に立ちそうなことって何か分かりません……」
脱力したエリッセがそう言うと、ディガンもさすがに今のは難しいと思ったのだろう。妥協してやると言わんばかりに鼻を鳴らし、命令を変更する。
「分かった。じゃあ生い立ちから順番に話していけ。詳細な説明がいりそうなところや、はしょっていいところはその都度オレが指示する」
帰りたい、と心底思ったエリッセだが、その時ディガンが形状変化の術で作ったワンピースの優しい薄紫が眼に入った。今も寮の部屋の箪笥に、大切にしまわれた思い出の品と同じ色。
少し心が落ち着いたので、エリッセは気を取り直してゆっくりと話し始めた。

「えーと……私はカーヌで父と二人で暮らしていました。母は私を産んですぐに亡くなってしまったので……ところが父も、私が七歳の時に亡くなってしまって……その時出会ったグラシカル先生に〈星〉の素養があるって認められて、星団入りすることになったんです」

　このあたりはたぶんはしょっていいところだろうと思い、エリッセはごく簡単にしゃべった。彼女自身としても、父との生活をあれこれ細かく思い出しすぎると悲しくなるので、これぐらいでちょうどいい。

　だがディガンは早くも聞きたいことが見つかったようだ。強い印象を持った鋭い金の瞳をきらめかせ、待ったをかけてきた。

「ちょっと待て。お前に〈星〉の素養有りだということを、グラシカルはどうやって知った？」

「偶然……だと思います。カーヌからは今まで〈星〉が出たことなかったし、たまたま用事で通りかかったグラシカル先生が、お墓の前で泣いている私を見つけて……」

　何気ない言葉を聞きとめたディガンの瞳が、さらにきらりと光る。

「するとお前がその村の『一番星』か？」

「……ええ、まあ」

　今となってはあまりありがたくない単語に、エリッセは渋々うなずいた。

『一番星』というのは、ある地域の中で最初に生まれた〈星〉のことだ。

この世界には〈星〉が生まれやすい地域というのがいくつかある。レドレリカ自体が世界有数の〈星〉の産出国家だが、実際に〈星〉が誕生するのは王宮がある首都プレシードを含めた特定地域に集中している。

逆に言えばそこ以外から〈星〉が生まれることは滅多にない。だが一般的に『一番星』は他より高い素養を秘めている場合が多く、特に幼くして素養有りと認められた『一番星』は、どこの星団でも欲しがる貴重な人材だった。

「分かってますよ、『一番星』のくせに六等星かよって散々言われましたから！　いいんですどうせ私なんか、素養なんてただの可能性で、持ってるだけじゃ意味ないとかも十分」

「分かった分かった。続きを話せ」

ごく適当に受け流され、恨めしい顔つきになってしまったエリッセだが、ディガンにはまるで通じていないようだ。文句を言うのも虚しくなり、諦めて話を続けた。

「ええと、だから、両親が亡くなってひとりぼっちになった私の面倒をずっと見てくれているのがグラシカル先生です。……たぶん今も、私のことを探してくれてると思います」

付け加えられたひと言に、ディガンは馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「カノープスのグラシカル、な。不出来な生徒にも分け隔てなく接するできた教師。オレの一番嫌いな種類の人間だ」

グラシカルが冠した称号をつぶやき、ベテルギウスを冠する一等星は不敵に笑った。
「しかしカノープスの称号を持った野郎か。能力的にはなかなか歯ごたえがありそうじゃないか。……そいつを喰らったら、オレの力も戻るかもなぁ？」
一日半の付き合いの中で、何度彼の名前を聞かされたことか。エリッセがどれだけ心を寄せているかは丸分かりのため、人の悪い笑みを作ったディガンはわざと不安を煽るような言い方をした。
「や、やめて下さい。先生に変なことしないで！」
力が出ないと零してはいるが、仮にも一等星の称号を持っているという男だ。おまけに他人の〈煌〉を喰らう『暗黒星』であり、さらにこの性格。グラシカルももちろんとても強力な〈星〉ではあるが、実際に対峙したらどうなるか分からない。
顔色を変えたエリッセににやにやしながら、ディガンはまたあっさりと話題を戻した。
「そいつはお前の心がけ次第だな。それより続きだ。星団入りして、その後は？」
「あ、後は……」
意地の悪いからかいに眉根を寄せたエリッセは、言われるままに思い出した数々の出来事にさらに表情を曇らせていく。
運が悪いなど言い訳だ。単に要領が悪いんだ、時間の使い方が下手なんだ。
その手の説教は何度も喰らったが、初めての昇星試験の時には暴発した他生徒の〈煌〉

で大怪我をさせられた結果、試験自体を見送らねばならなかったのだ。

あの時はグラシカルが相当かけ合ってくれたようだが、結局エリッセ本人が「六等星のままでいさせてくれるならいいです」と言って、それでおしまいになった。……初めての昇星試験だったし、また来年がんばればいい、と多少甘く見ていたことも否定しないが。

「……今と、同じです。ずっと六等星で……ずっと、こんなで」

はあっと大きなため息を吐き、エリッセは小さな肩を落とした。そしてついでに、道の端にできていた雪溜まりにずぼっと足を突っ込んだ。

「きゃきゃー！」

雪に埋まって固まったブーツがすっぽ抜け、片足立ちでひっくり返りそうになったエリッセをディガンは無言で支えてくれる。「ずっとこんな」を体現したエリッセの、頭の上あたりを眺めて彼は瞳を細めた。

「なるほどな。しかし、でかい『不幸の星』を背負っている割には、案外ちんけな不幸で済んでいるじゃないか」

また別の痛いところをつかれ、エリッセはううん、と曖昧な声を出す。

「まあ、基本的には転んだり物をなくしたり出かけた先で大雨が降るぐらいですけど」

確かにディガンの言う通り、自分は不幸で不運ではある。だが初めのうちは気の毒がってくれる相手も、大抵途中から面白がる方向に傾きだすのだ。

仲の良いはっきりした物言いをする友人曰く、「『一番星』で、グラシカル先生にべったりで、なのに鼻につかないのって、あんたが見てて飽きないからだよね。あはは」という感覚になってしまうらしい。

「でも小さい時に両親は死んじゃったし、大きな怪我をしたこともあるし、何よりずっと六等星のままってのはとっても不幸だと思うんですけど……同じ団内には、十一歳で一等星になった天才とかがいるのに。同い年の友達も大抵四等星にはなってるし」

ついでに言うならディガンに出会ったことだって割と大きな不幸に入っていると思うが、エリッセは黙っていた。代わりに雪まみれになったブーツに足を戻しながら、少しだけ表情を明るくして付け足す。

「まあ、でも、グラシカル先生に会えたのはとっても運が良かったと思いますけどね!!」

照れ笑いしてのろける少女にいささか呆れたような顔をして、ディガンは踵を返した。

「現金な小娘だ。まあいい。おい、そろそろ飯にするぞ」

ちなみにディガンの「飯にする」は、どこかの家から適当に失敬してきているらしいことに薄々エリッセは勘づいていた。冬場とはいえ秋のうちに蓄えは十分なはずのレドレリカだからまあいいにしても、後でどこから持ってきているのかさり気なく聞き出して、謝りに行かなければ。

「あ、それと！」

またさっさと歩き出したディガンの背に、エリッセは急いで頭を下げる。
「あのっ……、この服、私、好きです。着られて嬉しい。ありがとうございます」
その言葉にディガンは、嘘をつくなと言わんばかりの半眼で振り返った。
「見え透いた世辞はやめろ、気色悪い。このオレ様が妥協したと認めた服だぞ？　媚びるならもっと、オレの美貌や才能に対しての素直な賛辞を述べるべきだ」
無意味に前髪をかき上げてみたりするしぐさを無視し、エリッセは首を振る。
「そんなのじゃないです。両親がいないんで私、生活の全部を星団にお世話になってるんです。でも六等星だから、あんまりその、贅沢はできなくて、だから大体いつも制服で……普通の女の子みたいな格好、久しぶりにできてちょっと嬉しいんです」
家族がある者はまた少し事情が別だが、星団内での待遇は基本的に等星に依存する。例えば天才少年ハーシエルなどには、星団側がわざわざ特別室を用意したぐらいである。
「現金な上におめでたい小娘だな。まあ与えられた物に礼を言おう、という心意気はそれなりに立派だが」
非常に尊大ではあるが、多少なりともディガンは褒めてくれたようだ。嬉しくなってエリッセは、肩をそびやかした彼の側に少しだけ近づいた。
「だってグラシカル先生も、人に何かしてもらったらちゃんとお礼を言いなさいって言ってましたから。私、せめて生活態度とか心構えだけでもちゃんと先生に相応しい生徒でい

ようって、そう思ってるんです」

毎年試験のたびに慰められるばかりのだめ生徒としては、生活態度ぐらい良くしておかないと誇るところがなくなってしまう。にこにこしながらエリッセは、また半眼になったディガンを見上げてさらに続けた。

「それにディガンさん、昨日丘に落ちた時私を庇ってくれたし……それにそうですよ、私にかかった『不幸の星』を祓うために王宮に行くんですものね。お礼ぐらい言わないと」

庇ってくれたと思った直後にいろいろあったので、保留になっていた礼を彼女はついでに口にしてみた。

だがディガンは、実に素っ気ない口調でこう返してきた。

「勘違いするな。オレはお前を助けたいんじゃない。オレとお前の利害は一致している、だから手を貸してやるだけだ」

言うなりまた前を向き、歩き始めたディガンは後ろ姿のまま続ける。

「それと昨日は、丘に落ちたんじゃない。ちょっとばかり着地がうまくいかなかっただけなんだからな」

「は、はい……」

それを落ちると人は言うのだとエリッセは思ったが、ここで逆らってもうまくない。しゅんと肩を落とした彼女は薄紫のワンピースを見下ろして、だけどやはり、ありがとうは

言うべきだったのだ、と思い直した。

思い直したついでに、今の状況を根本的に思い直してみる。『暗黒星』を呼び出して即すべて解決！　とはいかなかったが、ディガンは自分の願いを叶えるために力を貸すと、今もはっきり宣言した。

いろいろ怪しいところも胡散臭いところもあって完全に安心はできないが、グラシカルでさえ気づいていなかった『不幸の星』の呪い。天才を自称してはばからないディガンのような男でなければ、太刀打ちできないのかもしれない。

それにエリッセにも、なんとなく分かるのだ。封印を解かれてすぐの時よりも、ディガンから感じる〈煌〉は強くなってきている。本人も言っていた通り、彼を封じていた効力が徐々に弱まってきているのだろう。

一等星に相応しい〈煌〉が戻れば、飛翔術、及び転移の術で王宮まではひとっ飛びだ。

「そうですよね……私、ディガンさんを信じて進むしか、今はないんですよね……ていうか、離れられないし逆らえないし……」

何せ額の紋により、繋がれた犬の状態である。自らの置かれた立場を思い出し、またおとなしくなったエリッセのつぶやきに、ディガンが応じた。

「ああそうだ。お前の『不幸の星』はオレが祓ってやる」

頼もしいひと言に続けて、彼はちらとエリッセを振り返り独りごちた。

「そしてオレは、以前と同じだけの力を取り戻す。……いや、昔以上の力を手にできるかもしれないな」

金の瞳が不気味な光を放つ。しかし早足のディガンの背を追うのに精一杯のエリッセが、それに気づくことはなかった。

首元で光る等星石をいじりながら、エリッセは見慣れた教室の中にいた。

六等星ばかりが集まった教室の端で、きゃっきゃとはしゃぐ声が聞こえる。いつしか自分より年下ばかりになった、同じ等星の仲間たち。

「嬉しいよぉ、嬉しいよぉ!!」

「はっ、五等星なんてなれて当然だろう。これで喜ぶほど、オレはガキじゃねえよ」

「あーでも、よかったー。安心したら、やっぱりお母さんに直接報告したくなっちゃった。宿泊許可、まだ出るかなあ？」

友達と抱き合って喜び合う者、冷静を装いながらさかんに鼻をこする者、家族への報告を心待ちにする者。いずれもエリッセを置き去りに、五等星になれた生徒たちばかり。

「……な、な、慣れてる、もん……お、落ちる試験があるなら絶対合格だもん、私!!」

無理やり自分を慰めるエリッセの耳には、浮かれる生徒たちの声がどうしても入ってき

てしまう。特に家族に合格を知らせようとしている少女の声は、ひどく耳についた。
「いいもん……私にはどうせ、報告して喜んでくれるような、家族なんかいないし……」
「僕にもいないよ」
不意の声に驚いて振り向くと、そこには小柄な銀髪の少年が立っていた。今や〈導きの灯〉を代表する一等星、シリウスの称号を持つ天才少年ハーシエルだ。手に、なぜか牛乳が入ったカップを持っている。
「でも僕には、喜ばせたい先生がいるから」
そう言いながら、ハーシエルがぐいっとカップをあおった。途端にぐぐっと彼の背が伸び、エリッセとほぼ同身長になる。
なぜかそのことを不思議に思わず、エリッセは語気を強めて言い返す。
「わ、私にだって喜ばせたい先生がいるもの!!」
負けじと言い返していると、ハーシエルの後ろからティリスが突然現れた。彼女の手にも牛乳の入ったカップがある。
「嬉しいわハーシエルくん、さすが私の生徒！」
微笑みながらカップをあおったティリスの背がぐーんと伸びて、グラシカルと同程度になった。それを見たハーシエルが、慌てたように手元のカップを持ち上げ、
「ティリス先生だけが、僕の先生です！」

「嬉しいわハーシエルくん、さすが私の生徒!!」
競うような速さで牛乳を飲む二人の身長が、見る間に伸びていく。教室の天井を突き破り、ぐんぐん高くなっていく彼らのやり取りだけが、星がまたたく夜空の向こうから降ってくる。
「先生だけが僕の先生です！」
「嬉しいわ！　先生嬉しいわ!!」
「先生!!」
「嬉しいわ!!」
意味を成さない会話を呆然と聞いているうち、驚きは薄れてきた。
代わりに胸の中で育っていくのは、焦燥感。
ハーシエルまでは望まない。けれどせめて、せめて五等星、いや四等星にならなければ。
「わ、……私だって……私だって、強く大きくなって、グラシカル先生に恩返しするんだからーっ!!」
気づけば手に持っていたカップを満たす牛乳を、エリッセはひと息に飲み干した。
途端に、視線が上がる。生まれたての五等星たちを見下ろすに飽き足らず、高く、高く、天まで届かんばかりに。
「あ、れ……、や……、ちょっと、天井、だめ、ぶつかる……!!」

「ぎゃあああーっ、ティリス先生、ハーシエルくん、たふけ、もがっ、もがもがっ!?」

絶叫と共に目覚めたエリッセは、次の瞬間顔に張りついた生温かいものに気づいて舌を噛みかけた。

「もが、うぐぐ、な、ぺっ、ななな、なにっ……!?」

頬に爪を立て、暴れる何かと格闘しているエリッセを、その体を抱えて飛翔術を使っていたディガンが叱りつけた。

「おい、うるさいぞ小娘！　蝙蝠とじゃれるな、落っこちたいのか!?」

「ひぃ、蝙蝠!?　きゃ、きゃー！　いやー!!　また落ちるのいやー!!」

どうにか小さな蝙蝠を引っぺがしたエリッセだったが、徐々に高度が下がっていくのを見取って再び悲鳴を上げた。

エリッセにだけ気の早い蝙蝠が激突してきたことからも分かるように、時刻は〈導きの灯〉を出てから三日目の夕刻。空の彼方に第三の太陽・終焉の夕が消えようとしており、第一の月・起源の陰が力を増していくのが分かる。

しかしそんなことよりも、中途半端な地面との距離が怖い。

高さにすれば大体三階建ての建物ほどだろうか。落ちれば大怪我は間違いなく、冬枯れ

した森の木々が鋭い枝先をこちらに向かって突きつけているような、足元の景色もくっきりとよく分かる。

「落ちるー！　また落ちるぅー!!　よ、よよよ、夜空の支配者、月が一……ッ、いたた!!」

「落ち着け！　そうだ、こっちを向け、小娘!!」

悪夢の余韻と落下の恐怖に怯え、自ら飛翔術を唱え始めたエリッセのあごをいきなりディガンが摑んだ。

そのまま、音がしそうなほど強引に彼のほうを向かされる。抗議の声を上げようとした瞬間、ディガンがふっと微笑んだ。

「オレだけを見ていろ。そうすれば、怖いこともなくなるだろう？」

「……ディガン、さん……」

視界いっぱいに広がる、妖しいまでに美しい笑み。蕩けるような微笑に一瞬呑まれ、そして。

「ディガンさんが一番怖いんですよ何言ってるんですか!?　うえええん、グラシカル先生、お助けー!!」

多少面食いの自覚があるエリッセである。しかし総合的に好みではない男の胡散臭い微笑では、恐怖をぬぐい去るには至らなかった。

一方、ディガンは少なからず自尊心が傷ついた様子だ。甘い微笑みをかなぐり捨てて、

「やかましい、お前だけ落とすぞ小娘!!　人に術を使わせておいて、自分だけぐうぐう寝やがって!!」

「なっ、そ、そもそもディガンさんが悪いんですよ!?　飛翔術は怖いから嫌って言ったのに、速度も高度もどんどん上げるから、びっくりして気絶しちゃったんです……!!」

「うるさい、とにかく本当に落ちるのが嫌なら黙っていろ!!」

騒ぐエリッセを押さえつけながら、ディガンが慎重に高度を落としていく。最初はぎゃあぎゃあうるさかったエリッセも、髪を、服の裾を揺らす風が収まっていくことを察して、ほどなく悲鳴を上げるのをやめた。

「……なんだ、その『今度は無事に降りられたか』みたいな顔は」

「い、いえ、とってもお上手でした……今回は」

飛翔術を用いての飛行の着地点、黄土色の煉瓦の敷かれた道の上に立ち、エリッセは必死に愛想笑いを浮かべる。

「ふん、口の端が引きつっているぞ。まあこっちだって、蝙蝠のひっかき傷だらけの十人並み小娘の愛想笑いなんぞ、嬉しくもなんともないがな！」

先ほどのやり取りを根に持っているのか、ディガンは鼻を鳴らしてそう言い捨てた。

「ひえっ、嘘ぉっ！　よ、夜空の支配者、月が一、起源の陰よ。我が痛苦を飲み込め！」

慌てて治療術を使い始めたエリッセを無視して、枯れた木立の向こうを透かすように瞳

を細めている。

「ま、今日はこんなものか。おい、明日には中央部に出られるのか？」

どうにか小さな爪痕を消し終えたエリッセは、一生懸命頭の中に付近の地図を展開させながら答えた。

「えっ……、はい。今日は予定よりもかなり進めましたから……ディガンさんのせいで、いえ、おかげで。この調子だと、思ったよりも早く王宮に着けそうですね」

わざと人里を迂回するような進路を取っているのに進みが早いのは、本日ディガンが朝から断続的に飛翔術を使用しているからである。先日の落下を思い出し、最初エリッセは激しく抵抗したが、問答無用でディガンは彼女を抱えて地を蹴った。

だが今のところ、落下の悲劇は繰り返されていない。ディガンもさすがに懲りたのか、それとも人目を避けるためか、低速・低高度での移動を何度か繰り返していたせいもあるかもしれない。……調子に乗ったのか、最後の一回は一気に高度を上げたので、エリッセは気絶してしまったのだが。

とにかく、おかげで予定は大幅に繰り上がった。明日見るはずだった黄土色の煉瓦道の上に、二人はすでに着地している。

これはレドレリカ王宮へと続く、中央街道の一端である証だ。この森さえ越えれば、地図上そこはこの国の中央部になる。

「強く美しいこのオレの力をもってすれば、当然だな」
自信を取り戻したのか、格好をつけて前髪をかき上げるなどしていたディガンが、ふと思いついたように尋ねてくる。
「ところでお前、さっき知らんやつの名前を呼んでいなかったか」
「え？　……ああ、そういえば」
唐突な台詞に触発され、エリッセも気絶から目覚める前のことを思い出す。……何度も繰り返してきた落第後の光景に、たぶん身体測定の記憶も混じった、訳の分からない夢。
「……ちょっと、悪い夢を見ていて。ティリス先生とハーシエルくんが出てきたんです」
「ティリス先生とハーシエルくん？」
「えーと、まず、ティリス先生は〈導きの灯〉の先生ですよ。ハーシエルくんはティリス先生の担当生徒で、なんとシリウスの称号を持つ一等星なんです」
「――シリウス」
その単語を聞いた瞬間、ディガンの表情が消えた。エリッセもはっとして口をつぐむ。
二百年間空位だったシリウス。二百年前に封印されたというディガン。
そういえば出現した直後、彼は聞いてきたのだ。お前がシリウスなのか、と。
「あの、ディガンさん……？」
自分を連れて王宮へ行くことと、シリウスへの反応は何か関係があるのだろうか。そう

思いながらおそるおそる呼びかけると、ディガンは無表情に問いを重ねた。
「お前と当代シリウスは、夢に見るほど仲がいいのか？」
言外に「お前ごときが」という含みを感じ取り、エリッセは卑屈な気持ちになりながら答える。
「……よく言われますけど、まあ、そこそこ。ハーシエルくんはあんまり人付き合いのいいほうじゃないですし、能力が高すぎて遠巻きにされがちなんですけど、ほら、逆に私とは差がありすぎて、たぶん、付き合いやすい、の、かなーと……」
説明するうちに悲しくなってきたエリッセをじっと見ていたディガンが、我が意を得たり、とばかりに笑った。
「なるほどな。おかしいとは思っていたんだが、お前、オレを呼び出すためにそのシリウスに手伝わせたんだな」
「……へっ？」
すっとんきょうな声を上げたエリッセを無視して、ディガンは芝居がかったしぐさでうなずいている。
「とぼけるな。『暗黒星』の詠唱が、誰にでも分かるような形で残っているはずがない。難解な暗号に変換されていたはずだ」
「え、ええ、それはもちろん」

素直な相槌に、ディガンは馬鹿にした表情になった。恥知らずめ、と言わんばかりだ。

「だから、『暗黒星』を読み解くのをそのシリウスに手伝ってもらったんだろう？　協力者がシリウスなら話が分かる。本人はこれ以上〈煌〉を高める必要もないし、きっとお前を憐れんで」

ここに至り、エリッセもようやくディガンが何を言おうとしているのか分かった。

「てっ……、手伝ってもらってなんか、いません！」

気がついたら、自分でもびっくりするほどの大声が出ていた。

「自分で、ちゃんとっ……一生懸命準備して、がんばって読み解いたんですからッ!!」

うかつに術を使わせないためだろう。『暗黒星』を使うための詠唱は、ディガンの言う通り複雑な暗号に変換されて隠してあり、ランゼは「詠唱ぐらい自力で読み解いてね～」と丸投げしてきたので頼ることもできなかった。

ものがものだけに誰にも相談できず、おまけにその難解さには何度も挫折しかけるほど。ハーシエルに相談できるならしたかったが、星団きっての優等生を禁呪解読に巻き込む訳にはいかない。

毎年春先に行われる昇星試験に間に合わせるため、ランゼに初めて『暗黒星』について聞かされた秋から冬も終わりに近い今まで、普通の勉強の合間を縫って必死に難解な文章に立ち向かったのだ。いつもの不幸にももちろん邪魔され、ようやくめどがついてきた時、

要点をまとめたノートを誰かに焼却炉に放り込まれた際の脱力感は忘れない。
それをそんな風に言われるのは、いくらなんでも我慢できない。
「そ、そりゃあ『暗黒星』について、詳しいことまで分からなかったのは馬鹿でしたけど……でも私、私なりに一生懸命……！」
「自力で読み解いた、だと？」
エリッセの剣幕に若干気圧されていたディガンが、真顔になる。
いつしか昇り始めた第二の月の光が、その眼を鋭く輝かせていた。
「お前はひとりで『暗黒星』の詠唱を読み解き、自分の〈煌〉で術を実現させ、オレを呼び出した。そう言いたいのか？」
「は、……はい」
今度はエリッセが気圧される番だ。後ずさりそうになりながらうなずくと、ディガンはなおも確認を取る。
「ひとりで、誰の手も借りずに。間違いないんだな？」
「まあ、『暗黒星』について書かれた古書を渡してくれたのは、ランゼ先生ですけど……そしてあの人、中身を改ざんしてくれましたけど……」
何気なく口に出した瞬間、改めて血の気が引く思いがした。
ひたすら無心に、書いてあることをそのまま再現したからだろうが、最終的なイメージ

も内容も違っていたのによくもまあ術が発動したものだ。下手をすれば〈煌〉の暴発を誘った可能性も高かったことを今さら思い出し、無意識に腰の古傷を押さえる。

「――なるほど」

深くうなずいたディガンの、こちらを見る瞳が少しだけいつもと違う。

「お前、本当は五等星、いや四等星ぐらいにはなれるんじゃないのか？」

「え？」

思わず聞き返したエリッセは、次の瞬間顔を覆って地面にへたり込んだ。

「……おい？　どうした小娘、聞き間違えたか？　い、今一応、褒めてやったんだぞ!?」

慌てたようなディガンの声に、エリッセは物憂げに首を振った。

「い、いえ……ディガンさんにお世辞を言われるなんて、私って本当にだめなんだなって思っていたたた!!」

後ろ髪を引っ張って立たされ、悲鳴を上げるエリッセをディガンが怒鳴りつける。

「なぜオレがお前の機嫌を取らねばならんのだ、下らん！　ただ事実を述べただけだ!!」

ひとしきり怒ってから、ディガンは真面目な口調で続けた。

「だが、分からんな。現在昇星試験の基準がどうなっているのか知らんが、禁呪をひとりで読み解けるようなお前が、いくらなんでも六等星というのはおかしくないか？　まあ確かに〈煌〉は小さいが」

それは、内心エリッセも思っていたことだった。

「……私も、自分で言うのもなんですけど、結構努力はしてるんですよ……？　まあ〈煌〉の小ささは否定しませんけど、勉強はたくさんしてます。教科書は一生懸命読みました。暗記は割と得意です。記入欄を間違えさえしなければ、筆記試験だけはいつも合格だって言われてます。まあ〈煌〉の小ささは否定しませんけど」

ハーシエルのような天才ではないことぐらい分かっている。だがその分、努力を惜しんだことはない。勉強にかける時間と情熱なら、誰にも負けないとの自負はある。

「ですけど……、今の昇星試験は、その時持っている〈煌〉を限界まで絞り出すような術を、試験官の眼の前で行使するやり方を採っているので……正直〈煌〉の大きさで、合否がほとんど決まってしまうんです」

もしも『暗黒星』を試験官の前で発動できたなら、等星が上がるかもしれない……などと、エリッセは一瞬不埒なことを考えた。

「オレも、お前の〈煌〉の小ささは否定しない」

繰り返され、またも落ち込むエリッセの金色のつむじあたりを見つめ、ディガンは考え込んでいる。

「能力頼みで、強引にやった訳じゃない、ということか……ふん、そういうところも……」

「え、何かおっしゃいました？」

頭を上げたエリッセから、ディガンはついと眼を逸らしながら別のことを言った。
「いや、昇星試験のやり方が妙だと思ってな。試験官の前でひたすらでかい術を使う、だと？　試験官と対戦したりはしないのか？」
いぶかしげに聞き返され、エリッセは逆にびっくりしてしまう。
「た、対戦なんかしませんよ普通!!」
「普通ってお前、対戦しないと実戦で使い物になるかどうか分からんだろうが。効力の大きい術は発動にも時間がかかる、それぐらいは理解しているよな？」
「いえ、だからその、い、今は戦時下じゃないんですよ、ディガンさん……」
他国の〈星〉と戦う可能性があるのは、一等星の称号を賭けて争う三年に一度の『星合』の際だけだ。それも殺人や過度の暴力行為が禁じられた、競技として、である。
「――王位継承権に〈煌〉の大きさは無関係、昇星試験は実戦ではなく単純な〈煌〉の大きさ、か……ぬるい世の中になったものだ」
また怒り出すのかと思ったが、その表情は不思議なほど穏やかだった。
「だが、一発芸のような術で等星が決まるなら……それも平和の証、か」
先回りして頭を庇っていたエリッセは、見上げたディガンを包む静けさに息を呑む。
生きた時間の差ではない。
悲惨な時代を生きた者と、そうでない者。その差異が半透明の壁としてそそり立ち、彼

の顔を霞ませているように思えた。
「二百年前の大戦でオレの仲間たちが命がけで戦った結果、今の世の中があるのだろう。それはそれで、喜ばしい」
「オレの、仲間……？」
繰り返すと、ディガンはむっとした表情になった。
「失礼なやつだな。オレにも仲間ぐらいいる」
「いえ、あの、そうじゃなくて」
暗記は得意なエリッセだ。二百年前、と聞いた時から、頭の隅をちらちらしていた単語を思いきって口に出した。
「ディガンさんはもしかして、あの『学徒虐殺』と何か関係が……？」
「『学徒虐殺』の時、オレはもう封印されていた」
間髪を容れず、関係を否定された。それ以上追及する余地がないほど、きっぱりと。
「……もう、封印されていた」
かすかな後悔を漂わせて繰り返したディガンの〈煌〉が、高まる。
「夜空の支配者、月が二、至純の闇よ」
「きゃ、きゃあああ!?」
再度頭を庇ったエリッセを包み込み、高まった〈煌〉が広がっていく。

「我らが敵を拒絶せよ」
結界を生み出す詠唱を終えるなり、ディガンはくるりと背を向けた。
「飯を調達してくる。お前は結界から出るなよ」
びくびくしながら顔を上げたエリッセは、遠ざかる背中に思わず言った。
「いや、調達って、またどこかから盗んでくる気ですか!?」
「緊急時の食料の提供は国民の義務だ」
「だから今は戦時下じゃないんですッ!!　もう、後で謝りに行くんで、どこから持ってきたかちゃんと覚えておいて下さいね!!　グラシカル先生に合わせる顔がなくなるんで!!」
気まずい空気が払拭されたことに内心安堵を覚えながらも、念押しを忘れないエリッセだった。

甘かった、とあぶり肉をかじりながら、エリッセはため息をつく。
食事が始まっても、ディガンの様子がおかしい。たき火の向こうに座った彼は、黙々と食事をとるだけでほとんどしゃべらないのだ。
「ディ、ディガンさん、お肉、あんまり好きじゃないんですか？　その、ずっと黙ってらっしゃいますけど、えへへ」

「……」

「あ、す、好きだから集中して食べてるんですか？　私のあげましょうか？」

「いらん」

眼も上げずに言われ、エリッセは自主的に黙った。

よそよそしい空気が肩にのしかかるようだ。いつしかすっかりあたりが暗くなっていることも、気分の落ち込みに拍車をかける。

劣等生として長年生きてきたエリッセだったが、周囲の人間の情には恵まれていたことが今になって分かる。少なくとも食事時に、こんなに重苦しい気分まで一緒に味わうことはあまりなかった。

「あつっ!!」

考えごとをしていたら、肉から垂れた脂が手の甲に飛び散った。そう、こういう目に遭うことはあるけど、と火傷した箇所を舐めながらディガンを見やるが、彼は完璧に無視を決め込んでいる。

――冷たい食卓の記憶が、不意に心の底から浮上してきた。

父が死んだ直後のことだ。

貧しい村の中では、子供を引き取るというのはそれだけ食い扶持が増えるということ。七歳の女の子に労働力としての価値は少なく、親しかった人々は貧乏くじを引かないよう

にと、誰もが眼さえ合わせてくれなくなった。
やむなくエリッセを一時的に預かっていた村長が急に優しくなったのは、怪しい店に売る算段がついたからである。当時は意味が分からず喜んでいたのだが、グラシカル先生に会えて本当によかったと、エリッセは改めて思った。
「……ああいう目に遭いかけたのも、『不幸の星』のせいだったのかな……」
完全にひとりの世界に入り込んでいたエリッセの耳に、乾いたディガンの声が届いた。
「お前の先生は、まだ来る気配はないな」
いつからそうしていたのだろう。とっくに食事を終えたディガンが、じっとエリッセを見ていた。
照り返しを受けた金の瞳は、虫類のような、あるいは金属のような、人ではない色合いを宿していた。一瞬びくっとしたエリッセだったが、ようやくディガンが口をきいてくれた安堵が勝った。
「そうですね。ディガンさん、あんまり〈煌〉を使ってないから見つけづらいのかも」
そのごく自然な返答に、ディガンはかすかに眉をひそめた。
機嫌を損ねたらしいことを察知し、微妙に逃げ腰になるエリッセに金の瞳が冷たく光る。
「確かにオレも、自分の〈煌〉を辿られないよう細工はしているがな。だがそれよりもだ。お前、見捨てられたとは思わないのか？」

「え？」

本気で意味が分からず、変な声を出してしまったエリッセに、ディガンは再度言った。

「お前の大好きなその先生は、お前を見捨てた。だから来ない。そうは思わないのか」

「え、いいえ」

取り立てて困惑した風も迷った風もなく、エリッセは即答する。あまりの迷いのなさに、今度はディガンが変な顔をした。

「だってグラシカル先生はそんな人じゃないですもの。私みたいなどじでのろまで、おまけになんでか『不幸の星』を背負っただめ生徒を、ずーっと面倒を見て下さった、もうもうすごくかっこよくて強くて優しい人なんですから！」

それまでの怯えようはどこへやら、エリッセは瞳をきらきらさせて語り始めた。

「だってね、もう聞いて下さいディガンさん！　先生は噂じゃ王宮にいたこともあるとか言われるほど強力な〈星〉なのに、〈導きの灯〉で一教師として働いてるんですよ！　次代の優秀な〈星〉を育てるのが僕の役目だって、ああもう、かっこよくて強くて優しくて、おまけになんて立派な考えを持ってるのかしら先生ってば!!」

〈導きの灯〉に入団して早幾年。その間ほぼ毎日のように顔を合わせていたグラシカルの顔を、もう三日以上見ていないのだ。

一種の禁断症状が出ており、エリッセは素面で酔っ払ったような状態になって、うっと

りとしゃべり続ける。

「でも先生、私はずっとそのままでいいって何度も言ってくれるんですよね。まああんな生徒思いの先生ですから、私を慰めてくれるのは当たり前なんですけど。そう思うと私、見事『不幸の星』を祓って強くなってグラシカル先生をびっくりさせたいから、もうちょっと先生が来なくてもいいかなって」

弾んだ声で切れ目なくしゃべるエリッセの、ここではないところを見ているような眼をディガンは無言で睨みつける。ややあって彼はこう吐き捨てた。

「気に入らんな」

強い侮蔑を含んだひと言に、エリッセははっとして言葉を途切れさせた。

「お前みたいな発育不全の小娘は趣味じゃないが、このオレ様と一緒にいる女にこうも他の男の話をされると、さすがにいらつく」

闇をひそめた声でそう言うと、ディガンはいきなりエリッセの腕を引っ張った。

いつものようにきゃーきゃーわめくより早く、すぐ側にあった木の幹に背を押しつけられてしまう。

「そんなにグラシカル先生とやらが好きか」

月明かりを遮るよう、彼女のすぐ前に立ったディガンはすみれ色の瞳を見下ろし冷たくつぶやく。たき火の明かりを背負って立つその顔は、影になってよく見えない。

「えっ……、え、え、まあ……」

突然の状況に戸惑いながらも、エリッセはぽっと頬を染めた。

「だってだってかっこよくて強くて優しくてかっこよくて強くて優しくてかっこよくて強くて優しくて」

「……オレはかっこよくて強くて優しくないと言いたいのか、それは」

延々と続きそうな芸のない言葉を遮り、ディガンはさらに冷たい声で吐き捨てる。

「このオレ様とこれだけの時間一緒にいて、その上で他の男のほうがいいだと？　はっきり言って、どうかしているとしか思えんな」

どこから出てくるのか、という自信に満ちた台詞も、ディガンの人目を引く容貌と一等星という肩書きを考えればそれなりの説得力はある。こういう種類の男が好みだという女性も多いだろう。

しかし残念ながら、エリッセの好みはグラシカルなのだ。そして彼とディガンから受ける印象は完全に真逆である。

「や……あの、確かにディガンさんは、かっこいいし……たぶん……その、強いんだろうなーとは思うんですけど、あ、あんまり優しくないし……」

日増しに強くなってきているとはいえ、今のディガンではグラシカルに勝てると思えないのがエリッセの正直な見解だ。おまけに彼は、グラシカルと違ってちっとも優しくない。

「『不幸の星』を祓ってやろうとしているんだぞ。これ以上優しい男がいるか、くそ」

お前だけ落とすぞ、とかさっき言っていたくせに、彼はぶつぶつと悪態をつく。エリッセは半ば呆れて反論した。

「ディガンさんだって、私みたいな十人並みの小娘にどう思われたっていいんでしょ？分かります、あなたはきっと、蜂みたいな体型の色っぽいお姉さんが好きなんだって」

「十人並み」という言葉をかなり根に持っているエリッセの台詞に、ディガンは黙り込んだ。そしてじっと、こちらの瞳を見つめてくる。

「な、なんですか……」

いきなり無言になり、こうもまじまじ見つめられると、エリッセは途端にびくついてしまう。少々生意気な態度を取った後だからなおさらだが、ディガンは思いがけなくにっこりと笑いかけてきた。

「そんなに自分を卑下するな。ただ美しいだけの男は女の顔にこだわるが、美しすぎる男は案外こだわらないものだぞ？　それにお前もまあ、見ようによっては、可愛いところはある」

「……いや卑下するも何も、私を十人並みって言ったのディガンさんですけど」

まだこだわっているエリッセの頬に、不意に大きな手が触れる。暖かな感触と、奇妙に優しい光をたたえたその眼に、一瞬胸が高鳴った。

「なあ、エリッセ。オレがもし、ひと目見た時からお前を本気で可愛いと思っていたと言ったら、お前はどうする……？」

ぱっちりと瞳を開き、エリッセはディガンを見上げて動きを止める。そんな彼女をディガンは、ひたすら情熱的に見つめて続けた。

「『暗黒星』も『不幸の星』も関係なく、ただ、お前と共にいたかった。そのために、お前を連れ出したのだとしたら……」

甘い余韻を含んだ語尾が、夜風に吹かれて消えていく。

ディガンは長い指先に少女の金の髪を絡め、そこにそっと唇を触れさせた。

やがて耐えきれなくなり、エリッセはぶっと噴き出してしまう。盛大に眼の端を引きつらせたディガンに、エリッセは必死に笑いをこらえながら、

「ご、ごめんなさい……！　だってディガンさん、絶対そんなこと思ってないもの……！」

ここまであけすけに言われては、かえって腹も立たないものなのかもしれない。憮然とした顔になったディガンは、まだ指先に絡んだエリッセの髪を放してそっぽを向いた。

「……当然だ。このオレ様がお前のことなんか、そんな風に思っている訳ないだろう」

微妙に悔しそうに言うのを聞きながら、エリッセは意味もなく胸を張った。

「そりゃあ私は万年六等星でどじで間抜けで『不幸の星』を背負っておまけに見た目も十人並みの小娘ですけど、本当に私に好意を持ってくれてるかどうかぐらい分かります。

これでも人を見る眼はあるほうなんですから、私！」

「……人を見る眼がある、な」

卑屈なのか自信があるのか、よく分からない台詞に何か思うところがあったようだ。なんとか立ち直ったディガンは、ふっと口の端に意味深長な笑みを浮かべた。

「ま、お前ぐらいの年齢の女は、愛だ恋だですぐ眼を曇らせるからな」

「……は？」

思わぬ切り返しにぽかんとしていると、ディガンは小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。心なしかその眼には、いつも以上の険が漂っているように思えた。

「かっこよくて強くて優しい、大好きな先生だと、もう何回聞かされたと思っているんだ？　このオレ様にまるでなびかないとは、想い人がいるからなんだろう。そうでなければ辻褄が合わない。とはいえその調子では、向こうに相手にされているようでは」

「ちょッ、なッ、ち、違いますよっ!!　なななな何を言ってるんですか、一体ッ!?」

皮肉の終わりを待たず、顔を真っ赤にしたエリッセは全力で否定した。

「そういうこと、よく言われますけどッ……！　あ、あくまで私にとってのグラシカル先生は、お父さんとか、お兄さんとか、そういう存在なんです!!　い、異性として好きなんて、そんな風に思っている訳じゃありませんッ!!」

ふーふーと興奮した息を吐きながら、エリッセは必死になってまくし立てる。

ランゼをはじめとしたグラシカルに恋する女性たちにとって、エリッセは眼の上のたんこぶ。露骨に邪魔者扱いされることも、または遠回しにさぐりを入れられることもあるが、誓ってエリッセにそんなつもりはない。

確かにグラシカルはすてきな人だ。そのことに異論はない。

けれどやはり、自分たちは教師と生徒。決して、断じて、恋愛感情を持っている訳ではない。そもそも星団内での恋愛は固く禁じられているのだ。

「まあ、正直、先生に恋人ができれば、かなり動揺するとは思いますけど……でもそれは、大好きなお兄さんを取られたような気持ちだと……」

恋人がランゼだった場合は……、世界の終わりが来たような感覚を覚えるに違いないが、祝福はできると思う。ただし、「先生はだまされています」と訴え続けるとも思うが。

「だ、大体私みたいな万年六等星に、悠長に恋なんてしてる時間はないですよ……」

不吉な未来図を頭から振り払いながら、エリッセは曖昧に話を終わらせようとした。

だが正直、自分でも自分の感情が分からなくなる時があるのだ。ましてこのディガン相手に、これで逃げきれるだろうか……と、内心びくびくしていたのだが、

「……ふん、単に自覚していないだけかもしれんが、そのほうがいいだろう」

案外ディガンは、深く追及してこなかった。

「下手に恋愛感情なんぞを持つと、男と女はすぐだめになるからな」

妙に生真面目な表情がひどく新鮮だ。あからさまな世辞を並べて口説かれた時よりも、今のディガンのほうがずっと胸に迫って見えて……、同時に、ひどく遠く感じる。

エリッセについてはあれこれ聞いてきたくせに、自分自身については通り一遍の情報しか与えてくれないディガン。

一体どういう人生を送った結果、こういう男になったのだろう。

「……あの、ディガンさん」

今の雰囲気なら聞けるだろうか。思いきってエリッセが始めた質問を、いきなり普段の調子に戻ったディガンが質問で潰した。

「――なあ小娘。強くてかっこよくて優しい先生が、なぜ『不幸の星』に気づかなかったのか。ずっとそのままでいいと、言い続けてきたのか。本当に考えたことはないのか？」

「え？」

それは前も説明したと思うのだが、ディガンのことだからどうせ都合良く忘れてしまったのだろう。仕方なく、エリッセは律儀に繰り返す。

「それは……だって『不幸の星』が禁呪だからでしょう？　同じ禁呪の使い手であるディガンさんにはすぐ分かったみたいですけど、いくらグラシカル先生だって、できることとできないことはありますよ」

例えば純粋な〈星〉としての素養なら、シリウスの称号を持つ天才少年ハーシエルが

一番だろう。だがグラシカルの価値は、単純な〈煌〉の強さだけではないのだ。

「……それにその、うっかり自分でがんばってみた結果この状況なんですから、先生が『そのままでいい』って言ってくれてたのは正しかったんじゃないかって思いますよ……」

今でも正直後悔の念がぬぐい去れないエリッセがおそるおそる言うと、ディガンは彼女から眼を逸らした。

怒り出すのかと思ったがそうではない。金の瞳は夜空の向こう、レドレリカ中央部に向けられている。

「王宮にいたという噂がある、な……ふん」

さっきちらりと口にしたことを復唱されて、エリッセは眼をぱちぱちさせる。

「グラシカル先生のこと、言ってるんですか？　意外に私の話をちゃんと聞いて……じゃなかった、あの、もしかして、私たちが王宮に向かってることと先生が王宮にいたこと、何か関係が……？」

その時だった。

「きゃ……!?」

青白い、巨大な〈煌〉の輝きが枯れた森と夜空を照らす。

無数に枝分かれした雷光のような光の一端が、ディガンが作った結界を打ち壊し、二人を照らしていたたき火を直撃（ちょくげき）した。

第三章　天才たちの憂鬱

慌てて閉じたまぶたの裏まで、強烈な光に焼かれてしまったようだ。眼を開けられない状態になったエリッセの額に、鈍い音を立てて何かの破片がぶつかった。

「あううう、やっぱりいいい!!」

直撃はされなくても、結局こうなるんだ……と、己の不幸を嘆きながら、エリッセはおそるおそる眼を開いた。

まず見えたのは、ディガンの背中。なんだかんだと言いながら、今回も庇ってくれたようだ。……すべては防げなかったようだが。

彼の体越しに見える森の地面は、無惨な穴だらけになっている。襲撃の痕跡が生々しいが、三つ子月と星たちが降らせる銀光が、悲惨な光景を幻想的なものに見せていた。同じ光を受けて、癖のない銀髪もきらきらと輝いている。

「エリッセ、大丈夫？」

穴だらけになった地面の上に長い影を落とし、小さな人影が夜空から舞い降りてきた。

銀の髪に青い瞳が冷たく映える。黒い制服を〈煌〉の光で包んだその姿に、闇が付け入る隙はない。

一等星に相応しい能力と威厳を備えた彼は、まだたった十一歳の少年。エリッセとはあらゆる意味で対極の存在。

「ハーシエルくん……」

ぽかんとした表情で、エリッセは一等星の少年を見つめた。ディガンはすでに腕組みをやめてじっと少年を睨んでいる。

「お前は何者だ。ガキのくせして、ただならぬ力を感じるが」

今まで見せたことのない、緊張を漂わせた誰何にハーシエルは静かに答えた。

「僕は一等星・シリウスのハーシエル・ディファリア・トールズ。『暗黒星』、ディガン・マキナウスだな。お前のことは書物で読んだことがある」

〈星〉同士の争いの際に定められたルールに従い、ハーシエルは首元で輝く一つ星を掲げて名乗りを上げた。

ディガンのフルネームまですでに摑んでいるということは、ランゼに改ざんされていない『暗黒星』についての古書を読破しているのだろう。天下のシリウスともなれば、〈導きの灯〉の暗部に踏み込む権限を与えられるらしい。

「シリウス？　そうか、お前が今シリウスの称号を持つ者か……」

簡潔な名乗りを口の中で反芻するディガンを見据えたまま、ハーシエルは命じた。
「エリッセ、離れて」
「え？」
急に話しかけられて驚いたエリッセだが、いきなりハーシエルが強い〈煌〉を発し始めたのでさらに驚いてしまった。
「離れてって……あの、私いろいろ事情があって、ディガンさんと離れられないんだけど」
「僕はそいつを退治しに来たんだ。側にいると巻き添えを喰らうよ」
一方的にそう言うが早いか、ハーシエルは腰を低くして構えると叫んだ。
「夜空の支配者、三つ子の月たちよ、我が敵のために葬列を成せ！」
数十人からの命を奪う威力を持つ攻撃術、しかも三つの月の光を贅沢に返しての詠唱に、青くなる暇もない。互いにぶつかり合っては砕け、融合するを繰り返して無限にきらめく死の光の行列の最中、エリッセは夢中でこう叫んだ。
「きゃー！　夜空の支配者、月が一、じゃない二、至純の闇よー！　ええっと刃を断じる不屈の盾となれー！」
危なっかしい詠唱により、かろうじて生み出された見えない盾がハーシエルの術の余波をある程度は防いでくれる。
だがやはり完全には防げず、力の波動に押されてエリッセは体勢を崩した。

「きゃきゃきゃー！」

悲鳴を上げてその場にひっくり返りそうになったエリッセだが、次の瞬間別方向にぐんっと体が引っ張られるのを感じた。

「あ、ありがとう、ディガンさ……、えっ、きゃあああああッ!!」

ディガンが助け起こしてくれたのかと思ったが、違っていた。なぜならディガンはハーシエルの放った術により森の中に吹き飛ばされ、そしてエリッセはその後を追うように同じく森の中をすっ飛んでいるのだった。

「きゃきゃー！　きゃーいたたた！　痛いっ、きゃーのきゃー！」

茂みだの小枝だのに体中叩きまくられながら、エリッセは暗い森の中を飛んでいく。泣きそうになりつつもおそるおそる自分が飛んでいく方向を見ると、ひときわ太い木の幹がそこにあることを悟った。

「きゃあああああー！」

この勢いであれに叩きつけられただでは済まない。

防御術を展開しようとするが間に合わず、必死に頭だけは庇おうと体を丸めたが、無意識に腰に力が入ってしまう。微妙に体の軸がねじれたような体勢でぶつかるほうが危な

い、と思うのに、自分でもどうにもならない。
「グラシカル先生ッ……!!」
泣きそうな声で師の名を呼んだ瞬間、いきなり飛んでいく方向が変わった。
違う方向から負荷がかかったことにびっくりしたエリッセは、驚きのあまりぶつけてもいないのに首を変な風にひねってしまう。
「きゃーいたたた！　きゃーのきゃー！　もうなんなのっ、きゃーっ……！」
痛めた首を押さえながら飛んだエリッセは、森の暗闇に佇む黒い男を見つけた。
「うるさい」
しかめ面をしたディガンが何事か唱えた瞬間、またいきなり失速する。
森の地面の上に投げ出されたエリッセは、その勢いでもっと首が痛くなり、ううう、と悲しくうなった。
「おい、のんきにうなっている場合じゃない。あいつが来るぞ」
ハーシエルのことを言っているのだろう。寝違えたような状態の首をさすりさすり、起き上がったエリッセは涙目でつぶやいた。
「ど、どうしたんでしょう、ハーシエルくん……なんで私までこんな目に……」
離れていろとか言ってくれたくせに、自分までディガンと一緒に吹っ飛ばすとはどういうことだ。後でティリス先生に言いつけてやる、と考えていたエリッセに、ディガンはな

んでもないように説明した。
「ああ、それはお前の額の不可離の紋のせいだ。オレの視界の範囲から出られないと言っただろう？」
「えっ……、じゃあ、ディガンさんが吹っ飛んだら、私も一緒に吹っ飛ぶってこと……？」
「そういうことだ」
事もなげに答えたディガンの眼が動き、エリッセも慌ててそちらを向く。
森の暗闇の中、青白い〈煌〉を発しながらハーシエルがすぐ側に立っていた。
「ハーシエルくん、あのっ、ティリス先生に言われて来たの……？」
生徒であるハーシエルを星団が追っ手として差し向けることは少々考えにくいし、ハーシエルがそれを承知するとも思えない。だが敬愛してやまない担当教師、ティリスの言うことなら従うかもしれない。
もっともな問いかけに、ハーシエルは首を横に振る。
「違う。僕の独断だ。ティリス先生は関係ない」
「なんで……？」
これも当然の質問に、ハーシエルは思わぬ答えを返してきた。
「僕は大きな功績が欲しいんだ。そのために、封印を解かれた『暗黒星』を退治しに来た」
「こっ……、功績、欲しい……の？」

あまりにも意外すぎる回答だった。エリッセは思わず同じ言葉を繰り返してしまう。

ハーシエルという少年は、エリッセからしてみればもう劣等感を覚えることもないほどに全くかけ離れた存在だ。

そんなハーシエルが功績はおろか、何かを欲しがっているところなどほとんど見たことがない。誰もがハーシエルの能力を褒めちぎるが、本人は誰に何を言われても、大体どうでもよさそうな顔をしている。

唯一何かを欲しがっているところを見たことがあるとすれば、あれは身体測定の日。結果の書かれた用紙を握り締め、「せめてエリッセぐらいでいいから背が欲しい」とつぶやいていたことは印象に残っている。夢にまで影響を及ぼしたぐらいだ。

「でも、ディガンさんを倒したからって、ハーシエルくんの背が伸びるはずないし……」

大体ハーシエルはまだ十一歳なのだから、あと何年か待てば自動的に背は伸びるはずだ。かえって混乱してしまったエリッセではなく、ディガンをじっと見ながらハーシエルは突然礼を言い始めた。

「エリッセ、君には感謝してる。この平和な世の中に、功績を得る機会を作ってくれた」

「う、や……そんなこと感謝されても、私……」

「だから離れていなよ。できれば君に怪我を負わせたりしたくないんだ」

心遣いは嬉しいが、こちらは離れたくても離れられない状態なのだ。

「少し下がっていろ、小娘」
エリッセの葛藤を一蹴し、ディガンはおもむろに一歩前に進み出る。
「ハーシエルと言ったな。独断で、ということは単独で、しかもこのオレ様の正体を知りながら向かってくるか。大した自信家だ」
ハーシエルは黙ったまま、だがわずかに右手を反応させた。場の緊張がさらに高まり始めているのが、エリッセにも伝わってくる。
「自信のほどに相応しい実力も兼ね備えているようだな。さっきの術はなかなか見事だった。オレでなければあの一発で、勝負は決まっていただろう」
思いきり森の中に吹き飛ばされた割には相変わらず偉そうにディガンは言うが、確かに大して怪我をしている様子もない。体中あちこち引っかけまくり、髪もぐしゃぐしゃのエリッセとは大違いだ。
「そうでもない。僕はあれで決めるつもりだった」
珍しいディガンの賞賛にもハーシエルはごく淡々と返す。するとディガンは、瞳だけで背後のエリッセを指して言った。
「この小娘のことを考慮して威力を絞ったか？　実際お前の術に巻き込まれそうになっていたしな」
厳密に言うとエリッセを危険な目に遭わせたのは、ハーシエルの術よりもディガンの禁

呪のほうである。しかしハーシエルは少々罪悪感を感じているのか、わずかに瞳を伏せた。
「……エリッセは僕の大事な人と親しいんだ。それに僕とも、他の連中よりは親しい」
だが後悔の表情を見せたのも束の間、再びまっすぐに前を向いた少年は、引かない決意をその表情にたたえていた。
「でも、やっと巡ってきた好機なんだ。『暗黒星』を倒すことができれば、きっと……」
いつになく強い感情を込めてつぶやくと、ハーシエルは小さな拳をぎゅっと握る。そして彼は、ディガンの背後にいるエリッセを見た。
「エリッセ、これが最後の忠告だ。『暗黒星』から離れろ。君の不運を考えると、巻き添えを食う可能性は高い」
「ま、待って待って待ってハーシエルくん待って！　私、ほらこれッ、これのせいでディガンさんからあまり離れられないのきゃー！」
ディガンについてある程度の情報を持っているのなら、額に刻まれたこの不可離の紋のことだって知っているだろう。
なんとかハーシエルの理解を得ようと思い、前に出て説明しようとしたエリッセの足が、いきなりずずっと勝手に後ずさった。
「きゃっ、何これっ!?」
驚いて足首を見てみれば、そこには光でできた鎖がある。お馴染みの叫び声を上げてい

たせいで詠唱は聞き取れなかったが、ディガンの〈煌〉により生み出されたもののようだ。
「下がっていろと言っただろう小娘。安心しろ、まあ死なない程度には守ってやる」
あまり安心できない言葉を吐いて、ディガンはハーシエルに向き直った。その金の眼はらんらんと輝き、全身からは強い〈煌〉が立ち昇り始めている。
封印を解いた直後、飛翔術を保持するのに必死だった彼とは大違いだ。一等星一等星と連呼するだけある、すさまじい〈煌〉の流れにエリッセは戦慄すら覚えてしまった。
「……こんな、に……」
ディガンではグラシカルにはまだ勝てない、と思っていたのはつい先ほどのことだった。しかしこの短期間でさらに封印の効力が弱まったのか、こだわりを見せていたシリウスとの出会いに刺激されたのか。
単に実力を出していなかっただけなのかもしれないが、とにかく今のディガンからは近寄り難いほどの強大な能力を感じる。
おまけにハーシエルからもまた、ディガンに対抗するように小さな体に不釣り合いな量の〈煌〉が放出され始めている。すでに足首に絡んだ鎖は消えているが、これではとても近づけない。
というより、不可離の紋がなければ今すぐ走って逃げ出したいぐらいだった。今のこの二人がぶつかり合ったら、グラシカルだってうかつに手を出せないのではないだろうか。

……生徒であるハーシエルが追ってきたというのに、先生は一体どこにいるのだろう。

この時になって初めて、エリッセは心細さを感じ始めた。

「……グラシカル先生……」

不安そうにつぶやいたエリッセをよそに、自称一等星と最高位の一等星の戦いはついに始まった。先に仕掛けたのはハーシエルだ。

「夜空の支配者、月が二、至純の闇よ。熱よ波と化せ、我が敵を飲み込め！」

それよりわずかに遅れてディガンも叫んだ。

「夜空の支配者、月が二、至純の闇よ。我が力示す力となれ、我が力示す剣となれ！」

詠唱の完成はハーシエルのほうが先。術の効力そのものも、彼が行使しようとしたほうが遙かに強い。

対するディガンが使った術は、エリッセだって苦もなく使える初歩的攻撃術である。

しかしだからこそ、発動は圧倒的に早い。

光の塊がハーシエルを、その手元で発動しかけていた術ごと押し潰す。ハーシエルはまともに受けこそしなかったが、威力に押し流されて十歩ほど後ろに下がる結果になった。

「さすがだな、シリウス。しかし少々焦りが見える。一発で決めようという気負いが大きすぎるようだ」

これが実戦経験の差か、余裕の表情でディガンは笑う。

「そもそもなぜ、そうも功績を立てたがる。お前の歳でシリウスの称号持ち、立派なものだと思うが？　しかもこんな、戦争も終わった世界で」
「……これじゃ足りないんだッ！」
馬鹿にされたと感じたか、鋭く叫ぶとハーシエルはまた別の詠唱を始めた。
今度は登場時に使用した、枝分かれした無数の雷のような光が次々と地面に突き刺さる。
「きゃーっ！」
無差別攻撃の一端が近くまで飛んできたので、エリッセは悲鳴を上げて飛び上がった。だが避けようとした動きに合わせたように、別方向から青白い雷光が迫ってくる。
「きゃー夜空の……、きゃきゃー!?」
なんとか詠唱をしようとした矢先、ばちっ、と激しい音がしてエリッセに向かっていた力が弾け飛んだ。
「ひきゃあああああッ!!」
さらに慌てたエリッセはまたしてもその場に転ぶ羽目にはなったが、差し当たって一等星の術を喰らうことは避けられた。
「おとなしくしていろと言っただろうが、小娘!!」
宣言通り守ってくれたらしきディガンの声が聞こえてくる。おとなしくしていろとは言われていない気がするが、守ってくれたことは間違いない。

「あっありが……きゃー！　きゃーのきゃー！」

礼を言おうとしたのも束の間、今度はディガンが術を放った。ハーシエルのもののように流れ弾こそ来なかったが、爆発に巻き上げられた森の地面がつぶてとなって全身に降り注ぐ。

ごほごほと激しく咳き込みながら、エリッセは頭を庇ってその場に丸くなった。

「ふ、二人ともやめて……！　二人より先に絶対私が死んじゃう……！」

切実な悲鳴も、巨大な〈煌〉と強大な術がぶつかり合う喧騒の中では、自分の耳にすらまともに届かない。

普通の人間だってこの状況でこんなところにいれば、本気でいつ死んでもおかしくない。おまけにエリッセは普通の人間ではなく、『不幸の星』の呪いを受けているのだ。しかも自力でこの場を去ろうにも去れないときている。

「ごほっ、もうやだー！　えーん先生、グラシカル先生、助けてぇー!!」

グラシカルが姿を見せないことに不安を感じながらも、窮地に立たされるとやはりエリッセは彼を呼んでしまう。この声だってグラシカルはもちろん、自分の耳にもろくに聞こえやしないのだが、叫ばずにはいられなかった。

「先生ごめんなさーい！　もう勝手なことはしません、先生の言うことをちゃんと聞くからー！　でも私、『不幸の星』がくっついたままじゃ、いい生徒になれそうもないんだけ

ど……」

後半ただの独り言になった言葉が、途中からはっきりと自分の耳にも届き始めたことにエリッセは気づいた。

頭を低くした体勢を保ったまま、おそるおそるあたりを見回す。視界はまだ、土埃や白煙に閉ざされた状態にある。

しかし間断なく上がっていた爆発や何かをぶつけるような音はすでになく、濁った空気も冷たい夜風に次第に洗われていく。

「お、終わった、の……？」

まだ微妙に痛む首筋を気遣いながら思いきってもっと顔を上げると、棒立ちになっているハーシエルの姿がまず見えた。

黒い制服はあちこち破れ、砂埃がついているがそれほどひどい怪我をしているようではない。だがハーシエルの表情は、まるで思わぬ一撃を背後から喰らったかのような驚きに満ちている。

「……ティリス先生」

ぽつりとつぶやいたハーシエルが見ているのは、一等星の術が炸裂した結果、やけに見通しの良くなった森の向こう。

少女のような姿の黒髪の女性がそこに立ち、ハーシエル、その側にいるディガン、まだ

地面に貼りついた状態のエリッセを順繰りに眺めている。
「ハーシエルくん、エリッセちゃん、一体どうしたの……？」
あちこち散々探し回ってきたのだろう。冷たい空気に頬を真っ赤にしたティリスは、呆然とした表情でつぶやいた。

「先生……どうして」
ティリスがここに来る、という予測はハーシエルの中になかったようだ。硬く強張った声で尋ねた彼に、ティリスもまた呆然としながらも答えを返す。
「それは……だってハーシエルくんは私の生徒だもの。心配で、だからこっそり……」
「こっそり……先生、まさか僕のために、規則を破ってまで……!?」
動揺するハーシエルに、ティリスはためらいながらも首を縦に振る。
「い、いいことじゃないと思うけどね……でもグラシカル先生もエリッセちゃんを追って行ったし、やっぱり私も行かないと、と思って……」
グラシカルの名前に、動揺しながらも微妙に嬉しそうだったハーシエルの表情が軋む。
それとは対照的に砂埃まみれのエリッセは、がばっと起き上がった。
「グラシカル先生!?　先生が来てるんですか!?」

満面の笑みを浮かべての問いかけに、ティリスはうなずいた。
「そのはずよ。私ね、実はグラシカル先生にも、危ないから出ないほうがいいって言われたんだけど」
聞かれるままにそこまで答えたティリスは、途中で最初の質問に戻った。
「それはそうと……エリッセちゃん、その人、まさか……」
言われてエリッセもはっとした。
この場でティリスが「その人」扱いするのは、ハーシエル同様微妙に衣装をぼろぼろにした男ひとりしかいないのだ。
「この人は……だめ、ティリス先生逃げて！」
「……え？」
ちょうど何歩か生徒たちに向かって足を踏み出していたティリスは、びっくりしたように動きを止めた。
「え、えっと……『暗黒星』！　私が禁呪を使って呼び出してしまった人で、私の『不幸の星』をどうにかしてくれるっていう……そんなに悪い人じゃないかもしれないけど、あんまりいい人でもないような気が」
どう説明しようか、迷いながらしゃべりだしたエリッセを尻目に、ディガンはハーシエルとティリスを交互に見た。

「なるほどな」

それだけで何かを把握したらしい彼は、思わせぶりなひと言を吐いてハーシエルを見やる。

「能力も大人顔負けだが、いらないところまで成長しているようだな。ガキがいっちょ前に色気づきやがって」

口の端に笑みを含んだままディガンが何事か唱えた。と思ったら彼の姿は、あっという間にティリスのすぐ後ろに移動していた。

「先生！」

悲痛な叫びがハーシエルの唇を割る。ティリスのほうはびっくりしすぎて声も出ないようだが、そんな彼女の肩にディガンは後ろからそっと手を回した。

「オレにだけお荷物付きってのは公平じゃないだろう？　発育不全の小娘は好みじゃないが、他人の女なら少しは燃えるしな」

ティリスとエリッセのぱっと見の印象は似ている。ティリスがせいぜい二十歳前後にしか見えないため、姉妹に間違われることも多い。おまけに胸部の発育に関しては、実はエリッセのほうが少々よかったりする。

「……私はたぶんあなたより年上ですよ！」

寒さのためではなく顔を赤くして叫んだティリスも、ディガンの見た目上の年齢しか分

からない。

『暗黒星』、という言葉に薄々まさかこれが封印されていたはずの、との思いを抱いてはいるが、エリッセの要領を得ない説明で彼女も混乱している。何より怒りが恐れを振り切ってしまった。

感情に任せてディガンの腕を振り払うと、ティリスはすかさず詠唱を始める。

「夜空の支配者、月が二つ……、んぐー！」

ところがディガンは、実に呆気なくティリスの口を大きな手でふさいでしまった。

んぐんぐ言いながらもがく彼女を、ディガンは硬直しているハーシエルに見せつけるように抱き寄せた。

「オレより本当に年上ならすごいがな……まあいい。活きのいい女は好みだ」

二百歳を超えるはずのディガンは、一生懸命じたばたしているティリスを抱えてにやにやしている。

「別に人質の必要もないが、小僧、お前の力はまだ天井とは言えなそうだ。見せ……」

何か格好のいい挑発の言葉を言おうとしたディガンの肩先を、青白い閃光がかすめる。

怒りに顔を歪めたハーシエルが、みなまで聞かずに飛びかかって来たのだ。

「僕の女を放せ！」

よほど感情が激しているらしい。何やら危険な発言をしたハーシエルは、矢継ぎ早に術を繰り出しながらあっという間にディガンに肉薄していった。

「ちいッ」

ティリスを使った挑発により、ハーシエルがこれほどまでに力を出してくるとはディガンも予想外だったようだ。荷物を抱えていては避けきれないと悟ったらしく、右に左に飛び退って避けながら、途中で彼女を突き飛ばした。

エリッセ目がけて。

「きゃあっ！」

「きゃー！」

悲鳴を上げて倒れ込むティリスを、同じく悲鳴を上げたエリッセがなんとか受け留める。勢いで下になったエリッセのほうが思いきり背中を打ってしまったが、ティリスも眼鏡がずれて童顔が露になった。

「ご、ごめんなさいエリッセちゃん！　ああ、でも、ハーシエルくん……!!」

おろおろしながら眼鏡をかけ直したティリスだが、はっきりした視界に映る戦いは完全にハーシエルが押している。

「あ、あら？　ハーシエルくん、勝てそうね……」

慌てた反動か間の抜けた感想を漏らしたティリスだが、エリッセは青くなっていた。
「勝てそうっていうか……きゃー！　ハーシエルくんだめよきゃーやりすぎ……！」
震え上がるエリッセの言う通り、鬼気迫る形相になったハーシエルは恐ろしい速度で術を繰り出していく。細い指先から熱と光が放たれるたび、森の木々を巻き込んでディガンの周囲が燃え上がる。
今のところ、ディガンも紙一重でしのいではいる。だが攻撃を仕掛ける側に移れないでいるらしく防戦一方だ。
しかもハーシエルの〈煌〉は天井知らずに上がり続け、正しく地上に降りた一等星の如くにその姿は燦然と青くきらめいている。
「どうした、もっと本気を出せ、ディガン!!」
興奮しているのか、ハーシエルの口調はいつになく荒い。
「僕はシリウスだ！　お前を封じたシリウスだぞ!!　やっぱりシリウスには勝てないか!?」
「え？」
はらはらしながら状況を見守っていたエリッセだったが、思わぬ言葉に気を取られた。
「シリウス……、二百年前のシリウスって……、きゃあ、ディガンさん、危ないッ!!」
自分の体より大きい、剣のような形状の〈煌〉を、ハーシエルがディガンに向けて振りかぶるのが見えた。

あれは確か、さっきディガンがハーシエルの術の発動を潰した初歩的攻撃術。こんな状況でも冷静に学習し、同じ愚を犯さないとは天才としか言いようがない。

一方のディガンも、連呼される「シリウス」に反応してかハーシエルに引きずられてか、その〈煌〉は高まり続けている。しかしあまりにもハーシエルの勢いがありすぎて、攻勢に出られない。

このままでは、本当にディガンが殺されてしまう。

「ハーシエルくん、こんなに強かったの……やっぱり私じゃ、ハーシエルくんの先生には相応しくないわね……」

「先生感心してる場合じゃ……、ディガンさん！」

絶叫したエリッセの十歩ほど前に、ついに耐え切れなくなったらしいディガンが吹き飛ばされてきた。さすがに余裕を保てなくなったらしく、切れた唇の端をぬぐう顔は険しい。

「ちっ、これほどとはな……」

ハーシエルの力、その全貌を見ることを望んでいたらしきディガンでさえ予想以上のものだったようだ。完全に自業自得だが、追いつめられた彼の表情を見てエリッセの胸はぎゅっと締めつけられた。

なまじ能力があるだけにろくでもない性格が目立つ男ではあるが、彼はエリッセに憑い

た『不幸の星』を祓うと約束してくれた。一応何度も、庇ってくれた。

禁呪『暗黒星』。嫌われ者の闇星。

けれどエリッセにとっての彼は、またとない幸運を運んでくれる〈星〉かもしれない。

一方ディガンの足元に滑るように進んできたハーシエルは、心の芯まで怒りが浸透したゆえの凍るような無表情だった。その〈煌〉は依然として、強大な光を放ち続けている。

「こんな程度か？　『暗黒星』」

つまらなそうに、ハーシエルはつぶやいた。乾いた傲慢さが年齢と不釣り合いだ。

「ショナエル・アルケイシアにしたように、僕の〈煌〉を喰らう程度の能はないのか？　なんなら今度は僕が、貴様を喰らってやろうか？」

歴史学の時間に何度か聞いた名前に、そしてディガンと出会って以来何度か脳裏を過ぎった名前に、エリッセはぴくっと反応した。

「それって確か、『学徒虐殺』の時の、悲劇のシリウス……？　ひゃああっ!?」

突然全身総毛立ったエリッセは、思わずティリスと顔を見合わせた。彼女も同じ寒気を感じたらしく、顔面蒼白になっている。

この威圧感の原因は、勝利を確信していたはずのハーシエルではない。

「――そんなにオレを、無敵の王にしたいのか」

先ほどまでは防戦一方だったはずのディガンが、異様な圧迫感を放ちながらゆらりと起

き上がった。その身から放たれる強力な〈煌〉が、色味を帯びていく。
ベテルギウス特有の赤ではない。黒。夜。……いや、闇。
闇色の〈煌〉が、月明かりと星明かりを呑み込み、あたりを暗黒に染めていく。
この感覚には覚えがある。
〈導きの灯〉の地下で、エリッセが『暗黒星』を発動させた時と同じ……
「いいだろう。喰らってやるぞ、小僧!!」
吠えたディガンの金の眼が、ぎらりと輝いたように思えた。
「星喰い星。暗黒の星。すべての光を食む闇星。光を喰らう定めの者」
正しい『暗黒星』の詠唱を高々と叫ぶその美しさは、月に似ていた。遠い夜空の彼方で、見下ろすすべてを蔑むように冷たく輝く月。
「始原の黎、至高の陽、終焉の夕、起源の陰、至純の闇、終末の影。一等星ディガン・マキナウスのあぎとへ、輝きを捧げよ!!」
三つの太陽と三つの月の力を借りて、呆気なく禁呪は完成した。私の時は星海図が必要だったのに、とエリッセが悔しがる暇もなく、突然の事態に硬直したハーシエルを暗黒の〈煌〉が包み込む。
あ然とするエリッセの中にある、空の羅盤にはついさっきまで三つ子の月と星々、そして自分を含めた四人の〈星〉が映っていた。

そのうちのひとつが消えた。
ハーシエルの〈星〉の、輝きが分からない。
「う、嘘!?　そんな、嘘だよね、私が六等星だからだよね……、きゃっ!?」
うろたえるエリッセの頬を、刃と化した風がかすめる。いっさいの輝きを返さない、黒い繭状に凝ったディガンの〈煌〉目がけて、突然ティリスが攻撃を放ったのだ。
やはりと言うべきか、彼女の攻撃は呆気なく闇色の〈煌〉に吸収されてしまった。するとティリスは、いきなり黒い繭に摑みかかった。
「やめなさい『暗黒星』、またあなたの親友を……シリウスを襲うなんて、許されない!!」
答えは、黒い〈煌〉の生む疾風だった。弾き飛ばされたティリスの巻き添えを喰らい、もんどりうって地面に転がったエリッセだったが、心に受けた衝撃が大きすぎてあまり痛みを感じない。
――二百年前のシリウスと、ディガンが親友?
――あのディガンが、いつにない表情で仲間だと語った相手を……襲い、喰らった?
だから封じられた?
愕然とするエリッセの空の羅盤の中に、唐突にハーシエルの〈星〉が戻ってきた。

再び月明かりの下に現れたディガンは、ひどく消耗して見えた。『暗黒星』は、やはり術の創作者であるディガンにも扱いの難しい術なのだろう。

肩で息をしている彼の前に膝をついたハーシエルも、消耗は激しい様子だ。……たぶん、ディガンに〈煌〉の一部を喰われたからだ。

だが、ハーシエルはすぐに立ち上がった。そして、おもむろに詠唱を始めた。

「夜空の支配者、三つ子の月たちよ」

一撃で決めるつもりだったと言った、あの術と同じ。三つの月の光すべてを返すことを宣言したハーシエルの眼に、迷いはない。

「冷たい死の針を、五体に打ち込め……！」

対象者に相当近づかなくてはいけないが、その分極めて殺傷能力の高い攻撃術。

禁呪とまではいかなくとも、星団を旅立つ日までは学ぶことすら禁じられているはずの致死の術がディガンに迫る。若干発動に時間がかかるが、今の状況なら避けられまい。

『星合』でもないのに、〈星〉が〈煌〉を使って〈星〉を殺すのは大問題だ。しかし事は正当防衛で済まされるだろう。何せハーシエルはたった今、禁呪の餌食になりかけていたのだから。

エリッセも、いまだ足が震えている。ここ数日ののんきな道行きで、忘れかけていた『暗黒星』の恐ろしさを思い知らされたのだから無理はない。

やっぱりディガンは『暗黒星』。
嫌われ者の闇星。
金の瞳を伏せ、疲れたようにうつむいているうちに、ここで始末しておくべきなのだ。
でも。

「だめー！」
大きく叫んだエリッセは、次の瞬間ディガンの胸にかじりつき必死になって訴えた。
「だめよハーシエルくん、まだ聞いていないことがたくさんあるの、ちょっと待っ……！」
叫ぶ声が途切れる。時すでに遅し、すでに発動段階に入っていた術は光の針となってエリッセの背中に降り注いだ。
「エリッセ!?」
「エリッセ！」
「エリッセちゃん！」
三者三様の呼び声はエリッセの耳にも届いていた。だが彼女の意識は全身が燃え上がるような感覚と、何かが背に突き刺さった痛みに飲み込まれていく。
「小僧、貴様……！」

怒りに燃えたディガンの声が轟き、彼の〈煌〉が夜空を焦がす勢いでふくれ上がった。
それを遠く感じたのを最後に、エリッセの心は闇に沈んでいった。

「エリッセ、ごめん。ごめんね」
包帯だらけでベッドの上にいる自分の横で、沈痛な顔をしたグラシカルが何度もそう繰り返している。〈導きの灯〉の医療施設内にある小部屋はとても静かで、そのせいか彼の声は痛いほどに大きくエリッセの耳に聞こえていた。
ううん、いいんです。唇だけを動かしてエリッセは言った。先生のせいじゃない。私のいつもの不運のせいだもの。痛かったし、下手に〈煌〉で治すと後が厄介だからってことで当分動けないけど、でも、グラシカル先生が看病に来てくれるのなら。
「ごめん。エリッセ。君を守ると誓ったのに……ごめん」
カーヌで初めて出会ったあの日、言ってくれた言葉を彼は覚えていてくれたのだ。嬉しくなって、エリッセはなんとか起き上がろうとした。
その瞬間、沈んでいたグラシカルの表情が一変し、吊り上がった瞳が金色にきらめく。ひいっと喉を鳴らしたエリッセの襟首を引っ摑むと、彼は別の男の声で叫んだ。
「起きろ、エリッセ・リトラーユ！　オレを起こしたやつが寝るな!!」

「んきゃあああー！」

懐かしい夢から覚めてすぐ、エリッセが見たのはきつくまなじりを吊り上げたディガンの金の瞳だった。

「この馬鹿小娘！」

起き抜けのさらなる一喝に、エリッセは慌てて飛び上がる。そして飛び上がった拍子に、こちらの顔を覗き込んでいたディガンと思いきり額をぶつけてしまった。

「いたあっ！」

「ぐっ、この……！」

不運のおすそ分けをもらったディガンがうなり声を上げるが、彼が怒鳴ろうとした瞬間ティリスの嬉しそうな声が聞こえてきた。

「ハーシエルくん、よかった……！」

額を押さえて声がしたほうを見たエリッセは、ティリスに膝枕されて焦げた地面に寝そべっているハーシエルを見つけた。

黒い制服はあちこち焼け焦げ、傷だらけで、一等星の証である一つ星のチョーカーにさえ炭がついている。常に賞賛の声の中にいた少年とは思えないみじめさだ。

「……みっともないな……」

ぽつ、とつぶやいたハーシエルは、よろよろしながら身を起こそうとする。エリッセ同様彼も今意識を取り戻したばかりらしく、ふらつく体をティリスは慌てて抱き抱えた。

「だめよハーシエルくん、あなたぼろぼろじゃないの！　大丈夫、もういいのよ、この人は思ったよりも悪い人じゃなさそうだし……！」

止めようとするティリスを、ハーシエルは小さな手で振り払おうとした。

だが『暗黒星』を受けた上、ほとんどの〈煌〉を絞り尽くした彼はただの子供でしかなく、腕力では小柄なティリスにすら負けてしまう。

結果ティリスの腕に包まれたまま、腹立ちを込めた声でハーシエルは叫んだ。青い瞳はきつくディガンを睨んでいる。

「いい人でも悪い人でも、こいつが『暗黒星』だ。この機会を逃せば、今の世の中じゃ大きな功績を得られる機会なんて巡ってこない……!!」

なおも功績を立てることにこだわる彼を見つめ、ティリスははっとした顔になった。

「……ハーシエルくん……あなたもしかして、ご両親のところに帰りたいの……？」

思わぬ言葉に、ハーシエルと一緒にエリッセも眼をぱちくりさせた。

そういえば、ハーシエルは両親に疎んじられていると聞いたことがある。

本来〈星〉の素養を持つ者は全員が星団で学ぶことを義務づけられているが、貴族の中

には我が子にそのような義務は必要なしとし、寄付金を払ってやり過ごす者も多い。だがハーシエルの両親は、寄付金を払ってまで我が子を星団に送り込んできたという。

「ハーシエルくん、ねえ、そうなんでしょう？　大きな手柄を立てればおうちに帰れるって、そう思ってるんじゃないの？」

「……違う」

すぐにハーシエルは否定した。だがティリスはその反応こそが自分の推測が当たったためと解釈したようで、そのまま自説を展開し続けた。

「みんなはあなたのことを大人びて、可愛げがないなんて言うけど私は分かってる。あなたは人より強い能力を持っているけど、他の子と同じように甘えん坊で寂しがりやよ。ひとりで寝るのが嫌だからって、しょっちゅう私の部屋にお泊まりしに来るじゃないの」

その言葉を聞いたディガンが「マセガキ」とつぶやいたことに、エリッセは気づいた。

だがティリスは気づかなかったらしく、微妙にずれた眼鏡を直してなおも続けた。

「こんなこと、星団にお世話になってる身として言ってはいけないのかもしれないけど……でもね、先生、ハーシエルくんに幸せになってほしいの。力になれないかもしれないけど、なんなら私がご両親にかけ合っても」

「違う！」

鋭い叫び声を上げたハーシエルは、もう一度ティリスの手を振り払った。勢いに押され

て片手を後ろについてしまう彼女を見つめ、ハーシエルは声を震わせた。
「僕はあんな親なんかいらない。僕は先生と一緒にいたいんだ。僕は先生のことが……好きなんだ」
「わ、私も好きよ、ハーシエルくん……」
「違う！　僕は男として、女としての先生が好きなんだ!!」
白い頬を薄赤く染めての告白に、眼鏡の奥のティリスの眼が点になる。エリッセもびっくりしてしまい、思わずこう聞いてしまった。
「ハ、ハーシエルくん、あの、ティリス先生はグラシカル先生より年上なんだけど……？」
「そ……そうよハーシエルくん。先生こう見えても三十過ぎてる」
「三十過ぎてるだと!?」
ティリスの告白に今度はディガンが変な声を出したが、それを打ち消すかのようにハーシエルは叫んだ。
「三十でも四十でも五十でもいい！　僕は先生が好きなんだ!!」
一度宣言したことで開き直ったようだ。ハーシエルは動揺するティリスの両手をぎゅっと握り締め、真剣な顔で言った。
「僕をまともに扱ってくれたのは、世界中で先生だけだった。だから僕は先生のために、一度は捨てようとしていた〈煌〉を磨こうと決心したんだ」

「ハ、ハーシエルくん……」

天才少年の思わぬ告白にティリスはもちろんエリッセ、そしてなぜかディガンまでがかすかに表情を揺るがせる。

「だけど先生は、いつまで経っても僕のことをただの生徒としてしか見てくれない。……びっくりしてるけど、前にも言ったじゃないか、好きだって……なのに先生、私も好きよーとかのんきに笑ってるだけで……」

悔しそうにハーシエルは語るが、エリッセは正直、それはそうよねと思っていた。

自分から見ても彼は子供なのだ。ましてや三十を過ぎているティリスから見れば、本気で告白されるなどとは夢にも思わないだろう。

だが、今のハーシエルはどう見ても本気だった。普段から冗談を言う性格でもない。

ティリスもティリスでこういう状況に慣れていないのだろう、いつものように教師ぶることもできないようで、しどろもどろに抗弁した。

「いや……待って。ハーシエルくん、落ち着いて。ね？　先生なんかおばさんだし、顔だって十人並みだし、教師としても落ちこぼれる寸前で……ハーシエルくんにはもっとお似合いの子がこれから……ね？」

「いいんだよ。先生の可愛さなんか、僕だけが知っていれば」

いたって真面目な口調でそう言うと、ハーシエルは悲しそうに瞳を曇らせる。

「分かってるんだ。僕は背だって低いし体格だってこんなだし、男として頼りないってことぐらい。でもいくら牛乳飲んで運動してよく寝ても、ちっとも大きくならないんだ」

悲しげな眼のまま、彼はちらりとディガンを見やる。自称の部分も相当強いが、他者も認めざるを得ない美青年であるディガンは、ハーシエルの劣等感を刺激するらしい。

「だってハーシエルくん、まだ十一歳だもの。男の子の成長期はもうちょっと先だし、同い年の子と比べてもあんまり変わらないわよ？」

慰めるようなティリスの言葉にも、ハーシエルは首を振ってしまう。

「そんなに待てないよ、男はみんな狼だ！　いつ誰が僕の女に手を出すか分からないのに、ぐずぐずしてはいられない!!」

「……先生はいつからハーシエルくんの女になったのかしら？　ていうかハーシエルくん、あなたの歳でそういう考え方はそもそもどうかと……」

無口で無表情な孤高の優等生の仮面の下、隠されていた危険思想を次々と語り始めたハーシエルに、ティリスは思わず突っ込んだ。だがまだハーシエルの、ある意味子供らしい暴走は続く。

「僕は今すぐそこの『暗黒星』とか、……グラシカル先生ぐらいになりたいんだ。そうしたら先生だって、僕のこと男として意識してくれるでしょう？」

かなり無茶なことを口走ると、ハーシエルは今度は恨めしそうな表情になった。

「どれだけ〈煌〉を磨いても、先生はすごいねって言ってくれるだけだしさ。グラシカル先生とかだったらちょっと近づいただけで顔を赤くしたりするのに、僕とは一緒のベッドで寝ても何もないなんて……」

「ちょ、ちょっと待ってハーシエルくん、あなた何を期待して私の部屋に来てたの……？」

さすがに怯えた顔になったティリスの手をハーシエルは離した。しょんぼりと肩を落としたその姿は、元が顔立ちの整った少年であるだけに哀れを誘う。

「だから『暗黒星』を倒して、僕の力を先生に認めてもらったら、結婚してもらおうって決めてたのに……だめだった」

言っている内容は過激な上にかなり自分勝手なのだが。しかしティリスは少々ためらった後、一度は離された手を今度は自分からそっと握り締めた。

「先生……？」

弾かれたように顔を上げたハーシエルをじっと見つめ、彼女はゆっくりと諭す。

「ハーシエルくん。あのね、ハーシエルくんの気持ちはとっても嬉しいわ。でも先生は、あなたがこんな風に危ないことをしたり、危ない目に遭ったりするのが一番嫌なの」

なだめるようにつぶやくと、ティリスは片手を伸ばしてハーシエルの銀の髪についたすすをそっと払った。

「け、結婚はすぐには無理だし、これからあなたを部屋に入れるのも正直ちょっと考える

ところはあるんだけど……でもね、あの……ハーシエルくんの気持ちはとてもよく分かったわ。だからもう無茶なことはしないで。ディガンさんを倒そうとするのもやめて」

「先生、だってそいつは『暗黒星』だよ。それに先生に勝手に触った。生かしておけない」

前半は当然、後半は私情が入りまくったハーシエルの言葉にティリスは苦笑いする。

「まあそれはそうなんだけどね……でも私はまず、ハーシエルくん、あなたを探しに来たの。それにディガンさんは、エリッセちゃんに憑いている不幸の星の呪いを祓ってくれるそうなのよ。だから先生、このまま二人を行かせてあげようと思うの」

どうやら生徒二人が気絶している間に事情を聞いたらしい。ディガンを見て微笑んだ彼女のひと言に、ディガンはかすかに眼を逸らした。

だがすぐにティリスはハーシエルに眼を戻し、さらに笑ってこう言った。

「私はもちろんグラシカル先生にも、エリッセちゃんの不運をどうすることもできなかった。この人はハーシエルくんに『暗黒星』を使ったりしたし、完全には信用できないかもしれないけど……エリッセちゃんが、体を張って庇ったような人だもの」

その言葉でエリッセは、そういえば自分はディガンを庇ったのだったと思い出した。

だが完全に発動していたはずのハーシエルの術を受けたのに、体中痛いどころか取り立てて怪我らしいものを負った様子もない。

月の位置から見てそれほどの時間が経った様子もないが、その合間に見ていたあの夢。

最初の昇星試験の際に暴発した〈煌〉を浴びた時は、何ヵ月も起き上がれないほどの重傷を負ったというのに。

一等星・シリウスのハーシエルが必殺の意志をもって放った術があれより弱かったことはないだろう。……自分の〈煌〉があの時からそれほど変化しているはずもなし。

余計なところで落ち込んでいるエリッセを元気づけるよう、ティリスは明るい声で教えてくれた。

「それにこの人、ものすごくエリッセちゃんのことを心配していたし。あんな必死な顔、こういう、その、偉そうな感じの人がそうそうするとも思えないわ。ちょっとだけ、信用してもいいんじゃないかと思うの」

「余計なことを抜かすな、童顔年増」

苦々しいディガンの声に驚いて見上げれば、彼はまたふいと眼を逸らしてしまう。どうやらティリスの言葉は本当のようで、エリッセはびっくりしてしまった。

「え？　ディガンさん、そんなに私のこと心配してくれたの……？」

仏頂面のディガンは何も答えない。しかし、問い直した言葉を否定する様子もない。

言われてみれば気を失う寸前、ディガンの叫び声と彼の〈煌〉が増大したことを覚えている。懐かしい夢から叩き起こしてくれたあの声も、間違いなく彼の声だった。

庇うつもりで、結局また庇ってもらってしまったのだろうか。そう思ったのも束の間、

ハーシエルがため息をついて認めた。

「……まあ、いいよ。僕はそいつに負けたんだ。止めることはできない」

つぶやいた彼はついでに修復術の詠唱をし、ぼろぼろになった衣装を元に戻した。すでに同じ呪文を使用済みのディガン、次いでエリッセを見つめ、また息を吐く。

「エリッセに危害を加えるつもりなら、とっくにできていたはずだしね。どうでもいいよ。少なくとも今の僕じゃ勝てる相手じゃないし、先生にはもう気持ちを言ってしまったし。どこに行く気か知らないけど、どこにでも行くがいいさ」

ふてくされたような口調で薄情な台詞を口にしたものの、しゃんと立ち上がったハーシエルはこう宣言した。

「でも、エリッセは先生と仲がいいんだ。ディガン、お前がエリッセに余計な真似をしたら先生が悲しむ。もしも先生を泣かせでもしたら、僕は必ずお前より強くなって復讐してやるからな」

たとえ今は敵わずとも、シリウスの称号を持つ彼の言葉には笑い飛ばせない真実味がある。

「ディガンさん。エリッセちゃんは私にとっても大事な生徒です」

その横に並んで口を開いたティリスには、はっきり言って力はない。迫力もない。三等星としてぎりぎりの能力しかない彼女は、ディガンの気まぐれひとつでその輝きを消さ



れてしまうような存在だ。

だが眼鏡の奥、きらきらと光る瞳には、誰にも消せない熱い教師魂が燃えている。

「もしもその子に何かひどいことをしたり、だましたり傷つけたりしたら……私も他の先生も、絶対に許しませんから」

「……ふん」

馬鹿にしたように鼻を鳴らしたディガンだが、根拠のないティリスの脅しをそれ以上からかう様子は見せなかった。

代わりにひょいと腕を伸ばし、エリッセを簡単に抱え上げてしまう。

「きゃー!?」

慌ててじたばたし始めたエリッセを荷物のように持ったまま、ディガンは踵を返した。その瞳はすでに夜空の向こう、目的地であるレドレリカ王宮方面へと向けられている。

「もう一度負け犬になりたくないのなら、もう追ってこないことだな。言っておくが、オレの力はまだ完全じゃない。『暗黒星』の真価を見てから死にたいなら話は別だが」

レドレリカ王宮に顔を向けたまま、ディガンは急に尋ねた。

「それと、小僧。さっき〈煌〉を捨てようとしていたと言ったな。それはなぜだ?」

一瞬驚いた顔をしたハーシエルだが、すでに過去のこと。話しても構わないと判断したらしく、すぐに答えた。

「……僕の両親は、僕に強い〈煌〉があるのを疎んじて星団に放り込んだ。母様がどこかの〈星〉と浮気した結果、僕は生まれたらしくてね。……馬鹿馬鹿しい話さ。〈煌〉は遺伝する能力じゃないって、とっくに証明されているのに」

「ハーシエルくん……」

ティリスも初めて聞くことだったらしい。はっとした顔をする彼女の顔も見ないまま、ディガンは鼻を鳴らす。

「ふん、そんなところだろうな。だが持って生まれたその力、使わねば損だ。一等星の能力をうまく使えば地位も栄誉も金も女も思いのまま。どうせ疎んじられるなら、王者の孤独を目指すほうがいいぞ」

乾いた口調でつぶやくディガンに、ハーシエルは珍しくためらいを含んだ声で尋ねた。

「王者の孤独を目指して……、ショナエル・アルケイシアの〈煌〉を奪おうとしたのか？」

内心非常に気になっていたことを、ハーシエルが聞いてくれた。思わず耳をそばだてるエリッセを忌々しそうに見て、ディガンがぽつりとつぶやく。

「あんな女の〈煌〉を喰らったぐらいで、王者になんぞなれるか」

そう言うなり、いきなり飛翔術の詠唱を始めたディガンが強い〈煌〉を発した。舌を噛みそうになって騒ぐエリッセを抱えたまま、彼は一路王宮に向けて飛び去った。

第四章　僕の大切な、大切な

見下ろせば、ティリスとハーシエルの姿はもう全く認識することができない高度である。夜明けに向かっていく空を運ばれていきながら、ディガンの腕の中でエリッセはどうしたものかと考えていた。

「あのっ……ディガンさん、ありがとうございます」

機嫌を窺うようにそう言ってみると、ディガンは無言で視線を返してきた。陰りを帯びた金の瞳は、暗闇にうずくまる獣の眼光を発している。

全身総毛立つような思いをこらえ、エリッセは震える声を絞り出した。

「さっき、たす、たす、助けてくれたんですよね……？」

「助けた？　オレが？　お前を？」

嫌味たらしく一々区切って聞き返されると、述べるべき礼が舌に絡みつく。呼吸困難になりかけながら、エリッセは感謝の言葉を必死に並べる。

「ハーシエルくんの術、から、私っ……、無事っ……」

当事者以外には全く伝わらない台詞を読み取り、ディガンはますます不機嫌な眼つきになった。

「元はといえば、お前がオレの前に勝手にしゃしゃり出てきたんだろう。まさか礼を言えとか抜かすのか？　大体オレが『暗黒星』を使うのを見ていたくせに、よく助けようと思ったな」

皮肉っぽい言葉に驚いて、エリッセは彼の腕の中でぴんと背筋を伸ばした。

「いえそんなつもりじゃ！　ただ、私が庇うつもりだったのに、助けてもらっちゃって悪いなーって……」

語尾が力を失い消えていく。エリッセはしおしおとうなだれた。

「ええと……あの、すいません、私……」

「お前は自分に『不幸の星』が憑いている自覚があるのか」

最後まで聞かず、ディガンは低い声でそう叱りつけた。

「無事だったからよかったものの、ハーシエルにあの術を使われた時点でお前は諦めなければならなかったんだ。それが分からなかった訳じゃないだろうな」

頭ごなしにそう言われ、エリッセはうなだれながらもごもご口の中でつぶやく。

「だ、だって私、結構たくさんディガンさんに庇ってもらった気がするし……受けた恩は返さないといけないって、グラシカル先生が言って……」

それにディガンは自分の『不幸の星』を祓ってくれようとしているのだ。偉そうだし乱暴だし口は悪いし無駄に自信過剰だが、眼の前で殺されそうになっていて放っておけるはずがない。

納得しきれないでいるエリッセの耳に舌打ちが聞こえた。途端に怯えて手足を縮こめると、眼の端を白いものが一片行き過ぎていく。

「最悪だな。ここにきて吹雪か」

その言葉に眼を開ければ、確かに行く手には雪を撒き散らす巨大な雲の群れが鎮座していた。冬も終わりに近いこの時期には珍しい猛吹雪が、この高度ならすでに見えていいはずのレドレリカ王宮一帯を白く覆っている。

体感温度を調整する術を、ディガンはずっと使い続けてくれていた。そのため迫りくる吹雪に気づけなかったのだ。

「す、すいません……たぶんまた私のせい……」

『不幸の星』を背負ったエリッセにとって、天候に恵まれないのはいつものことだ。今までの旅路で特にそういうことがなかったのが不思議なぐらいだが、ディガンはまた舌打ちをした。

「謝るならもう二度と、オレの前でグラシカルの名前を出すな」

天気が悪いのと、グラシカルの名前になんの繋がりがあるのだろう。

理不尽な命令に反射的に何か言おうとしたエリッセを抱え直し、ディガンが突然がくんと高度を下げる。
「きゃあー！」
また落下するのかと思ったが、ディガンに慌てる様子はない。今はまだ粉砂糖を振りかけたような段階の近くの森に、彼はまっすぐに突っ込んでいった。
「きゃきゃー！　きゃーのきゃーのきゃー！」
当然エリッセは大声を上げたが、ディガンは咎めもしないが速度を下げることもない。ぶつかりそうな勢いで森の地面に降り立つと、安堵のあまり膝が砕けてしまったエリッセをぽいと地面に投げ出した。
「きゃっ！　うう、いたた……」
荷物のような扱いを受け、ぶつけた膝をさすっていると、すぐ側で爆音が響く。
「ひぎゃっ!?」
その場でもう一回転しそうになりながら慌ててあたりを見回せば、怖い顔をしたディガンが近づいてきた。
「きゃー！」
またしても荷物のように抱え上げられ、どうするのかと思ったら彼は近くの崖の下に歩いて行く。そこには巨大な穴が開いていて、周囲からはまだ白煙が上がっていた。

「ここで吹雪がやむのを待つ」
ひと言言ったディガンは、穴の中に入るやいなや、またエリッセを放り出した。どうやらこの穴、さっきの爆発により彼が手っ取り早く作った避難所らしい。
「あ、ありがとうございます……」
ちょっとすり剝いてしまった膝をさすりながらそう言えば、壁際に座り込んだディガンが凶悪な顔になった。
「うるさい。もうオレに礼を言うな」
これ以上余計なことをしゃべると、そのうち口を開くことまで禁止されそうだ。
さっきハーシエルが言っていたかつてのシリウスのことを含め、いろいろ聞きたいことはあったが、今はタイミングが悪すぎる。エリッセは仕方なく治療術の詠唱だけして黙り込み、ディガンとできるだけ離れた壁に寄りかかって座り込んだ。

夜中に騒いだせいもあり、いつしか眠り込んでしまっていたようだ。風の音に眼を覚ましたエリッセは、目元をこすりながら穴の外を見た。
「うわ、すごい……」
穴の外は今や完全に真っ白で、近くの木々がかろうじて黒い影として見えるのみ。あと

は一面、雪、雪、雪。
〈導きの灯〉がある一帯は土地の起伏があまりないので、そもそも雪が降ること自体それほど多くないのだ。これほどの雪は珍しくて、なかなか視線を外せない。
「……くしゅっ」
見ているだけで寒い光景を眺めるうち、エリッセは派手なくしゃみをひとつした。
そろりとディガンの様子を窺うが、彼は眠る前の位置から動いていない。起きてはいないようだが、ぼんやりとしたその〈煌〉の流れが、小さな穴の中を滞留するようにたゆたっていた。
風や雪が内部に入り込んでこないのも、あまり寒くないのもディガンが引き続き術を使っているためのようだった。だが突貫工事で開けられた穴はやっぱりあまり寝心地は良くなくて、体中ぎしぎし言っているのが分かる。
昨夜の戦いや雪に汚れていた服に関しては、いつの間にかディガンが直してくれたようだ。体にもこれといった傷もないが、でもやっぱり節々や下になっていた部分が痛い。
「……お礼もだめ、文句はもちろんだめだろうしなあ……」
小声で独り言を言いながら立ち上がったエリッセは、強張った手足をほぐそうと軽い運動を始めた。右に左に腕を振り、片足立ちをして足先を振る。
「でも、この吹雪がやむまでの辛抱だもんね、たぶん……今のディガンさんの力なら、も

う今日には王宮に着いちゃうだろうし」

どれぐらい眠っていたかは不明だが、ティリスやハーシエルと別れた時点で夜明けが近づいてきているのは分かっていた。少なくともとっくに始原の黎は出ているだろう。

雪に曇った空を見上げても肉眼では月も太陽も見えないが、エリッセも一応〈星〉のはしくれ。自分の〈煌〉の返り具合によって、空の羅盤の状態を知ることは一応できる……はずだ。

もっとも、〈煌〉そのものが弱いエリッセには、これも場合によってはできないこともあるのだが……

「うーん、あら、始原の黎が中天？　合ってる……よね？」

この悪天候下だというのに、思ったよりも早く状況を摑むことができた。

「……なんか私、ちょっと強くなってない？」

どきどきしながら今度は、自分自身の〈煌〉をできる限り放出してみる。

眠りについてなお術を操るだけの力を持つディガンとは比べるべくもないが、確かに、今までよりも出せる量が増えている気がする。

「きゃーすごい！　王宮に着く前に効果出てるみたい！　すごい、やっぱりディガンさんってすごいんだ……！」

興奮しながらえいっと腰をひねったら、いつ起き出してきたのだろう。真後ろにディガ

ンが立っていた。
「……きゃー！」
振った腕でディガンの脇腹を強打しそうになり、エリッセは悲鳴を上げる。ディガン本人は軽くかわしてくれたのだが、慌てたエリッセがすっ転んでしまった。
「ごっごめんなさい……」
別段ディガンに被害はなさそうだったのだが、どたばたしてしまったのでエリッセはとりあえず謝罪する。
だがディガンは黙ったまま、手を貸さないのはもちろん面白がる様子もない。
ただじっと、薄暗い穴の中にもよく映える金の瞳でこちらを見下ろしているだけだ。
「……ごめんなさいも、もしかしてだめですか……？」
おそるおそる聞くと、彼はふいと眼を逸らしてまた穴の奥に戻ってしまう。
「〈煌〉はしまえ。無闇に垂れ流すな」
びくびくしているエリッセに、どさりと音を立てて座り直したディガンからそんな命令が飛んできた。この調子では、垂れ流せる〈煌〉が得られたことの礼も言わないほうがよさそうだ。
「……ごめんなさい」
殊勝につぶやき、エリッセもまた壁際に座り込む。ディガンは眼を閉じているが、眠

ってはいないようだった。
やむなくエリッセも眼を閉じた、その時だった。
暗闇にちかりと火花が散ったように、その存在を感じた。
「――あっ」
初めて知る衝動に突き動かされ、ほとんど無意識に立ち上がる。
エリッセとほぼ同時にディガンも立ち上がっていた。
「だから〈煌〉を垂れ流すなと言ったんだ」
いら立ちを込めてつぶやくと、ディガンは大股に歩き出した。思わずその背を見送ったエリッセの胸の中、心臓がどくんと大きく脈打った。
待ち望んでいた瞬間が来たはずなのだ。
それがこんなにはっきり分かったのは、明らかに自分の〈煌〉が増大しているからだ。
なのに、とても嫌な予感がする。
「ディガンさん、待っ」
避難場所を潜り抜け、吹雪の中に出向いていくディガンの後をエリッセは急いで追った。
だが穴を抜け出ようかという寸前、見えない障壁に思いきり鼻先をぶつけてしまう。
「いたあっ！」
悲鳴を上げるエリッセを尻目に、ディガンは十歩ほど穴から離れた位置に立っていた。

風と雪を防ぐ術にもうひとつ、彼はエリッセを防ぐ効果を付け加えてくれたらしい。
不可離の紋があるのにどうする気なのかと思っていたが、ディガンはそれ以上遠くに行くつもりはなさそうだった。エリッセに見せつけるように、後ろ姿でそこで待っている。
胸騒ぎが心臓を締めつける。
嫌な予感が育っていく。自分ひとりで抱え込んでいられないぐらいに大きく、大きく。いても立ってもいられなくなり、エリッセは大声でこう叫んだ。
「ディガンさん、やめて！」
血相を変えて叫んでも、障壁は声すら弾いてしまうのか。全く無反応のディガンの背に、エリッセは禁じられた名前を叫んだ。
「やめて！　グラシカル先生に何する気ですか!?」
まるでその声に応えるように、ディガンの向こうに白い人影が立った。
ディガンと同じ術を用いているのだろう。あまり吹雪の影響を受けていないその姿は、『暗黒星』とは正反対に全身白ずくめ。
黒いラインの入った白い外套の裾と長い黒髪の先だけが、激しい風に合わせて一定方向にたなびいている。
〈導きの灯〉星団教師、一等星・カノープスのグラシカル・アミテージア。七歳の時からエリッセの世話をしてくれている、兄のような、……父のような存在。

大好きな人の顔を見て、これほど表情が強張ってしまったのは初めてだった。

そしてグラシカルの顔が、こんなに険しいのも初めて見た。

「……先生……？」

怯えたような声を出したエリッセが見つめる中、二人の青年は互いの力を推し量るように睨み合っている。

「お前がグラシカルか」

「君が『暗黒星』、だね」

凶悪な面構えで睨みつけるディガンにも、グラシカルは動じる様子を見せない。落ち着いた声でそう言うと、ディガンの背後に閉じ込められた格好のエリッセにちらりと視線を送った。

「僕の生徒がお世話になったようだ。だがそろそろ、団外学習は終わりにしてもらう」

「僕の生徒、な」

皮肉げに、ディガンは彼の言葉を繰り返した。

「なんのつもりか知らんが、ずいぶんいい教育をしたようだな。なぜお前がエリッセを生贄にしたのか、ぜひとも聞かせてもらいたいと思っていた」

生贄というひと言はエリッセにも届いていた。全く予想外の言葉に驚く彼女の教師もまた、敏感に反応した。

「死ね」

降りしきる雪よりもなお冷たい口調で言ったグラシカルの全身から、天を焦がすような勢いで〈煌〉が噴き出す。それをまるで間近にいるように感じ取り、エリッセは悲鳴を上げた。

「きゃッ、なんなの……!?」

先ほどグラシカルの接近を感知した時もそうだったが、彼の〈煌〉の変化が分かりすぎて驚いてしまう。

しかもそれだけでなく、ディガンの〈煌〉が大きく輝いたことまで分かってしまった。

「きゃー何これ何これ!?」

今まで経験したことのない感覚にエリッセは恐慌状態に陥る。だがいつものようにきゃあきゃあ言っている間に、ディガンとグラシカルはすでに詠唱を終えていた。

「天空の覇者、太陽が一、始原の黎よ！　力よ雨となれ、あまねく降り注げ！」

「天空の覇者、太陽が一、始原の黎よ！　風よ友を呼べ、渦巻き逆巻け！」

グラシカルの指先が光の雨を呼び、ディガンの叫びが吹雪をかき乱す。両者の力がぶつかり合い、穴を開けられた崖全体が身震いするような振動が生まれた。

「きゃあああー！」

立っていられなくなり、また転んだエリッセは、見えない障壁に爪を立てて起き上がる。

舞い上がる土埃と雪煙の向こう、二つの巨大な〈星〉はまた別の詠唱を行い、さらに戦い続けようとしていた。

「ごほっ……、ちょっと、ディガンさんも先生もやめて！　ディガンさんお願い、私から先生に話すからいったん手を引いて…！」

ハーシエルに襲いかかられたことで警戒してしまったのだろうか。ほとんど会話を交わすこともなく、ディガンは最初から全力でグラシカルと対峙している。

敬愛する教師の名を連呼したのがそんなに気に食わないのかと、エリッセは青くなった。

「やめて、ねえ！　ディガンさんお願い！　もうグ……、言わないから！　言うこと聞くから、先生にひどいことしないで……!!」

名を呼ぶことを禁じられたことを思い出し、律儀にそれを守って叫んでも、ディガンに手を止める気配は見られない。

「グラシカル先生も待って下さい！　ディガンさんは私にかかった禁呪をなんとかしてくれるみたいなんです！　ちょっとだけ、ちょっとだけ話を聞いて下さい……！」

いつもとは明らかに様子が違う先生だが、ディガンよりは話が通じるはずだ。声が届いているかどうかすら不明だが、何もしない訳にもいかない。

グラシカルがディガンに仕掛けるのは分かる。なんと言ってもディガンは『暗黒星』。禁呪である忌むべき存在を、本来なら野放しにしておいていいはずがない。

確かにディガンは、『暗黒星』ということを差し引いても問題山積みだ。だが、エリッセの『不幸の星』を祓おうとしてくれているのだ。

「先生やめて！　ねっ、私ちょっと強くなったんです、ディガンさんのおかげで！　出来のいい……は無理かもしれないけど、ちょっとはましになって、先生の役に立てるようになるから！　だから私……！」

「それじゃ困るんだろう」

不意にディガンの声が聞こえた。

びっくりしてそちらを見ると、術で転移して来たらしい彼が、見えない壁の反対側にもたれるようにして立っている。

エリッセが穴の中でわめいている短い間に、相当グラシカルとやり合ったようだ。ディガンはかすかに息を乱しており、腕や頬に幾筋かの傷が浮いていた。

ハーシエルと戦っていた時とはまた様子が違う。あの時のディガンはまだ本調子ではなかったのか、最初こそティリスに手を出されて怒り狂ったハーシエルに苦戦していた。

だが最後には、一撃で撃退した。

けれど今ディガンは、最初からハーシエルを倒した時をしのぐほどの力を出して戦っている。不思議なことにエリッセにはそれが分かってしまう。

なのにグラシカルに勝てない。ハーシエルと彼は同じ一等星なのだが、やはり経験の差

だろうか。

冷静な、いや冷酷とさえ言える隙のないグラシカルの戦いぶりは、片思いを叶えようと襲いかかってきたハーシエルとはあまりにも印象が違う。

「ディガンさん、大丈夫……？」

思わず聞いてしまったエリッセのほうをディガンが見る。強いその眼差しにどきりとして、かすかに肩を揺らした少女に彼は言った。

「教えてやろう、小娘」

動きを止めたエリッセの肩にいきなりディガンの腕が伸びてくる。術者である彼は障壁を透過できるらしい。

見えない壁越しに抱き寄せられたエリッセの耳元に、ディガンは鋭くこうささやいた。

「お前に『不幸の星』を憑けたのは、グラシカルの可能性が高い。少なくとも、関係者であることは間違いない」

一瞬、意味が分からなかった。当惑するエリッセが聞き返そうとした時、眼もくらむようなまばゆい光が視界を焼いた。

「きゃああっ……！」

反射的に閉じたまぶたの裏でも、まだ先ほどの光が踊っている。

しかし、ちかちかする眼を押さえてその場にへたり込んだ状態でも、このまぶしい光を

放ったのがグラシカルだと分かる。エリッセに回していた腕を外し、素早くその側に転移したディガンが別の詠唱を始めたのも分かる。

そういうことは分かる。でも、さっきのディガンの言葉だけが分からない。

「憑けたって、なに……？」

ディガンに言われるまで、エリッセはもちろんグラシカルだって彼女に憑いた『不幸の星』の呪いを知らなかったはずだ。

でも、本当にそうだろうか。グラシカルほどの人が、あれだけエリッセの側にいてくれた人が、本当に少しもおかしいとは思わなかったのだろうか？

生贄。

「関係なんかない……何言ってるの」

声が震える。意志とは裏腹に高まり続ける嫌な予感を振り切ろうと、エリッセは叫んだ。

「グラシカル先生は『不幸の星』とは関係ない！　変なこと言わないで……!!」

悲鳴のような声を追うように、グラシカルの〈煌〉が高まっていく。

白く曇った視界の中、彼の横顔が見えたのでエリッセは大声で怒鳴った。

「先生、ねえ、そうですよね！　先生は私を守ってくれるって約束してくれたもの！　お願い、聞こえてるんでしょう、何か言って……！」

黒い瞳が一瞬こちらを向いた。やっぱり声は聞こえているのだ。

でも彼は、再び視線を元の方向に戻す。エリッセの問いに答えないまま、グラシカルは続けてひどく聞き覚えのある詠唱を始めた。

「天空の覇者、三つ子の太陽よ」

三つの太陽の光を返すことを宣言したその顔に迷いはない。肉眼では見えないが、彼の視線の向かう先にはディガンがいるはずだ。

「冷たい死の針を」

相手を殺す目的以外では使わない必殺の呪文。

口封じ。

「五体に」

「だあぁぁーめえええぇー！」

詠唱の最後の一句を打ち消すように、エリッセは大きく叫んだ。

肺から押し出された空気が開いた唇を飛び出し、そして、それ以外の何かも少女の身の内から飛び出し、あたりに広がっていった。

「エリッセ……!?」

驚くグラシカルの声にわずかに遅れ、ぱん、という妙に可愛い破裂音が戦場に響く。

次の瞬間、どっと押し寄せた雪と風に、エリッセはその場になぎ倒されてしまった。

「んぐっ……ふぁっ、んんんきゃああー！」

なんだかよく分からない悲鳴を上げながら尻餅をついたエリッセに、すさまじい吹雪が容赦なく吹きつける。どうやら穴をふさいでいた術が弾け飛んだらしいと頭は理解したが、体がそれについていかないのだ。

体感温度に関してはまだディガンの術が効いているようだが、圧倒的な風と雪にとても立っていられない。

油断すると口の中にも降り積もる雪を必死に払い除け、エリッセは雪まみれになりながら起き上がった。

「んんん、なに、なんなのー!?」

口の中の雪を吐き出して起こした上体に、ふっと影が差す。はっと見上げたエリッセは、そのままの体勢で固まってしまった。

障壁が失われた穴の入り口に、白い衣装に身を包んだ青年が立っている。

「先生……」

再会当初の険しさは、もうグラシカルの表情にはない。

だが穏やかな笑みもなく、彼はハーシエルもかくやとばかりの無表情でエリッセのすぐ

前に立っていた。
その体により幾分雪や風が防がれているというのに、なぜだろう。背筋を冷たい汗が這い、呼吸が苦しくなってきた。
氷の像に彫られた穴のようなグラシカルの眼。
徹夜で何かの論文を書いていた彼に差し入れした際、誤って十日間の努力の集大成の上にお茶をぶちまけた時だって、こんな眼では見られなかった。
けれどディガンの言う通りなら、怒らないのも無理はない。
エリッセに『不幸の星』を憑けたのが彼ならば、仕方がないと思えたのかもしれない。
「先生……先生」
がたがたと体が震えだす。心よりも正直だという肉体はすでに結論を出しているようなのに、必死で唇を動かし続けた。
「先生が言うことなら、私、信じる。だから言って、グラシカル先生……ディガンさんの言ったことは、全部嘘だって……」
懇願に、グラシカルはやはり何も答えない。ただエリッセの不可離の紋が刻まれた額、及びその全身を眺めてこう言っただけだった。
「あれだけそのままの君でいい、と言ったのに」
過去形で語られる言葉がたまらなく怖い。グラシカルもまた出しているらしい結論を聞

きたくないのに、耳をふさぐことすらできなかった。
「こんなに君の〈煌〉が大きくなってしまっているのなら、あいつを殺しても、もう止められそうにないね。……仕方がない」
グラシカルの〈煌〉が高まっていく。
分かってしまう。分かりたくないのに。彼がなんのために〈煌〉を高めているのかも、分かりたくないのに。
「なんで……？　先生、ねえ、なんで……？」
なんで自分に『不幸の星』など憑けたのか。
なんで優しくしてくれたのか。笑いかけてくれたのか。ずっと、側にいてくれたのか。
「守って……、くれるって、約束……」
うめくような言葉が唇から漏れた。無自覚な涙に両眼を濡らしたエリッセを見下ろし、グラシカルが吐き出した言葉は吹雪より冷たい。
「馬鹿な約束をしたと、後悔しているよ」
今いきなり頬を引っぱたかれたとしてもこんなに痛くはなかっただろう。衝撃に呼吸すら忘れたかのように、エリッセは見開いた瞳に大好きな人を映していた。
カノープスの称号に相応しく、グラシカルの全身はひときわ白く輝いている。
あまりのまぶしさに、そして悲しさに、エリッセは濡れた眼をそっと閉じた。

「馬鹿小娘、諦めるな……！」

閉じたまぶたの裏、グラシカルとは別の〈星〉が大きく光り始める。

再び眼を見開いたエリッセは、〈煌〉を用いて一気に加速したディガンが、グラシカルに体当たりするのを見た。

「くッ」

短くうめき、グラシカルが体勢を崩す。術を使っての戦いに慣れている〈星〉たちは、一般にこういった肉弾戦に弱い。

昨日の対ハーシエル戦といい、戦時下で過ごした経験を持つディガンは実戦的な戦法を得意としているようだった。傾いだグラシカルの腰目がけ、彼はすかさず回し蹴りを放つ。

「ぐうっ……！」

華麗な一蹴りに吹き飛ばされ、グラシカルは穴の外の雪溜まりの上に転がった。形勢逆転、その後を追っていったディガンが今度は彼の足元に降り立つ。

「天空の覇者、三つ子の太陽たちよ」

ベテルギウスの称号に相応しい〈煌〉が、長身をさらに大きく見せていた。その右腕に集まった〈煌〉が、雪明かりを弾いてまばゆく輝く一振りの剣へと変じていく。

「きらめく王の剣を我に、我が敵を」
「だめーっっ！」
思いきり叫んだエリッセは、無我夢中でディガンの背に飛びついた。
いきなり後ろに引っ張られたディガンは尻餅をつき、エリッセはその体重を受け留めることになる。
「なっ……、この馬鹿っ……！」
「た、た、重いっ…！」
罵り合う二人にできた隙をつき、グラシカルはぱっと立ち上がった。強い〈煌〉と冷徹な殺気を放出しながら、今度は彼が二人を見下ろす。
ディガンとの激しい術の応酬により、白いその衣装はあちこち裂けて汚れていた。
しかし傷つき疲弊してなお、エリッセを狙う意志は尽きていないようだった。
「先生」
ディガンの肩越しにグラシカルを見上げ、エリッセは震える声で言った。
「先生……先生はそんなに私のこと、嫌いなの……？」
偽者ではないか、誰かに操られているのではないか。
都合のいい答えを探しながらグラシカルを見つめるが、そのたびに奇妙に鋭くなった感覚が答えをくれてしまう。

この人は本物のグラシカル・アミテージア。本物の殺意で私の命を消そうとしている。

「今冷たくするなら、なんで優しくしたの……？　なんで今殺すの……？」

腰の古傷が痛みだす。雪風にさらわれては消える涙を流しながら、エリッセは叫んだ。

「あの時、放っておいたら私死んでたのに！　なんで、なんでよ……!!」

激しくかぶりを振った彼女を見つめるグラシカルの眼に一瞬ためらいが浮かんだ。しかしそのためらいを、驚愕が塗りつぶしていく。

「エリッセ……!?」

叫んだグラシカルが大きく後ろに飛びすさる。その眼が遙かな上空に向いていることを知り、エリッセも思わずそちらを見た。

雪に真っ白な空の彼方から響く地鳴り。ぱらぱらと降り始めた土と小石の雨。

その上からさらに、空の一部がはがれ落ちでもしたかのような巨大な岩の塊。

今も降りやまない大雪のせい。そして土台に穴を開けられた挙げ句、『暗黒星』と一等星が間近で大きな〈煌〉を振るい続けたせいだろう。

エリッセの背負った『不幸の星』の作用もあったのかもしれない。いずれにせよ、三人のすぐ背後の崖が崩れ始めていた。

「んんんきゃあああああああ!!」

これ以上ないエリッセの悲鳴すらものともしない大音響が、あたりいっぱいに鳴り響

く。

だが覚えていられたのはそこまでで、一瞬かあっと全身が熱くなったのを最後に、彼女の意識は昨日に引き続き闇の中に沈んでいった。

「……きゃーきゃーきゃー！　きゃーのきゃーのきゃーっっっ……!!」

ばたばたと手足を振り回しながら起き上がったエリッセは、派手なくしゃみをした。

「はくしゅっ！　う、うう、さ、寒っ……！」

がたがたと震えながらあたりを見回すと、いつの間にか雪嵐はやんでいた。

しかし一面泥まみれの雪だらけで、ところどころにエリッセよりも遥かに大きな岩が頭を出している。

崖は、見事に総崩れになってしまったようだった。名残のこんもりとした土台は残ってはいるが、周りにも似たような小山が複数できているので見分けがつかない。

体は、当然ながらあちこち痛い。ぐしゃぐしゃになった外套とワンピースにはいくつもの裂け目ができている。

だが動けないほどではなく、芯まで冷えていることを除けば無事と言っていいだろう。

「一体……、どうなって……」

わざわざ〈煌〉を使って探るまでもなく、空は夕闇に包まれている。第三の太陽・終焉の夕は彼方に沈もうとしており、もうすぐ第一の月・起源の陰が中天にかかる時刻だ。

グラシカルがやって来てからかなりの時間が経っているのは明らかだった。そして彼の姿はどこにもない。

崖崩れに巻き込まれたということはないだろう。エリッセ殺害の寸前、自身も危機に見舞われたグラシカルはいったん逃亡したのだ。

改めてそれを思うと、すでに冷えきっていた体がもっと冷えていく。

なんで、なんで。繰り返した問いに、彼は何ひとつ答えてくれようとしなかった。

「おい、無事か」

かけられた声に振り向けば、ひときわ大きな岩の上にディガンが立っている。

何かの術で身を守ったか、それとも修復術をすでに使ったのか、彼は全くもっていつも通り。雪まみれで寒さに震えるエリッセとは大違いの、腹立たしいぐらいのいい男ぶりだ。

体感温度を緩和する術すら解けてしまっているようで、寒くて仕方がない。けれど今は、ディガンに文句を言う気力さえ湧かない。

「……おい、大丈夫か」

いつもなら声をかけられた時点できゃあきゃあ言うはずの少女の無反応を見て、ディガンが眉を寄せる。彼は軽々と岩から飛び下りて、エリッセの側まで近づいてきた。

「おい……、うわっ！」

エリッセより先にディガンが大きな声を上げる。

手が届く範囲まで近づいた途端、エリッセが力いっぱいしがみついてきたのだ。

「なんだ、おい……！」

「今！　ディガンさん、今来て！　今口説いて!!」

ぎゅうぎゅうとディガンの脇腹を引き絞りながら、エリッセは叫び続けた。

「今優しくして！　可愛いとかそういうこと言って!!　嘘でいいから!!」

「おい……」

少女の力とはいえど、いきなり力いっぱい締め上げられればそれなりの圧力にはなる。

ディガンは最初こそ苦しそうな顔をしたが、今は無言で彼女を見下ろしているだけだった。

「言ってよ……！　今なら私、笑ったりしないから……!!」

窒息死させようか、という勢いでディガンを締めつけていた腕から力が抜けていく。

小刻みに体を震わせるエリッセの眼からあふれ出した涙が、頬を伝い彼の上着に次々と吸い込まれていった。

「ふっ、不幸だって、不運だって、思ってて、言われ続けて……！　でも私、えっ、先生、先生いるから……うぇっ、幸せだって……思っ……うえええええん!!」

泣き声も特徴的なエリッセは、歯止めが利かなくなったようにディガンに抱きついて

泣きわめく。

「先生が……、えっ、先生が私になんで、うえっ、しかも、ころ、殺そうと、して……っ、なんでか教えてもくれなくて……、うぅっ、もう、私、うえぇん、私、私……!!」

幼い子供のように泣きじゃくる彼女を見下ろすディガンの表情が、徐々に険しくなっていく。

やにわに彼は小さな肩に両手をかけ、まだ泣いているエリッセを自分から引き剝がした。

「やかましい、びいびい泣くな!!」

「……う、うっ」

ひくっと喉を鳴らし、黙ったのも束の間。すみれ色の瞳にはすぐに涙が盛り上がり、唇からはかすれた呼び声が出てきてしまう。

「うえぇえん、先生、グラシカル先生ぇ……」

「……馬鹿小娘が」

いら立ちも露に吐き出すと、ディガンは引き剝がした体をさらに突き飛ばす。ぺたんとその場に尻餅をついたエリッセは、そのままやっぱり泣き続けた。

「うえぇん、先生、せんせ……」

『不幸の星』を憑けられて殺されかけた。そうと分かっていても、長年育ててしまった思慕がそう簡単に消える訳ではない。

胸が潰れそうな悲しさが後から後から湧き出してきて、吐き出さずにはいられないのだ。だが哀れなその姿を見て、ディガンの機嫌はますます下降してしまったようだった。

「一々泣きわめくな。第一お前を殺そうとしていたのは、グラシカルだけじゃない」

突然のひと言に、エリッセはびくんと肩を揺らす。

見上げたディガンの金の瞳は、次第に濃くなり始めた闇の中、ひときわ鋭い光を放っていた。

「もう自分でも薄々気づいているだろう。『不幸の星』の影響で分かりにくいが、お前には隠れた力がある。『一番星』に相応しい、強力な素養がな」

大きな手が、ぐしゃぐしゃになったエリッセの金の髪に触れる。指先が前髪をかき分け、その下にある赤い紋を探り当てた。

「最初に言った通り、オレはお前の『不幸の星』を祓ってやるつもりだった。なぜなら『不幸の星』を祓った後、『暗黒星』を使って目覚めたお前の力を喰らうつもりだったからだ。何度も庇ってやったのもそのためだ。――オレはこの世の誰よりも、一番強い〈星〉でいなければならないからな」

呆然とされるがままのエリッセの額に指を当てた状態で、ディガンはゆっくりと全身から己の〈煌〉を放っていく。

「だが今、お前の力はある程度までは目覚めている。まだ食べ頃とは言えないが、オレの

我慢もそろそろ限界だ」

そのある程度まで目覚めた力のためだろう。ディガンの背後、赤と黒が混じり合ったような不気味な色を帯びた〈煌〉が、炎のように燃え上がるのをエリッセは感じ取っていた。

封印は完全に解けた。強大な力を持つ『暗黒星』は、重々しい口調でこう言った。

「育ての親の教師にも捨てられるような、馬鹿小娘のお守りはもううんざりなんでな。せめてもの恩返しだ、ここでオレに喰われてもらうぞ」

言われた言葉を反芻するように、エリッセはぱちぱちと数度まばたきをした。

そして、何も言わずに眼を閉じた。

まぶたの裏の闇の中、ディガンの詠唱が響く。

「夜空の支配者、月が一、起源の陰よ。彼方と此方に結びし縁を千切れ」

違和感が額から抜けていく。ぎょっとして眼を見開いたエリッセを見て、ディガンは舌打ちした。

「下らん。なんの抵抗もなしか」

蔑むようにそう言うなり、ディガンは続けて詠唱した。途端にエリッセの服装がぼろぼろのワンピースから、新品同様の〈導きの灯〉の制服へと切り替わる。

「差し出された獲物に興味はない。どこにでも行け、もうオレは知らん」

後ろ姿になったディガンは飛翔術を唱えると、あっという間にどこかに飛び去ってい

った。

今までなら、おそらくはエリッセも彼の飛翔に合わせて自動的に夜空へ浮かび上がっていたことだろう。

しかしおそるおそる額に指先をやると、そこにずっとあった紋はすでに消え失せている。

不可離の紋を解除して、ディガンは遠くに飛び去った。

それを確認したエリッセは、彼がお情けのように、あるいは別れの印のように元に戻してくれた、制服のスカート部分をぎゅっと握り締めた。

「……喰らう価値もないんだ、私……」

自分でつぶやいた言葉が、さらに状況のみじめさを思い知らせる。うつむき、唇を噛んで嗚咽をこらえようとしたが、だめだった。

「……うえっ……、うわーん！　馬鹿！　馬鹿馬鹿!!　ディガンさんの馬鹿！　グラシカル先生の馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿ぁー!!」

下手にこらえようとしたのがいけなかったのかもしれない。最早聞く者もいない崖崩れ現場に、エリッセのやけになったような泣き声だけが響き渡る。

「馬鹿馬鹿！　なんで私に『不幸の星』なんか憑けるの！　私が転んだり試験に失敗する

の見て面白かったの!?　馬鹿！　悪趣味!!」

腹立ち紛れにあたりの雪をすくっては近くの岩に投げつけながら、すべての鬱憤を吐き出すようにわめいた。

「なんで殺そうとしたの、ねえなんで!?『不幸の星』が憑いてるんだもん、ほっといたら私たぶん勝手に死んだのに！『暗黒星』なんか出てきちゃうし、食べられて死ぬとこだったんだよ私！　食べられもしなかったけど！」

ひと通り怒りを叫んでしまえば、また悲しみがこみ上げてくる。

捨てきれない想いが涙となってにじみ出て、ぽたぽたと雪の上に染みた。

「……ふえええん、馬鹿、先生の馬鹿ぁ……、馬鹿、大好き、グラシカル先生の馬鹿……」

両手で目元をぬぐってもぬぐっても、涙は次から次へと湧いてくる。悲しみに加え夜の寒さ、空腹までも湧いてきて、エリッセは片手で体を抱き締め片手でおなかをさすった。

「うぇっ……、先生、寒い、おなか空いた……、先生、せんせ、せんせぇ……」

悲しみだけに浸りきれないことが一層悲しみを煽る。

ハーシエルのような下心があった訳ではないが、あれは星団に来たばかりの頃。慣れない環境に不安を訴える自分と一緒にグラシカルが寝てくれたことを思い出すと、今の寒さが肌に突き刺さってくるように感じられた。

「先生、会いたいよう、好き、やっぱり好き、大好き、先生、グラシカルせんせえ……」

理由も分からず『不幸の星』を憑けられても、理由も明かされず命を狙われても。
彼の優しさを、温もりを、すぐになかったことにするには、エリッセの中でグラシカルが占める割合が大きすぎる。
「お、教えてくれたら私、『不幸の星』、憑いててもいいよう……殺されたって……先生が、先生がずっと一緒にいてくれたら、私……」
感情の赴くままにそう語った時だった。
起源の陰の光を遮り、エリッセの上に長い影が伸びる。
「本当に馬鹿だな、お前は」
すでに耳に慣れた悪態に顔を上げれば、苦々しい顔つきをしたディガンがすぐ側に立っていた。

「だまされて利用されて、それでもこれだけぎゃあぎゃあわめくほどにあいつが好きか。全く、本当にいい教育をしたものだな」
あ然として彼を見上げたエリッセは、涙でぐちゃぐちゃになった顔でこう言った。
「……ディガンさん、なんで……？」
「なんでお前の泣き声は、こうも耳に障るんだ」

忌々しそうにつぶやくと、ディガンはエリッセの腕を摑んで立ち上がらせた。汚れたその顔を覗き込み、半眼で質問する。

「ひょっとしてお前、オレ様に聞かせるためにわざと泣いていたのか？」

「い、いえ、そんなっ……」

一時は食べられてもいいと思ったが、間近で詰め寄られるとやっぱり怖いものは怖い。ディガンの早すぎる再登場に驚き、怯えた拍子に目元で保留されていた涙までぽろりと零れ落ちてしまった。

もっと険しい顔になったディガンの指先が伸びてくる。きゃあと叫びそうになったエリッセだが、ディガンは指でそっと彼女の目尻をぬぐってつぶやいた。

「お前の涙は、暗闇に光って見える」

濡れた指先を握り締め、ディガンは金の瞳をすがめた。

「……くそっ」

エリッセにか自分にか、強いいら立ちを示したディガンは、じろっとエリッセを睨んだ。

「おい馬鹿小娘。いいかげんに眼を覚ませ」

「え……」

「お前は『不幸の星』を憑けられた挙げ句に殺されかけたんだ。はっきり言ってこれで眼が覚めないなら、お前は馬鹿より下だぞ」

いきなり戻って来たと思ったら、そんなことを言われてエリッセはかっと頭に血が昇った。

「な、なっ……、ディ、ディガンさんには関係ないもん！」

「――……関係ない、だと？」

「そ、そうよ、関係ないもんディガンさんの馬鹿馬鹿！　能なし『暗黒星』！」

「……能なし、『暗黒星』……？」

よりにもよってなひと言にディガンの顔が引きつった。だが一度勢いのついたエリッセは止まらない。

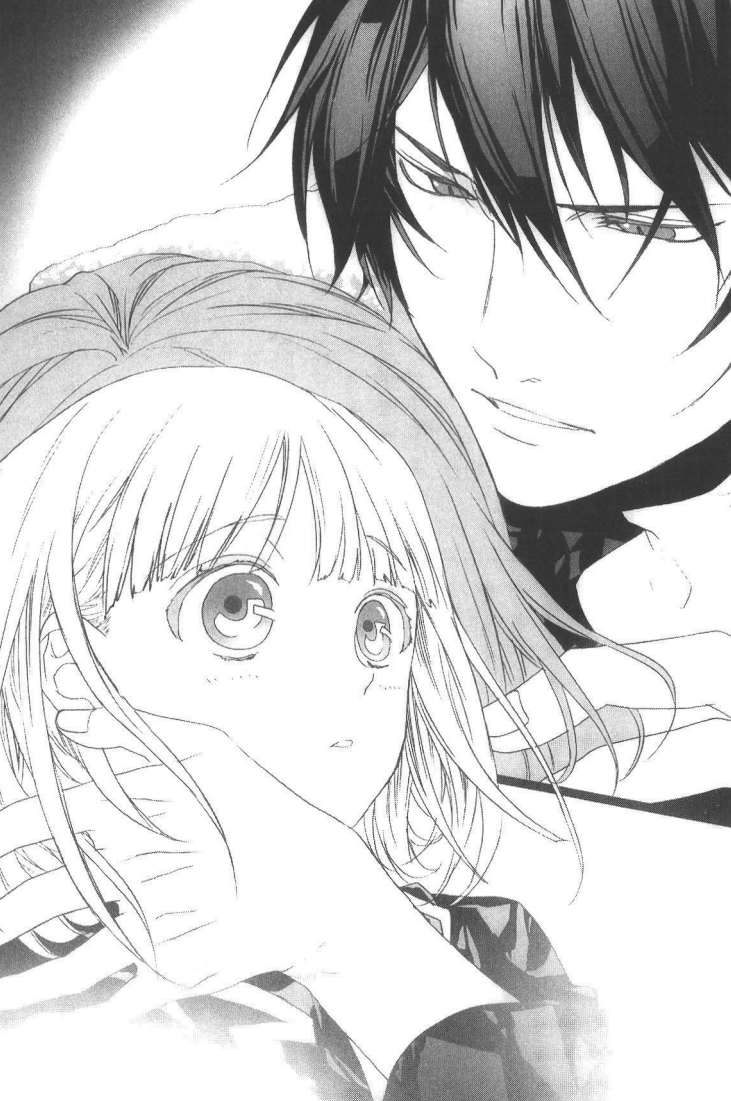
「元はと言えばディガンさんが私を勝手に連れ出したんだもん！　なのに『不幸の星』もどうにかしてくれないし、私のことだって食べてくれないし！　馬鹿！　ばーか！　馬鹿馬鹿馬鹿能なしー!!」

「……小娘、言うに事欠いてこのディガン様に向かって能なしだと……!?」

低い低いディガンの言葉にも、エリッセは怯まない。まだ涙を残した瞳で、きっと彼を睨みつけたままだ。

思わぬ強い眼差しに、かすかにディガンがたじろぎを見せる。だがたじろいだ自分にもいら立ったらしく、彼は金の瞳をらんと光らせた。

「わざわざこのオレ様が戻って来てやったというのに、それほどまでに喰われたがってい



たとはな……！　上等だ小娘、後で悔やんでもやめてやらんぞ！　死ぬほど痛くしてやるから覚悟しろ！」

脅し文句を吐くが早いか、ディガンの〈煌〉が増大していく。それに伴いあたりの雪と泥が巻き上げられ、小規模ながらも先の雪嵐が再来したようだ。

だが事ここに至っても、エリッセはかたくなに動かない。

「……おい、いいのか。本当に喰うぞ」

逆にディガンのほうが聞き返してくるぐらいだが、エリッセはやはり動かない。

「おい。死ぬんだぞ、お前。怖くないのか」

「……怖くないもん……」

ディガンの言うような力があるからではない。大体そんなものほとんど実感がないし、あったとしてもそれを使ってディガンをやっつけようなどと思っている訳でもない。

一度は喰われることを覚悟した身だ。その上グラシカルに命を狙われたことにより、エリッセにとって一番大事なものは失われてしまった。

最早恐れるものは何もない。

一番怖いことは、すでに起こってしまったのだから。

「ディガンさんなんか怖くないもん、グラシカル先生に嫌われるほうが怖いんだもん！」

ぽろぽろと涙を零しながら、エリッセは大声で叫んだ。

「ディガンさんみたいな人には分からないもん、強くて自信があってもてるのが当たり前の人には分からないんだもん！　ひとりぼっちの私の気持ちなんか分からないんだもん！」

恵まれた容姿と才能を持ち、自分自身もそのことを知っている。禁呪『暗黒星』の創作者であり、それゆえに封じられたという伝説的存在。

そんなディガンには分からない。

『一番星』のくせに六等星と馬鹿にされ、努力しても努力してもかろうじて星団内に留まっていられるだけ。両親はすでになく、唯一の心の拠り所だったグラシカルに裏切られ、殺されかけた馬鹿な小娘の気持ちなど。

もうディガンを睨みもせず、ひとり泣きじゃくるエリッセを彼は黙って見つめていた。

「オレには、ひとりぼっちの気持ちが、分からない、だと？」

ややあってそう小さく漏らしたディガンは、いきなりぐいっとエリッセの腕を引っ張る。とうとう喰われるのかと覚悟し、泣きながら眼を閉じたエリッセだったが、ディガンの口から出た詠唱はこうだった。

「夜空の支配者、三つ子の月たちよ！　我に天駆ける翼を与えよ！」

腰に強い腕が回り、爪先が宙に浮く。あっと思った時にはすでに、ディガンに抱かれたエリッセの体は遙かな高みにあった。

「きゃあっ……くしょん！」

驚きに上げた悲鳴の後半が派手なくしゃみに消えてしまう。
冬空に持ち上げられた途端、いったん意識の外に追いやられていた寒さが無視できないほどに増したのだ。
「ちっ、つくづく面倒な小娘だ」
悪態をついたディガンの唇から続いて飛び出した詠唱により、寒さはあっという間に緩和される。空腹はさすがにそのままだが、体の痛みもきれいに消えた。
「な、な、な」
「なに？」も「なんで？」も最後まで言えないエリッセを片腕に抱き抱え、準備を終えたディガンは思いきり飛行速度を上げた。
「きゃーあーあーあー！　何ー!?　食べ、食べないのー!?」
上げた悲鳴が風に流されて長く尾を引く。惜しみなく〈煌〉を使いながら、エリッセを抱えたディガンは一直線に夜空を飛んでいった。
「その前にまず、お前の『不幸の星』を祓わないとな！」
風に消されそうな言葉を拾い上げ、進む方角へとエリッセはおずおずと瞳を向ける。
レドレリカの中央部、黄土色の街道の終着点であるレドレリカ王宮は気づけば、その偉容のすべてを一望できる距離にあった。

第五章　輝かぬ星の王

小国といえど豊かな土地を持つレドレリカは、財政的にも潤っている。白い石を積んで作られた美しい巨大な王城は、常に王宮付きの〈星〉たちの〈煌〉に包み込まれ、様々な色合いの光の中に浮かび上がる姿を詩人は真珠城と称した。

その真珠城の外殻、幾重にも重ねられた守護の術を破った不遜な賊の存在に、静かなはずの城内は今夜荒れに荒れている。

「きゃああー！　ディガンさん、ディガンさんやだ危ないだめ怖い嫌きゃーきゃー！」

間断なく悲鳴を上げ続けるエリッセを引きずり、ディガンは夜のレドレリカ王城内に強制侵入を果たした。

王位継承権争いが決着を見て数年経つとはいえ、仮にも一国の城である。その警備の厚さは半端ではなく、〈綺羅星〉たちも大勢控えていた。

しかし、やはりこうも真正面から侵入されるとは予想外だったのだろう。おまけにたった二人で。

実質戦闘要員はディガンだけで、エリッセはただの悲鳴を上げるお荷物に過ぎない。だがその不利をものともせず、彼はどんどん王宮の奥に侵入していく。

「どこの国の〈星〉だ、感じたことのない〈煌〉だぞ!!」

「等星石もつけていない、〈流れ星〉か!?」

「そう見せかけているだけかもしれんぞ！」

「まさかアリエーズ様派の者では……！」

矢継ぎ早に周囲で交わされる会話を尻目に、ディガンは誰の声にも己の〈煌〉で答えていった。新たな兵士の出現を感じ取るや否や、術を放って全員吹っ飛ばす。

不可離の紋こそないものの、ディガンの右手はがっちりとエリッセの左手を摑んだままだ。第一事態がこうなってしまっている以上、下手に彼と離れでもしたら、それこそ反逆罪で捕まってしまうだろう。

……そういうことになってしまった場合、真っ先に庇ってくれそうだった人はたぶんもう、エリッセの味方ではないのだ。

驚きにいったん意識の外に追いやられていた悲しみが、胸の中で再びふくらんでいく。ぶるっと大きく頭を振って、エリッセは気絶した兵士の脇を通り抜けながら聞いた。

「ディガンさん、ねえ、なんで王宮に、き、来たの……？　私王宮になんか関係ないし、……グラシカル先生が、王宮にいたことがあるから……？」

口に出すと今は胸に痛く響く名前をつぶやいても、ディガンは答えてくれない。
「もう、先生もディガンさんも、なんでなんにも教えてくれないの……！」
こみ上げてきた涙をごまかすよう、片手で目元を押さえながらつぶやいたエリッセに、ふと立ち止まったディガンは聞いた。
「分からないか？」
言われてエリッセは、はっとしてあたりを見回した。
後から後からわらわら湧いてきた兵士たちも〈星〉たちも、今は姿が見えない。だが精緻な文様が彫り込まれた白い壁も、ブーツの先が埋まってしまうような毛足の長い真紅の絨毯も、ひと目で分かるほど高価で質の良い造りだと分かる。
最初に侵入した付近よりも一段二段金のかかった内装。兵士たちの姿が見えないのも、ここまで入り込まれることを想定していないゆえのことだろう。
「こ、ここ……王宮の中でも、すごく、偉い人が……」
怯えるエリッセを置き去りに、ディガンがさっさと巨大な扉を開け放った瞬間だった。
「お前たちは、弟が放った暗殺者か？」
聞き覚えのない声は、開いた扉の向こうから聞こえた。

扉の中に広がっていたのは、やはり天井の高い巨大な一室。真紅の絨毯がまっすぐに、部屋の奥にある豪奢な玉座へと伸びている。

玉座の背後は一面がすべて窓になっており、第二の月・至純の闇が夜空を昇っていくのがよく見えた。月明かりに照らされたレドレリカ王城の城下町はまだ薄い雪に覆われており、さながら硝子細工のような硬質な美しさが、一層この場の雰囲気を引き立てる。

見たことはない。でも話には聞いたことがあるし、なんとなくこういうところだという想像はあった。

レドレリカ王城の最奥。熾烈な争いの末、数年前にようやく座るべき主が定まった玉座が置かれた場所。

国王のいます謁見の間。

では今その玉座に腰掛け、どこか気だるそうにこちらを見ている痩せた女性。生まれつき体が弱く、色素をほとんど持たないために白い髪とごく薄い青い眼をした彼女こそが。

「ルトエ……ここっ国王陛下……!?」

六等星の身ではおよそ拝謁することなど叶わぬはずの、レドレリカの若き国王の姿にエリッセは仰天する。

「きゃーきゃーきゃきゃー!? ディガンさんなんなのこれどういうこときゃー!」

思わぬ展開に悲しみも吹っ飛び、騒ぎまくるエリッセだがディガンは黙ったままだ。そ

してルトエ・メーセル・ラ・レドレリカもまた、侵入者に騒ぎ立てることもない。

細い白髪をうっとうしそうにかき上げて、彼女はある種ハーシエルにも近い人形のように整った顔をかすかにしかめた。羽毛をたっぷりと詰め込んだふくふくとした夜着に埋もれてしまっている、痩せすぎたその体は見る者に痛々しさすら感じさせる。

「なんだその騒がしい娘は……暗殺者ではないのなら帰ってくれないか。そろそろ春が来そうで、私の体調はあまり思わしくないのだ。この時期に雪嵐まで来るしな」

生まれてすぐは五歳まで、五歳になった時は十歳まで生きられないと言われていたルトエは、すでに二十歳をいくつか過ぎた今でも相変わらず体が弱い。季節の変わり目ごとに体調不良で寝込んでしまうことは、王位を巡る争いの際もさかんにやり玉に挙げられていた。

しかし暗殺者ではないにせよ、警備網を突破して王の元に辿り着いた侵入者にこの態度はどうだ。臣民として、思わずエリッセは突っ込んだ。

「あ、暗殺者じゃないですけどっ、王様、侵入者にはもっと騒いだほうが、えっでもだめよ騒いでもらっちゃ……！」

自分で突っ込んで自分で墓穴を掘っているエリッセを、あまり関心がなさそうにルトエは見ている。だが突然、はっとした表情になって玉座から立ち上がった。

「……なんだ、この感覚は……？」

同じ異変はエリッセにも訪れていた。きゃあきゃあ騒ぐことを忘れ、呆然と若き国王の青白い顔を見つめる。

「え、な、何、これ……？」

頭の隅がむずむずするような、変な気持ち。訳が分からず、だけど不思議に心が騒ぐ。我知らず、エリッセは一歩歩み出していた。

ルトエも同じく玉座を離れ、ちょっとふらふらした足取りながらまっすぐエリッセに向かって歩み出す。

抗い難い吸引力が二人を突き動かしていた。無論今まで面識など何もなく、正しく吸引力としか言いようがないもの。

この人と、この娘と、自分は繋がっている。誰に教えられずとも、互いにそれを知っている。

無言のディガンが見守る中、初対面のはずの六等星の少女と国王は、今にも手と手を取り合いそうな距離にまで近づいた。

その時だった。

「ルトエ王女、いけません！」

開きっぱなしの扉から室内に走り込んで来た白い人影が、必死の声で叫んだ。胸苦しいほどに聞き覚えのある声に、エリッセははっとしてそちらを向く。

「グラ……」
「グラシカル……!?」
エリッセより先に彼の名を口走ったのはルトエだった。驚愕に満ちたその青白い顔には、初めて生きた人間らしい生気が差して見えた。

「ふん、ようやくおでましか」
ひとり何事か察した風なディガン以外の三人は、全員が全員動きを止めてしまっていた。
エリッセとルトエは触れ合うまでにあと数歩の距離で停止。突然現れたグラシカルは、硬く強張った表情でそんな二人を見つめ佇んでいる。
「え、え、え、王様、先生、知り合い……？」
おろおろと二人を交互に見やったエリッセをそのままに、ルトエはつかつかとグラシカルに歩み寄った。
「貴様……よくも私の前におめおめと顔を出せたな！」
弟が差し向けた暗殺者かもしれない侵入者への無関心ぶりはどこへやら、頬を紅潮させた国王はグラシカルの胸倉を摑む。
グラシカルはされるがまま、黙ってひどく切なそうな眼でルトエを見返した。

「……そうか。もう、王になられたのでしたね。失礼を」
「とぼけるな。……私が、私がどれだけお前を恨んでいるか、お前に分かるか……!?」
知り合いどころでは済まなそうな関係を匂わせるルトエの言葉に、横からディガンが口を挟んだ。
「それぐらいにしておくんだな、レドレリカ王。少なくともその男は、お前のことは結構大事に思っているらしい」
ぴくりとルトエの肩が揺れる。グラシカルもまさか、という顔になったが、ディガンは素知らぬ風に続けた。
「お前に憑いていた『不幸の星』を、馬鹿な小娘に肩代わりさせるぐらいだ。見上げた忠義ぶり、外道ぶりを褒めてやれよ」
沈黙が落ちる。水を打ったような静寂を、エリッセの悲鳴が叩き割った。
「えっ、えっ、えええええええええ!?」
思わず自分の頭上、見えない『不幸の星』を見上げてからエリッセは国王に視線を移す。ルトエもルトエで呆気に取られた表情になり、まじまじとエリッセを見つめていた。
では、先ほどから感じているこの、むずむずするような気持ちはそのためなのか。
エリッセに憑いている『不幸の星』は、元々ルトエに憑けられていたというのか？
「……まさか……グラシカル、本当なのか、それは……」

沈痛な表情をしたグラシカルは答えない。彼の胸倉を摑んでいた手を外し、ルトエは呆然と独りごちる。

「確かに……そうだ、お前がいなくなってから、二階から転げ落ちることも、大嵐で部屋の天井が崩れることも、野犬の群れに襲われることも、心臓の薬と菓子を間違えて処方されることもなくなった」

「……私よりひどいです、それ」

ひとつ当たっても死にそうな不運を列挙され、思わずエリッセは言ってしまった。王の不運と比べればその辺で転ぶぐらいなんともないような気さえしてくるが、ルトエは再びグラシカルに詰め寄っていく。

「だが……だが、イライアスは、お前が……」

「その通りです」

冷たく乾いた男の声が、木枯らしのように室内を吹き抜けた。

ディガンに吹き飛ばされた〈綺羅星〉たちを引き連れ、謁見の間に入ってきたのは、レドレリカの宰相にしてルトエの夫。濃い灰色の髪を長く伸ばした、イライアス・ルードラだった。

「今度は宰相閣下!?」

一等星・ベガの称号を持つイライアスまで登場し、エリッセは最早何がなんだか分からない。焦ってディガンを見上げるが、ディガンは黙っていろ、と言わんばかりの一瞥をくれただけだった。

「よくもおめおめとここに戻れたものだな、グラシカル」

エリッセたちを無視して、イライアスはまずはグラシカルに冷ややかな視線を浴びせた。

「おまけに、それが例の小娘と『暗黒星』か」

冷たい瞳が自分に向けられたことを感じ、ひゃっと肩を竦めるエリッセを、グラシカルまでもが見つめる。

「分かっています」

短く答える冷たい声、冷たい瞳。激しい吹雪の中で初めて知った見知らぬ表情が、またグラシカルの顔を覆い始めている。

「エリッセもディガンも僕がここで殺します。そして、僕自身はもう二度と王宮に足を踏み入れません」

はっきりとした宣言に、エリッセの心臓まで凍りつくようだ。

このまま走って逃げ出したくなったが、グラシカルに狙われ、なぜかディガンにまで無言で睨みつけられては、動くに動けない。

「当然だ。侵入者はすべて、貴様が責任を持って始末しろ。詳細は後日報告しろ」
エリッセだけでなくディガンの始末をも言いつけて、イライアスはルトエに声をかけた。
「陛下、こちらへ」
妻である女性への言葉としても、王への言葉としても冷たく抑揚のない口調だった。その分抗い難い迫力にあふれており、自分が言われたようにエリッセは身を縮めるが、ルトエは食い下がる。
「なぜだ。どうしてその娘が『不幸の星』を持っている。グラシカルが私に憑けたはずのものを!?」
「……陛下」
一重まぶたの奥に隠された、細い瞳がほんの少しだけ揺れる。
だが結局、イライアスは譲歩してくれなかった。
「そのようなことは、あなたが気にすることではありません。そもそも就寝時刻はとうに過ぎているはずです。おいグラシカル、さっさとしろ」
「かしこまりました」
「嫌だ！　来るな!!」
なおもルトエは抵抗を続けているが、二人の男は彼女の意思など完全に無視だ。だがルトエは細い腕を振り回して、距離を詰めてくる兵士たちを振り払い、

「イライアス、グラシカル!!　説明しろ!!　……しないなら、もう一度王位を巡る争いが始まるようにしてやろうか!!」

震える手が上がり、華奢な首筋に爪を立てる。イライアスは一瞬眉を上げたが、続いてその口から出た台詞にはいささかの動揺もない。

「つまらない真似はおよしなさい。その程度の怪我であなたを死なせるものか。さあ、貴様ら、さっさとしろ」

あごをしゃくったイライアスに促され、兵士たちがもう一度ルトエへ手を伸ばす。

「夜空の支配者、月が二、至純の闇よ。風よ地を這え、地は空に代われ」

だが、突然響いた詠唱により、彼らはいっせいにその場に転んだ。

「『暗黒星』!?」

さすがに驚いた様子のイライアスを無視して、ディガンはなおも術を持続させ、兵士たちを床の上で跳ねさせた。鎧の中で散々に体を打ちつけた彼らは、やがて全員仲良く気絶してしまった。

「国王とこの小娘に経緯を聞かせてやれ」

金の瞳を光らせ、ディガンは有無を言わさぬ口調でグラシカルとイライアスに命じた。

ややあって、ため息をついたグラシカルは、ルトエではなくエリッセを見る。

「エリッセ」

思わぬディガンの行動にあ然としていたエリッセは、名前を呼ばれてはっと我に返る。
いつしかグラシカルの表情は、吹雪の中で見たのと完全に同じものに変わっていた。
「――もう分かったね。僕は君に、ルトエ国王陛下に憑いていた『不幸の星』を肩代わりさせた。この方を、この国をお守りするために」
グラシカルの〈煌〉が増大していく。一等星の輝きを前に、エリッセは金縛りに遭ったように動けない。
「せ、先生は、もしかして、〈綺羅星〉だったんですか……？」
やっとのことでそれだけ聞くと、グラシカルは呆気なく首肯した。
「昔の話さ。今となっては、それを知る人間はごく少数。箝口令が敷かれていることだから、普通は聞かれても答えないけどね」
私に教えてくれてよかったんですかという言葉を、呑み込む。
当たり前だ。グラシカルは今から自分を殺す気なのだ。
「『不幸の星』に下手に手を出せば、憑けられた者はたちまち死に至る。僕にも宰相閣下にも、うかつに打ち払うことは叶わなかった。『暗黒星』に喰らわせることも真剣に考えたけれど、賭けの要素があまりにも大きすぎたからね」
どうやらグラシカルも、『暗黒星』について書かれた例の古書を……ランゼが手を加えていないものを、読んでいるようだ。

「ある程度〈煌〉の強い人間になら、『不幸の星』を移せることだけは分かった。ひとまずは僕が背負ったけれど、そのままでは僕が死んでしまう。国力を保つため、一等星の数を減らすことは避けたい……だから、生贄を探していた」

生贄。

先頃ディガンが選んだ言葉は、グラシカルの口から出るとより冷たく響いた。

「そこに君という、絶好の条件を持った『一番星』が現れたんだ。未知数の素養を持ち、そして天涯孤独、つまりいなくなっても文句を言う人間がいない……」

「せ、せんせ、い……」

「グラシカル、そんなことを、お前が私のために……!?」

震えるエリッセの声に、驚きと非難、そして後ろめたい喜びを含んだルトエの声が被さる。苦い顔になったイライアスをちらりと見ながら、グラシカルは説明を続けた。

「君が『不幸の星』を背負ったままでいてくれるなら、それでよかった。幸いなことに、君ほどの素養の持ち主に憑いたせいか、不幸の度合いもだいぶ低くなっていたからね。でも、下手な真似をすれば術は再びルトエ殿下に戻ってしまう。ただでさえ体が弱いのに、この方は〈無明〉なんだよ」

〈無明〉とは、生まれつき〈煌〉を全く持っていない人間のことである。

「君のような素養の持ち主にでさえ、『不幸の星』は甚大な損害をもたらす。残念だけど、

『暗黒星』の力をもってしても喰らい尽くせるかどうか分からない」

冷たい黒い瞳でエリッセを見つめ、グラシカルは右手をエリッセに向かって突き出した。

「何に代えてもルトエ殿下をお守りすると、僕は誓いを立てている。やはり君には、『不幸の星』ごとここで死んでもらうしかない。……親を亡くした君をここまで育ててくれたのは、レドレリカという国だ。分かってくれるね」

増大した〈煌〉が一点に集中していく。しかし二人の中点の位置に、すっと誰かが足を踏み出した。

それまで黙って話を聞いていたディガンだった。やはり何かを知った瞳のまま、彼は平然とグラシカルの真正面に立って言った。

「オレは経緯を説明しろ、と言ったはずだが？　グラシカル」

「……だから、しただろう。どうした、先に死にたいのか？」

わざとらしい挑発にも、ディガンは乗らない。

「どうしてお前はここまできてすべてを語らない」

含みのある口調に、グラシカルは眉根を寄せる。

「単純に誰かに『不幸の星』を移すだけなら、選り好みする必要はなかったはずじゃないのか。その辺の兵士でも誰でも、無関係な人間に肩代わりさせてしまえばいい。なぜわざわざ、エリッセに憑けた」

その言葉は確かに、グラシカルの痛いところをついたようだ。しかし一瞬瞳を泳がせたのも束の間、彼は素早く反撃に出た。

「『暗黒星』ディガン・マキナウス。お前のことは僕もある程度は調べたことがある。傲岸不遜、傍若無人が信条のお前のような男が、どうしてエリッセを庇うような真似をするんだ。……かつては親友の〈煌〉さえ喰らおうとしたくせに」

グラシカルより大きくディガンが瞳を泳がせる。それを見逃すグラシカルではなく、すかさずもう一歩踏み込んだ質問を飛ばした。

「お前はおそらく、『不幸の星』を国王陛下に戻してからエリッセの〈煌〉を喰らおうとしているんだろう？　だが昨日のことといい、おかしいと思っていたんだ。まさか……」

「ち、違う！　勘違いするな!!」

格好をつけて出てきたくせに、思いきり狼狽しているディガンを、グラシカルがなおも追及する。

「二百年前の、お前の行動理由については諸説あるんだ。もしかするとお前は」

「う、うるさいうるさいッ!!　オレのことより貴様のことだグラシカル、エリッセがお前に聞きたいことがあるようだぞッ!!」

言い返されて、グラシカルはぴたりと黙った。

「――先生」

ディガンの言葉にうなずいたエリッセは進み出て、正面から大好きな人の顔を見つめる。
「先生、ひとつだけ教えて。私のお父さんが死んだのも、私に『不幸の星』を肩代わりさせるため……？」
数々の不運も不幸も、それが自分にだけ降りかかるものならばまだ構わない。
だけど貧しい生活の中無理をして、ディガンが形状変化させたのと同じようなワンピースを自分に贈ってくれた、ただひたすらに優しかった父。
彼が死んだのも、そのほうが都合よしと判断したグラシカルの仕業ならば。
「もしもそうなら……私、先生を許さない」
判断に迷ったようにグラシカルは視線を逸らす。だがその唇からは明確な言葉が出ることはない。
代わりに、グラシカルが放つ〈煌〉がぐんと高まった。
「え」
殺気めいたものを感じ取り、エリッセの背筋が凍る。
「えっ、ちょ、ま、まさか本当に……!?」
回答を拒否された挙げ句に殺されるのかとエリッセは怯えたが、グラシカルの視線は窓の外に向けられている。
「なんのつもりですか、ランゼ先生!!」

次の瞬間、玉座の背後にあった巨大な硝子が粉々に砕かれた。

王宮自体に風や寒さを防ぐ術がかけてあるのか、どっと冷気が流れ込んでくるようなことはなかった。

だが一部の硝子片は防ぎきれなかったらしく、足元に転がってきたきらめきにエリッセは悲鳴を上げた。

「きゃーきゃーのきゃー！　なにっ、えっ、ランゼ先生……!?」

グラシカルはまだ〈煌〉を高めただけで、術の行使はしていない。

そして外から硝子を打ち砕いた〈煌〉の持ち主に、エリッセはとてもよく覚えがあった。

「あら～。やっぱりすごいわグラシカル先生、見つかっちゃった～」

あどけなささえ感じさせる、屈託のない笑みを浮かべて夜空に浮かんだひとりの女性。

長いスカートの裾を軽く押さえつつ、細い足首をちらりと見せることを忘れないそのしぐさも含めて、間違いなく教師ランゼ・リトリスである。

「つ、ついて来てたんですか!?　それとも今……」

「うふふっ、どっちでもいいんじゃないかしら、そんなこと～」

驚愕するエリッセの腕を、後ろからぐいっとディガンが引っ張る。同時に床に降り立っ

たランゼへと、グラシカルが無言で問合いを詰めた。
「ええ、どうでもいいですよね、そんなこと。……エリッセ、君はディガンの後ろに」
小声でそう付け加え、グラシカルはまっすぐにランゼを見つめる。
表情は分からないけれど、その背がひどく張りつめていることはエリッセにも分かった。
「以前からあなたは、こそこそと僕の身辺を嗅ぎ回っていましたね。『暗黒星』についての本を〈導きの灯〉から盗んだのも、やはりあなたですか」
「えっ!?　ランゼ先生、あれって盗んだものだったんですか!?」
まさかの事実にエリッセは愕然とするが、ランゼは悪びれない。
「存在自体秘密の本ですもの～。公に調査もできず、みなさん困っていらっしゃいましたわねえ～。エリッセちゃんも予想通り、あなたにも誰にも相談しなかったみたいですし～。まあ相談したなら、彼女が盗んだと言うつもりでしたけど～」
にこにこしながら言ってのけ、空々しい言い訳を追加する。
「でも、グラシカル先生、分かって下さいな～。それもこれも、あなたが熱心に研究していることを知りたいという、乙女心の発露というやつで～」
「――なるほど。僕を思い慕う一心で、はるばる海を渡っていらした訳だ。今のご時世、ギガンスティからレドレリカに来るのは結構大変だったでしょうに、ご苦労様です」
それは冷ややかな台詞に、場の空気が止まった。

「えっ……、ギガンスティって、あのギガンスティですか!?」

一同を代表してエリッセがすっとんきょうな声を上げた。ディガンがすかさず「他にあるか馬鹿」と突っ込んできたが、その声もどこか虚ろである。

無理もない。ギガンスティといえば、央海という海を挟んで二つの巨大な大陸に分かれたこの世界の、北半分を占める一大帝国。

だが広いばかりで貧しい国土にはろくな作物が育たず、それゆえに豊かな南方国家連合に戦いを挑み、二百年前の南北大戦を引き起こした戦犯国家だ。

「……あらまあ～」

さすがのランゼも一瞬眼をぱちくりさせたが、すぐに復調してあっさりと腹を割る。

「うふふ、さすがにもう隠し通せないわね～。グラシカル先生がおっしゃる通り、私はギガンスティ王の密命を受けてレドレリカに来ましたの～」

同時にふくれ上がる、巨大な〈煌〉。

「ひいッ!?」

なまじ鋭くなったエリッセの感覚に、それは力強く訴えてくる。グラシカルやディガンといった一等星たちだけでなく、〈無明〉であるはずのルトエさえ、床に散った硝子片が一瞬浮き上がった様子から状況を察知したようだ。

一等星の称号数に制限があるため、二等星には本来一等星に相応しい〈煌〉を持ちなが

ら、その地位に留まっている者も多い。ランゼもその類いか、あるいは意図的に一等星の地位を得ないでいるだけか、等星を偽っているのだろう。

「ギガンスティは戦争に負けたから、一等星の称号をひとつしか持てないんだっけ……」

そんなことを思い出しつつ、いずれにせよ、はっきりしていることはある。

敵うはずがない。

これだけの〈煌〉を持つ者は、一等星の中にも多くないだろう。

「あら、みなさん、おとなしいわね～。ここでいきなりかかってくる、なんてお馬鹿さんがいなくて助かるわ～」

絶句する一同をにこやかに見やりながら、ランゼはぺらぺらとしゃべり続けた。

「王位継承権争いの最中、弟一派が放った禁呪で姉は死亡～。そのために国内は荒れに荒れ、ついには周辺国家を巻き込んで第二次南北大戦を引き起こす……なーんてすてきなシナリオを、誰かさんたちがぶち壊してくれたんですもの～」

「なんだと……!?」

声を上げたのは、ルトエを庇う姿勢で壁際で息を詰めていたイライアスだ。

「アリエーズ殿下たちでは、なかった、のか……」

思わず漏らしたひと言に、驚きに黙り込んでいたルトエが敏感に反応した。

「……そう思っていたから、大事にならぬよう、すべてをグラシカルの罪として、『不幸

の星』を始末させたんだな……？」

ランゼの言う通り、アリエーズが禁呪を用いて姉を暗殺したなどという話が広まれば、混乱は必至。それを防ぐために何も言ってくれなかったのかと、詰め寄るルトエにイライアスは諦めたように説明した。

「……実際に、暗殺者を出す計画もあったようでしたしね。アリエーズ殿下が否定しても、状況証拠を示されれば言い訳は難しいでしょう」

本当にルトエが死亡するようなことがあれば、疑いだけでも波乱を招いたに違いない。そしてランゼと、彼女を派遣したギガンスティ王とやらには、その波乱を巨大な戦争に向けて育てていく目論見が十二分にあったはず。

なんでそんなことを、という質問を口にする前に、エリッセは答えを理解した。そして、ぞっと全身総毛立った。

――ギガンスティ王は、自分たちが負けた戦争をやり直す気だったのだ。

「うふふ、やっぱりそういうことだったんですのね～。せっかく私ががんばって『不幸の星』を憑けたのに、王様は病弱ながらもぴんぴんしてて～」

「でも『不幸の星』が消えた訳じゃないのは分かっていたの～」と、語る口調は相変わらずのんびりしているが、その瞳は鋭く冷たい。

「だけど王宮を下手に探ると、私のことがばれちゃうかもしれないし～。そこで『不幸の

星』が王様を離れたのと同時期に、王宮から追放されたグラシカル先生に当たりをつけたって訳～」

軽い口調で経緯を説明したランゼは、難しい顔で考え込んでいるディガンに眼を留めた。

「まあ、でもおかげさまで、いろいろと面白いことが分かりましたわ～。特に、ねえ～？『暗黒星』ディガン・マキナウス～」

のんびりゆったり、間延びした常と変わらぬ口調ながら、ランゼの瞳には妖しい光が灯り始めている。

「あなたについてはあの本に、いろいろと書いてあったけど～。あれ、あなたが大好きだったショナエルちゃん側に都合良く、事実をねじ曲げているわよね～？」

「……ッ」

反射的にディガンを振り仰いだエリッセは、彼が短く息を呑むのを見た。

「ねえエリッセちゃん、あなたって結構努力家よね～」

「えっ、痛っ!?　は、はい!?」

絶妙の間合いで呼ばれたエリッセはまた首の筋を違えかけたが、ランゼは意に介した風なく、

「なら当然、ショナエル・アルケイシア……悲劇のシリウスについても、ちゃあんと覚えてるわよね～？　昇星試験で失敗するだけで、やればできる子よね～？　まあやっても

できないなんて、普通思っていても本人には言わないけど～？」
「ほっといて下さいッ!!　し、知ってますよ、それぐらい……!!」
ショナエル・アルケイシア。
それは、ディガンが生きていた二百年前、〈導きの灯〉に所属していた女性だ。高位の貴族の出であり、優秀な〈星〉でもあった。
将来を嘱望されていた彼女だったが、数年にわたる大戦が悲劇を起こした。戦争が始まって二年、南国連盟は劣勢に陥り、多くの〈星〉たちが死亡。
そのために年若いショナエルさんは、本来ならシリウスになれるまでの〈星〉じゃなかったって話も……、ひっ!?」
教科書には載っていない説をついでに披露したエリッセを、ディガンがものすごい眼で睨んできた。怯えるエリッセだが、ランゼに「続きはまだかしら～？」とやんわり脅され、そのまま話し続ける。
「ええと、とにかく南国連盟はかなり押されていて、ついにはまだ星団を卒業していないショナエルさんたちさえも、前線に駆り出される寸前になっていました……」
ところが戦争を引き起こしたギガンスティの帝王が突然崩御。それに伴う唐突な停戦の申し入れを、南国連盟は戸惑いながらも快く受け入れた。

しかし停戦が急すぎて、長く伸びきった戦線の末端までは話が伝わらなかった。

あるいは伝わっていたが、あと一歩で勝利を摑める、南国の豊かな実りを手に入れられる、と夢想していた兵士たちが故意に無視した、とも伝えられている。

「戦争は終わった、とほっとしていた〈導きの灯〉を、ギガンスティの兵士たちが襲って……、ショナエルさんを含めて、何百人も犠牲者が出たんですよね……？」

この「学徒虐殺」の悲報は多くの人々を嘆かせた。若者たちの犠牲に報いるため、レドレリカにはシリウスを含めた五つもの称号が与えられているのだ。

なんだか昇星試験を受けているような心持ちである。冷静に考えてみるとこの人は教師ですらないのではないか、と思いつつびくびく答えたのに、ランゼはエリッセを無視した。からかうようなその眼は、ひたとディガンに据えられている。

「本当はあなたが、シリウスに相応しかったのよね、ディガン～？」

いきなり歴史書と違うことを言われ、エリッセもぎょっとしたが、ディガンはそれ以上にぎょっとした様子だ。

「だけどあなたは、ショナエルちゃんのことが好きだったから～。どうしてもシリウスになりたかった彼女のために、『暗黒星』の汚名を着て、わざと〈夜の底闇〉に封印されたのよね～？」

グラシカルも眼を見張っているが、ディガンは反論しない。……つまり、それは事実な

のだろうとエリッセは思った。

「うふふ、でも、そこまでがんばったのに～。実力不足のシリウスでは、殺気立ったギガンスティの兵士に勝てなくて～。結局ショナエルちゃんも、みんな……」

「なぜ貴様が、そんなことまで知っている!?」

「ひぎゃっ!!」

叩きつけるように強く、ディガンが吼えた。あまりの大声にエリッセは文字通りその場から飛び上がったが、ランゼは思わせぶりに微笑むだけ。

「うふふ、なぜかしらね～？　それは、私と一緒にギガンスティに来てくれたら教えて差し上げますわ～」

差し出された手を、ディガンは無言で見つめた。

どうやらランゼがここまでやって来た理由のひとつに、『暗黒星』の勧誘があるようだ。……つまり、来るべき第二次南北大戦に備えるために。

「いいでしょ～？　だってもう、ショナエルちゃんは死んじゃったし～。あなた元々、愛国心に満ちあふれてるってタイプでもなさそうだし～」

てっきり「ふざけるな」と一蹴するかと思われたディガンだが、何も言わない。

「ちょ、ちょっとディガンさん……!?」

「――おい、ディガン。お前……」

沈黙に嫌な予感を抱いたのはエリッセだけでなかった。グラシカルまで眉をひそめてディガンを見るが、やがてディガンはふっ、と目元だけで笑った。
「そうだな。それも面白そうだ」

「えええええええええ!?」
仰け反るぐらいに大声を上げて驚いたエリッセの肩を、いきなりたくましい腕が抱いた。避ける暇もなく抱き寄せられ、硬直する肩を抱いたままディガンが確認を取る。
「ただし、この小娘も一緒だ。異存はないな？」
「えええええええッ!?」
連続してエリッセは悲鳴を上げるが、ランゼはにこにこしてうなずいた。
「ああ、ええ、いいわよ～。確かにエリッセちゃんには、私にもよく分からない、変な力があるみたいだし～」
うふん、と笑った瞳が猫のように細くなる。
「『不幸の星』があなたに憑いてるって分かった時、本当にびっくりしたわ～。しかもすごく効力が弱くなってて、あらこれ本当に私の術～？　ってとっても疑ったのよ～」
笑いながら、ランゼはグラシカルをちらりと見た。

「グラシカル先生に探りを入れても、乗ってこないし～。だから『暗黒星』の発動に失敗させて、ちょっと殺してみたらどうかな～、と思ったけど、まさか本当に『暗黒星』を呼び出しちゃうなんてね～？」

「ひえええええええッ!?」

不親切だとは思っていたが、よもや殺害前提だとは思わなかった。怯えて後ずさろうとしたエリッセに、その肩を抱いたディガンが奇妙に甘い声でささやきかけてくる。

「なあ、エリッセ。オレの見立て通り、やはりお前の中には大きな力が眠っているようだ。どうだ、オレ様と組まないか？」

「え、いや、そんなこと、急に言われましても……!!」

確かに万年六等星の汚名を返上したい、とは思っていたが、だからといってディガンと一緒にギガンスティに行くなんて御免だ。第一『不幸の星』はどうするのだ。

ちらりとルトエを見たことに気づかれたらしく、ディガンもなすすべもなく壁際にいる国王を見つめながら、

「『不幸の星』のことを気にしているのか？　そんなもの、あいつに戻してやればいい」

「え……え？」

動揺するエリッセに、それまで事態を静観していたグラシカルが気色ばんだ。

「ばっ……、黙って聞いていれば、何を言っているんだ!!」

イライアスも眼を見開いているが、ディガンに動じる様子はない。
「うるさいぞ、生徒を生贄にした外道が。さあ、エリッセ。遠慮することはない。あいつはお前に『不幸の星』を憑けて、のうのうと生きてきたような輩だぞ」
「え、で、でも、陛下はそんなこと知らなかったみたいですし、第一返したら……」
戸惑うエリッセに、ディガンはにやっと笑った。
「何せ〈無明〉だからな、当然今度こそ死ぬ。だがいいじゃないか。そんなことは気にせずに、オレと一緒にギガンスティに行き、第二次南北大戦とやらを始めよう。いや実はな、初めからそのつもりでお前を連れてきたんだ」
「ええ!?」
さっきと言っていることが違う、と言う気にもなれない。突然世界戦争開始の片棒を担げと言われ、エリッセは眼を丸くした。
「おい！　なんのつもりだ!?」
耐えきれなくなったらしく、グラシカルが二人に近づいてくる。イライアスも攻撃の気配を見せたが、ディガンは素早く攻撃の詠唱をし、彼らを壁際まで吹き飛ばしてしまった。
背面全体を壁に叩きつけられ、二人の唇から血が零れる。
脳震盪でも起こしたのか、共にぐったりして動かなくなった。
「グラシカル、イライアス!?」

「先生!?」

ルトエとエリッセが悲鳴を上げるが、ディガンは涼しい顔だ。

「気絶したか？　だが、お前たちのような強力な〈星〉にはもう少し深く眠ってほしいところだな。……なんなら、永遠に」

ディガンの〈煌〉がふくれ上がる。長い指先が、まずはグラシカルへと狙いを定めた。

「だっ、だめ、ディガンさん!!」

「よせ、『暗黒星』！　『不幸の星』は私が引き受ける、だから二人に手を出すな!!」

はっとしたように声を張り上げたのは、エリッセだけではなかった。必死に叫んだルトエは、そのままグラシカルとディガンの間に割り込んできて、

「元々私は、長く生きられない身。おまけに〈無明〉だ。弟アリエーズのほうが、王には相応しい」

腹違いの弟の名を挙げた彼女は、愛おしそうにグラシカルを見つめる。

「グラシカルは、いつ死んでもおかしくないと言われ、粗雑な扱いを受けていた私に優しくしてくれた。誠実で立派な男だ。おまけに一等星でもある。今後ギガンスティと事を構えるのならば、彼をここで失う訳にはいかない」

国王らしく、論理立った冷静な嘆願の底に、隠しきれない愛情がにじんでいる。

私と同じだ。不意に、エリッセはそう想った。

長子相続を守ってきたレドレリカ内に政権争いを勃発させてしまった、ひとりぼっちの王女様。そんな彼女が、たったひとりの理解者に想いを寄せないはずがない。

ルトエはグラシカルのことが好きなのだ。

そして、すべてを背負って王宮を出たグラシカルもたぶん、彼女のことを。

「……それに、イライアスにも手を出すな。彼もまた、非常に優秀な〈星〉だ。誰よりもレドレリカのことを想うこの男は、我が国の未来に必要不可欠」

床に倒れ伏したイライアスを一瞥し、ルトエは複雑な想いを秘めた口調でつぶやいた。

「エリッセと言ったな」

どんな顔をすればいいのか分からず、ただただ息を詰めていたエリッセをルトエが呼んだ。はっと我に返ったエリッセを見て、不器用な微笑みを浮かべる。

「知らぬこととはいえ、お前には悪いことをした。さあ、『不幸の星』は私に返……」

「馬鹿なことをおっしゃるな!!」

凍りついたように立ちすくむエリッセの耳朶を、演技とは思えない情熱のこもった声が打った。

唇を血で汚したイライアスだった。

頭痛をこらえるように顔をしかめながら、宰相はよろよろとルトエの前に立つ。
「王はあなただ。私の代わりなどいくらでもいる。あなたは死んではならない!!」
先ほどまでの冷酷さが嘘のような必死の形相に、ルトエが一番驚いている様子だ。
「な、何を言っているんだイライアス、いつも私にやる気を出せ、国王らしくしろと小言ばかりのくせに……」
そこでルトエは、自嘲的な笑みを浮かべて虚ろにつぶやいた。
「……なんだったら、お前が国王になってくれてもいいのだぞ？　一等星であり、私のように政務に私情を持ち込むこともない、お前こそが王の器……」
「だめです」
「わ、私は今でも、いつ死ぬか分からぬ身だぞ。どうせなら……」
「だめです」
理路整然とした宰相らしくもない、「だめです」の一点張りにエリッセも驚いてしまう。
しかし額に冷や汗すらにじませて繰り返すイライアスの表情は、グラシカルを庇おうとしたルトエと全く同じだった。
「あら、もしかして、宰相閣下ってば国王陛下に本気なの～」
緊迫した雰囲気をものともせず、ランゼがきゃっきゃとはしゃいだ声を上げる。
「他国との勢力均衡のためとは大義名分、体の弱い国王を妻とし国政を私物化するつもり

だって、結婚当時はずいぶん騒がれたのにね～。まあ私情を持ち込むような御方ではなさそうですけど～。あらでも、思わぬところに私情を持ち込んでいたのね～」

ころころと笑うランゼと苦々しい顔のイライアスを交互に見つめ、ルトエは信じられない、という顔をしている。

「お前、そんな……、昔私が告白した時は、『他に男を知らないからです』などとほざいたくせに……!!　グラシカルのことだって、王に恋愛は不要と切り捨てたくせに……!!」

痩せた肩を震わせるルトエの詰問に、イライアスはしばし考え込んでからこう答えた。

「……だめ、です」

この人でも言葉に詰まることがあるんだ……、と、エリッセも呆気に取られてしまったが、鼻先を赤く染め、明らかにルトエと眼を合わせない様を見れば、その心中は一目瞭然。

……となると、やはり。

「だ、だめですよ……」

なおも肩を抱いたままのディガンの上着の袖を摑み、エリッセはおずおずと口を開く。

「だって、私が『不幸の星』を返したら、陛下は死んでしまうんでしょう……？　できません、そんなこと……」

ルトエとグラシカルの間に存在する絆。それにより自分が『不幸の星』を背負ったこと

については、正直もやもやした気分はぬぐえない。

だが、ようやくすべての誤解が解けかけているのだ。なのに今ルトエが死んでしまっては、後味が悪いどころの騒ぎではない。

「――このまま一生、『不幸の星』を背負ったままでいいと？」

素早く問い返され、一瞬言葉に詰まった。しかし、じゃあやっぱり返します、とは言えない。

「それはまあ、ちょっと考えるところですけど……、でも、なんだかんだで八年間、一緒に過ごしてきた仲ですし……」

「お前も、オレを拒むか。そんなにオレと来るのは嫌か」

乾いた声が、ぽつりとディガンの唇から漏れる。

自信満々な笑みが消え失せると、その美貌からも派手派手しさは薄れ、代わりに見る者をぞくりとさせるような凄みが増す。

――下手に恋愛感情なんぞを持つと、男と女はすぐだめになるからな。

以前ディガンが口にした言葉は、その過去を知った今思い返すと、ひどく苦い。

ランゼが暴いた通り、ディガンはきっとショナエルのことが好きだったのだ。だが彼女は彼のことを、シリウスの称号を得るための障害物としてしか見ていなかった。

「……いや、その、わ、私なんかじゃ、ディガンさんと釣り合いが取れませんって。私、

そのショナエルさんほど、たぶん美人でもないし、たぶん強くもないし、たぶん性格もよくないし……」

「そんなことはない。……オレを封じたあの女よりは、少なくともお前のほうが優しいぞ」

ささやく声は、猫撫で声と言っていいぐらい甘い。しかし同時に、エリッセの肩を抱いた指に強い力がかかった。

「優しいお前にできないことは、オレがやってやろう」

「え……きゃあ!?」

悲鳴を上げたエリッセの全身を、一気にふくれ上がったディガンの〈煌〉が包み込む。その大きさたるや今まで感じたものの比ではなく、ランゼが垣間見せた本気に近い。なまじ鋭くなっているエリッセの感覚では、火傷してしまいそうなほどに熱く感じられた。気づけば、視界は黒と赤がまだらに入り交じった〈煌〉の紗幕に覆われている。すぐ側にいるはずの人々から断絶され、今エリッセはディガンの、『暗黒星』の腕の中という異世界にいた。

「……きゃ、きゃー!?　いやっ、ディガンさん、何するっ……きゃきゃきゃあああー！」

遅ればせながら悲鳴を上げたエリッセは、ぐっと身を乗り出してきたディガンの顔を見

てさらに悲鳴を上げる。

らんらんと金の瞳を輝かせ、薄笑うその顔はまさに獲物を喰らわんとする肉食獣。

早くも喰われたような気分になり、くらくらとめまいを覚えたエリッセの耳に、淡々としたディガンの声が響く。

「なあエリッセ。聞いての通り、オレは好きな女にさえ勝ってしまうほどの強力な〈星〉だ。だからオレは、誰にも負けられない。世界一強い〈星〉でいなければならん」

他者の〈煌〉を喰らう闇星。己だけが輝くことを欲する暗黒の星。

もしかするとディガンは、いっそ誰も敵わないほどの力を手に入れるため、『暗黒星』を開発したのだろうか？　ショナエルが負けても、仕方がないと思えるほどに。

「だからエリッセ、オレと一緒に来るんだ」

「え、……え？」

前後の脈絡がおかしい。この流れでどうして、自分が一緒に行く展開になるのだ。

「……もしかして……、ディガンさんも、寂しいんですか……？」

ふと思いついたことを、エリッセはおそるおそる口に出してみた。瞬間、ディガンの表情がわずかに強張ったのが怖くて、眼を伏せながら続ける。

「私が、あなたには私の気持ちなんか分からないって泣いた時……、怒りましたよね。あの時は、ディガンさんのことが羨ましくて仕方がなかったんですけど……、ディガンさん

は、好きだった人に、裏切られて……闇の中で、ずっとひとりで……」

あなたのように恵まれた人に、私の気持ちは分からない。

勝手に思い込んでそう泣きじゃくったエリッセだったが、ディガンには違う言い分があるのかもしれない。高すぎるその能力ゆえに、愛する女性に疎まれ、彼女の命を救えなかったディガンには。

「でも、私なら、あなたよりも強くなれるかもしれないから……そんな私なら、一緒にいられるって……、きゃきゃきゃあああああっ!?」

ずっとディガンが黙っているので、思いきってその顔を見上げたエリッセは盛大な悲鳴を上げた。

気づけば周囲は真っ暗で、光といえばディガンの〈煌〉とその金の瞳だけ。かっと開いた赤い口の中に、すべてを飲み込もうとする貪欲な牙が鋭くきらめいている。

「ははははは！　……面白い意見だな、小娘。だが違う。オレは世界一強い〈星〉であるために、お前に一緒に来いと言っているんだ。……オレと、ひとつになって、な」

『暗黒星』の本性をついにむき出しにしたディガンは、けだものの顔で哄笑した。

「忘れたのか？　オレは『暗黒星』。他者の〈煌〉を喰らう闇星」

忘れていた。

そういえばディガンは、こうも言っていたのだ。お前を喰らうために庇い続けてきたと。

「さあ、おとなしくオレに喰われろ、エリッセ!!　そして一緒に世界の頂点に立とう!!」
「きゃーきゃーきゃきゃきゃーきゃー頂点とか無理ですいやあああああー!!」
本能的な恐怖を感じ、エリッセはめちゃくちゃに四肢をばたつかせて抵抗する。至近距離に迫った死の恐怖が、彼女という生命の根源の部分を強く強く刺激した。

どこまでも澄みきった透明な光が、闇を凌駕し広がっていく。
体の中心から飛び出したその光により、エリッセの五体は一度ばらばらに分解された。その過程において巨大な赤い禍星が自分の中から飛び出して、渦巻く闇の中に吸い込まれていくのがはっきり分かった。
激しく渦巻く闇の奔流は、禍星を飲み込んだ途端に大きく身震いした。次の瞬間その力は爆発的にふくれ上がり、近くにあった大きな星を喰らわんと襲いかかる。
「きゃあああああああ〜」
どこかで聞いたような間抜けな悲鳴が響き渡り、そしてエリッセの体は透明な光に組み直され、あたりに静寂が戻っていく。

終章　春はまた来る

「……んん」

ひと声うなって眼を開いたエリッセは、床に横たわり謁見の間の高い天井を見上げていた。ふらつきながらも体を起こせば、少し離れたところにディガンも倒れている。

「……ディガン、さん……？」

寝ぼけた声で名を呼べば、しかめ面をしながらディガンは瞳を開いた。金の瞳にあの恐るべき光はなく、何かの欠片を払いながら起き上がると、エリッセを見てにやっと笑う。

「ふん、どうだ、分かったか。『不幸の星』すら吹き飛ばす、自分の力が」

「……え……？」

「ついでにご馳走様、とでも言っておくか。お前が弱らせた状態でも、『不幸の星』はなかなか喰い出があった。ちょっと予定と違ったが、ひとまずはこれで勘弁してやろう」

まだ事態が分からず、ふらふらしているエリッセの足がもつれた。倒れ込みそうになるのを、背後から伸びた腕が素早く支える。

「『暗黒星』よりなお信憑性の薄い、ただのおとぎ話だと思っていたよ……」

自分もふらふらしながら、しっかりとエリッセを支えてグラシカルはひとりごちた。

「〈太陽〉。『一番星』の中にごくごく稀に現れる、自らが光を放つ〈星〉、か……」

「自分で発掘しておいてその価値に気づかないとは、間抜けな野郎だ」

目覚めたエリッセの力をまともに喰らったせいか、全身微妙にすすけたディガンが修復術を用いながら近づいてくる。

「だが結局のところ、お前の人選は正しかった。この小娘でもなければ、お前がどれだけ守ろうが、あの『不幸の星』が憑いていて長生きできるはずもない」

ようやく本当に眼が覚めてきたエリッセは、ディガンの言葉にはっとする。それに気づいたディガンはくいとグラシカルへとあごをしゃくった。

「なんで今殺すのかと、お前はこいつに聞いたな」

今度はグラシカルを見上げれば、そこには見慣れた彼の観念したような笑みがある。

優しくて暖かな教師の、兄の、父の笑顔。いつもエリッセを支え、導いてくれた、太陽。

「『不幸の星』をお前に移し、その後すぐに殺せばよかった。それでなんの問題もなかった」

ルトエを救いたいだけならば、彼女以外の人間に『不幸の星』を移してしまえばいい。

究極的な不幸としての死を与えれば、役目を果たした禁呪は消える。

「だがそうはしなかった。わざわざ教師に身をやつし、ここまでお前を育て守った。つま

りこいつは、そういうやつなんだ」

守ってくれると約束してくれた。ずっと側にいて、大事にしてくれた。

ルトエを、エリッセをも守り抜こうとしていた。傲慢で偽善的な、誰よりも優しい、それがグラシカルの本心。

「……じゃあ、お父さん、は」

思わずエリッセが聞くと、ディガンは逆に聞き返してきた。

「お前の父親が死んだのは、グラシカルに会うより後か？」

「ま、前です」

「なら、こいつが殺したんじゃない。両親がいないことが、お前を選んだ理由のひとつではあるだろうがな。もっとも、本当はもっと前からお前に眼をつけていて、周到に用意した上で近づいてきた可能性はあるが」

薄笑いして言うディガンにも、グラシカルは「僕はよほど鬼畜だと思われているようだね」と苦笑するのみだ。そんな彼の腕を、エリッセはゆっくりとほどいた。

どうするつもりかと二人の青年が見守る中、エリッセは自分の足で立った。そのまま己の放った力によりでこぼこになった床の上を、そろそろと歩いてみる。

「私、もう、転ばない」

震える声でつぶやいて、エリッセは制服の裾をぎゅっと握った。

「いいことがあっても、わ、悪いこと、起こらない」
すみれ色の瞳に光るものを浮かべ、グラシカルを見上げてさらに言う。
「先生は、もう、私を殺そうとしない……」
「……それでも、殺そうとした過去は変わらないよ」
「いいんです」
感情が一気に高ぶる。くしゃくしゃに顔を歪めたエリッセは、小さな子供のようにグラシカルにしがみついた。
「もう、いいんです。先生が側にいてくれて、守って大事にしてくれて、私、本当に嬉しかったんだから……！」
わっと泣き伏したエリッセの背を、グラシカルは黙ってさする。えぐえぐとよく分からないことを言いながら泣いている彼女を見やり、ディガンはぼそりとつぶやいた。
「自分には人を見る眼があると、お前は言ったな。結局最初から、オレよりもお前のほうが正しかったって訳だ」
その言葉を聞いてエリッセはぱっと顔を上げた。
喜びの涙でぐちゃぐちゃの顔を向けられ、身を強張らせたディガンに勢いよく飛びつく。
「ディガンさん！」
「う、うわっ、なんだ、こらっ」

「ディガンさんディガンさんディガンさん！　馬鹿とか能なしとか優しくないとか言ってごめんなさい!!　ありがとう、ありがとう、ありがとう……!!」

ぎゅうぎゅうと胴を締め上げられた挙げ句、きれいにしたばかりの服にぐしゃぐしゃの顔をこすりつけられ、ディガンは何か言おうとした。

だが結局、彼はグラシカルがしたように、そっとエリッセの小さな背を撫でてやった。

「……全く、大した小娘だよ、お前は」

どこか誇らしげな響きを帯びた声でディガンが言うのを見ながら、グラシカルは気遣わしげに瞳を巡らせる。すぐにイライアスに助け起こされているルトエを見つけ、

「王、ご無事ですか？」

「……あ、ああ……」

途中で意識を取り戻したグラシカルが防御の術を放ち、ルトエを庇ったのだ。目立った外傷などはなさそうだが、イライアスの手を借りるその顔はどこか照れくさそうである。

一方のイライアスは、すでにいつもの鉄面皮を取り戻していた。

「ランゼとやらは逃げたようですね……失礼」

そう断るなり、素っ気なくルトエから離れていく。ようやくこの場に近づけるようになった兵士たちや〈綺羅星〉たちに、状況説明と指示を出すためだ。

小さな笑みを口元に浮かべながら、グラシカルはからかうように言った。

「大丈夫そうですね、よかった」
「ああ、口うるさいくせに口下手な男が、しっかり庇ってくれたようだからな」
後ろ姿のイライアスが、びくっと肩を揺らしたのが分かる。
その姿を見てルトエはくすくすと少女のように笑い、グラシカルはまぶしいものでも見たようにそっと瞳を伏せた。
「それはそうとグラシカル、いいのか、あれは」
「何がです」
「あのエリッセとかいう娘、お前の生徒なのだろう。『暗黒星』を名乗るあの男と一緒にいさせておいていいのか。おまけに何やらもめているようだが」
ルトエの言う通り、ディガンは偉そうに腕を組んでこんなことを言っていた。
「いいか小娘、実はオレ様の真の目的は、〈太陽〉として育ったお前の力を喰らうことだ」
「……あの、ディガンさん、ごめんなさい。私、ディガンさんの真の目的がなんなのか、本当に分からなくなってきたんですけど」
短い間に三回真の目的を聞かされればこういう台詞も出るだろうが、ディガンは強引に話を進めていく。
「幸いと言うべきか、どうやらまた戦争が始まる気配があるじゃないか。実戦を重ねれば、お前はより早く〈太陽〉として育つだろう。それにお前も長年慣れ親しんだ『不幸の星』

がなくなって、ちょっとぐらいは寂しく思っているはずだ」
「……は、はい？」
話が妙な方向に動き始めたことを悟り、エリッセはおそるおそる彼を見つめる。
まっすぐすぎるすみれ色の瞳から微妙に眼を逸らし、ディガンは高々と宣言した。
「そこでだ。『不幸の星』に代わり、この『暗黒星』様が正式にお前に憑いてやる！　たっぷり試練を与えてやるからがんばれ小娘！　そしてゆくゆくはオレに喰われろ！」
「えええええええなんでえええええ!?」
絶叫するエリッセを微笑みながら見つめ、グラシカルは穏やかな声音で言った。
「ディガンが『暗黒星』と呼ばれる禁呪を開発した経緯には諸説あります。もちろん他人の〈煌〉を奪い、自分だけが輝く〈星〉となりたかったからだという説が一番有力ですが」
エリッセが『暗黒星』について調べ始める以前から、グラシカルも『不幸の星』を消滅させる目的で『暗黒星』について調べていた。その際当たった数々の書物を脳裏に浮かべながら、彼は語る。
「ですが、著者不明の書物の中に、こういうものがありました。あの性格にあの能力のディガンは、誰からも恐れられ孤独だった。だから彼は自らの能力を失わせるための術を開発したが、うまくいかずに代わりに他者の〈煌〉を奪う術ができてしまった、と……」
名前も明かさぬ著者の単なる思いつき。ディガンに問えば一笑に付されるでしょうけど

ね、と付け加えるグラシカルの瞳は暖かい。

「それに、ディガンも言ったでしょう。僕の可愛い生徒には、人を見る眼があるんですよ」

少女に対する愛情を隠す必要はもうなくなった。何やらディガンと怒鳴り合っているエリッセを見つめ、グラシカルは優しい眼をしてつぶやく。

「もちろんあの子の育ての親として、そう簡単に渡そうとは思いませんけどね」

澄ました顔をして付け加えるのを聞き、微苦笑をしたルトエはこう応じた。

「……ならば私も一国の王として、優秀な一等星には自国に留まってもらわなければな。本当に戦争になるかはともかく、ギガンスティが不穏な動きをしていることは間違いない」

今後の『暗黒星』の処遇を匂わせて、ルトエはグラシカルへと視線を送る。

「そのあたりの処理も含め、任せられるな？　グラシカル。〈導きの灯〉教師と、国王の相談役ぐらいお前は兼ねられる男だろう？」

共犯者になることを求められたグラシカルは、軽く眼を見開いた後、にっこりと微笑んでうなずいた。

「お任せ下さい、国王陛下。それぐらい刺激があったほうが、朴念仁の宰相閣下も考え直され……、ああ」

ふっと瞳を細めた彼は、一面の窓の向こうを見やりつぶやいた。

「夜が明けますね」



途端にくしゅんと小さなくしゃみをした王の、肩からずり落ちそうなガウンを、グラシカルはわざとイライアスに見えるように直してやった。

地平の彼方から顔を出した第一の太陽・始原の黎。破壊された窓の外、冬の終わりの夜を打ち払って差し込む朝の光が、レドレリカ王宮とその城下町を明るく照らし始めている。

エリッセとディガンも無意味な言い合いをやめ、並んで夜明けの風景を眺めやる。

「きれーい……」

またディガンに馬鹿馬鹿言って怒られていたことも忘れ、エリッセは美しい光景に見入っていた。窓の隙間から吹き込む気まぐれな春風が、淡い金の髪を揺らして行き過ぎる。闇を払い、雪を溶かし、すべての〈星〉を輝かせる太陽の力に、エリッセは武者震いのようなものを感じていた。

「私が〈太陽〉なんて、信じられないけど……でも……、私、がんばります。がんばって、こんな風にきれいな景色を生み出せるようになります……！」

「……ふん、そうだな。まあまあ、きれいだ。あくまでまあまあで、十人並みだけどな」

かたわらの少女にちらりと視線を流し、ディガンはせいぜい興味がなさそうな顔を作ってつぶやいたのだった。

終

あとがき

祝・新シリーズ発売！　小野上明夜です。「イノセント・スター　光を欲する暗黒星」を手に取っていただきまして、ありがとうございました!!

「死神姫」をご存じの方は驚かれたかもしれませんが、今回はバトル多めのファンタジーです。デビュー時のあとがきに書きましたとおり、元々少年漫画とゲームで育っていますので異能力バトル燃える!!　のですが、アリシアは戦闘能力ゼロな上、視力も覚束ないのであまり詳細は書けず……今回はヒロインを含めて、ほぼ能力持ち設定なので嬉しいです。

とはいえ、本作のヒロイン・エリッセもあんまり強くはないので、大半はきゃーきゃー言いながら逃げておりますが……。騒いで笑って怒って泣く、感情表現豊かな子で書いていて新鮮です。腰が低そうに見せつつも、ちょこちょこ言い返しては反撃されてしまう、

どじっ子というよりへたれなヒロインをよろしくお願いします。

対する一応ヒーローのはずのディガンは、分かりやすいオレ様ナルシストを目指しました。参考文献は「メ●ズナッ●ル」です（本気）。〈太陽〉がオレに輝けと言っている!!某強公爵とは別方向に残念な人ですが、できれば彼のこともよろしくお願いします……。

もうひとりのヒーローであるグラシカルは、一見優しそうだけどどこか摑み所のない、涼しげなお兄さんです。今はまだ澄ましていますが、この先どんな顔を見せていくことになるかと思うと楽しみです。

ランゼやハーシエルやルトエなど、現時点では登場シーンが少ない人たちにも、今後スポットを当てていきたいですね。個人的にはティリス先生の貞操が気になっています。

ところで今回のイラストは、さらちよみ様にお願いできました!!　キャララフを拝見した時、ディガンがあまりにもかっこよくてむしろ申し訳ない気持ちになりました。いや、ディガンはかっこよくないと……、話が成立しないから、いいんだけど……!!

「死神姫」と平行して担当して下さる山内さんともども、今作はこのメンバーでがんばっていきますので、どうぞよろしくお願いします。

二〇一一年九月　　小野上明夜

■ご意見、ご感想をお寄せください。
《ファンレターの宛て先》
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
株式会社エンターブレイン
ビーズログ文庫編集部
小野上明夜　先生・さらちよみ　先生
《アンケートはこちらから》
http://www.enterbrain.co.jp/bslog/bslogbunko/

B's-LOG BUNKO
ビーズログ文庫

■本書の内容・不良交換についてのお問い合わせ。
エンターブレインカスタマーサポート：0570-060-555
（受付時間 土日祝日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス：support@ml.enterbrain.co.jp

お-3-13

イノセント・スター
光を欲する暗黒星
小野上明夜

2011年10月27日 初刷発行

発行人　浜村弘一
編集人　森 好正
編集長　森 好正
発行所　株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町 6-1
（代表）0570-060-555
発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3
編集　ビーズログ文庫編集部
デザイン　小菅ひとみ（CoCo. Design）
印刷所　凸版印刷株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化）等並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

ISBN978-4-04-727576-8
©Meiya ONOGAMI 2011 Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。

オトメ革命! ビーズログ文庫 フェスタ

おかげさまで、ビーズログ文庫は創刊5周年!
日頃のご愛読に感謝の気持ちをこめて、プレゼントフェスタを開催中!

【プレゼント詳細&応募要項】

〈フェスタ対象書籍〉

2011年9、10、11月のビーズログ文庫新刊

※本フェスタの帯がついている書籍

応募券5枚で1口

応募者全員にプレゼント!

「創刊5周年記念小冊子」

書き下ろし番外編などが満載の小冊子がもらえる!!

今年は2種類!!

<賞品コース>

Aコース 「恋する王子」「闇の皇太子」「双界幻幽伝」「海が愛したボニー・ブランシェ」ほか(収録予定)

Bコース 「神の獣と天の華」「イノセント・スター」「ダブル・コントラクト」「お庭番望月蒼司朗参る!」ほか(収録予定)

※内容は変更になる場合もあります。

<応募方法>

フェスタ対象書籍のオビについている応募券【5枚1口】を郵便はがきに貼り、次の項目をご記入のうえ、以下の宛先までお送りください。

1:郵便番号 2:住所 3:氏名 4:電話番号 5:性別 6:年齢 7:職業
8:ビーズログ文庫へのご意見・ご感想 9:希望する小冊子のコース

【宛先】

〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
エンターブレイン
「ビーズログ文庫"オトメ革命!"フェスタ」係

※ご応募には5枚の応募券が必要です。5枚1口であれば、対象書籍の組み合わせは問いません。
※複数口の応募は可能ですが、ハガキ1通につき1口のみの応募受付となります。

応募〆切 2011年12月20日(当日消印有効)

《注意事項》 ●応募券はコピー不可。●必要事項の記入漏れ、応募券の不足、文字が判読できない場合、応募を受理できません。●応募券を切り取った後のオビは、賞品が届くまで保管してください。●賞品の発送は2012年4月予定。また、発送先は日本国内に限ります。●応募者の個人情報は、弊社のプライバシーポリシー(URL:http://www.enterbrain.co.jp/)の定めるところにより、取り扱わせていただきます。

<お問い合わせ先>

エンターブレイン カスタマーサポート
TEL:0570-060-555
(土日祝日を除く12:00~17:00)
E-MAIL:support@ml.enterbrain.co.jp

9784047275768

ISBN978-4-04-727576-8
C0193 ¥560E

1920193005608

発行：エンターブレイン

定価：本体560円＋税

B's-LOG BUNKO

イノセント・スター **光を欲する暗黒星**

＜星＞と呼ばれる能力者であるエリッセは、何をやっても失敗ばかりの不幸体質。階級も万年最下位の六等星だ。恩師グラシカルに報いようと、能力を増強する禁呪・暗黒星に手を出した！　……はずが、オレ様ディガンが登場!?　「お前の望みを叶えてやろう」「きゃきゃきゃのきゃー!?」――凶悪に笑う彼に拉致されてしまったエリッセ、目指すはなぜか王宮!?　星が煌めくラブコメ・ファンタジー、開幕!!